

Title	カタカナ表記の〈機能〉に関する一考察
Author(s)	李, 宰錫
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87783
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

令和3年度

大阪大学大学院 博士学位申請論文

カタカナ表記の
〈機能〉に関する一考察

李 宰錫

第1章 研究の方向性と用語の定義	1
1. はじめに	1
2. 論文の方向性	1
3. 本稿の用語の設定、および前提について	3
第2章 戦前の<カタカナ>表記機能の概観	12
第1節 <語彙>に見られる<カタカナ>表記	13
第2節 <国語教科書>に見られる<カタカナ>表記	17
1. 先行研究	18
2. 本節の方向性	22
3. <国語教科書>に見られる<内容><文体><表記>要素の関係	25
3. 1. 時期別の傾向	26
3. 2. 教科書別の傾向	30
4. <国語教科書>に見られる<カタカナ>表記の傾向	34
第3節 <雑誌>に見られる<カタカナ>表記	37
1. 先行研究	37
2. 本節の方向性	40
3. <雑誌>に見られる<内容><文体><表記>要素の関係	43
3. 1. 『中外医事新報』	43
3. 2. 『医学中央雑誌』	49
3. 3. 『海と空』	51
4. <雑誌>に見られる<カタカナ>表記の傾向	52
第4節 新聞の<告知文>に見られる<カタカナ>表記	56
1. 先行研究	56

2. 本節の方向性	57
3. <告知文>の<内容><文体><表記>要素の関係	62
4. 新聞の<告知文>に見られる<カタカナ>表記の傾向	65
第5節 <漫画>に見られる<カタカナ>表記	69
1. 先行研究	70
2. 本節の方向性	71
3. <漫画>に見られる<カタカナ>表記の傾向	75
4. <漫画>に見られる<カタカナ>表記の機能	79
第6節 戦前の<三要素>の関係性と<カタカナ>表記の機能	84
1. 戦前の<内容><文体><表記>要素の関係	84
2. 戦前の<カタカナ>表記の機能	86
第3章 戦後の<カタカナ>表記機能の概観	91
第1節 <語彙>に見られる<カタカナ>表記	92
第2節 <サブ・カルチャー>資料に見られる<カタカナ>表記	97
1. 先行研究	98
2. 本節の方向性、及び用語の設定	100
3. <サブ・カルチャー>資料に見られる<カタカナ>表記の傾向	108
4. <サブ・カルチャー>資料に見られる<カタカナ>表記の機能	117
第4章 日本語の<カタカナ>表記の機能	124
1. <カタカナ>表記の機能	124
2. まとめ、及び今後の課題	133

参考文献	136
参考資料	143
＜資料 1＞ 国語国定教科書の＜内容＞＜表記＞＜文体＞	145
＜資料 2＞ 『中外医事新報』の＜内容＞＜表記＞＜文体＞	153
＜資料 3＞ 『海と空』の＜内容＞＜表記＞＜文体＞	179
＜資料 4＞ 新聞の告知文の＜内容＞＜表記＞＜文体＞	181

第1章 研究の方向性と用語の定義

1. はじめに

現代日本語は<平仮名>、<カタカナ>、<漢字>のみならず<英語><数字><記号>などの多様な表記体系からなっており、日本語話者がこれらを適宜利用して自分の伝えたい内容や意図を相手に伝達する。しかし、同じ音価を持っている<平仮名>や<カタカナ>の間の使用頻度などの優劣関係はあるものの両表記が同時に用いられることはかなり特徴的で、日本語の特徴の一つであると言える。英語においても<小文字>や<大文字>の使い分けがあるがこちらは文法として用いられることが多い一方、日本語の表記は文法のように厳格な使い分けがされていないにも関わらず、日本語話者はとある基準に従ってこれらを使い分けられているように思われる。が、この<カタカナ>の機能については研究ごと異なる見解が見られており、未だ議論の余地があると考えられる。

本稿は、日本語の表記体系の一つである<カタカナ>の機能を明らかにすることを目的としている。日本の社会構造の変化、それに伴う言語意識の変化が著しく見られた<明治期>以後の資料に見られる<文>を用い、<カタカナ>表記が如何なる目的で書かれたか、その結果如何なる<イメージ>が与えられるようになったのかを総合し、<カタカナ>表記の機能を明らかにする。

2. 論文の方向性

本稿の目的は明治期から現代に至るまでの時期の<文>に見られる<カタカナ>表記の機能を明らかにすることである。その中で、重要になる要因の一つは、文の<内容>と<文体><表記>要素がある程度関係を持っているという認識で

ある。例えば、日本語話者は、和歌や日常生活に関する物事は<平仮名>表記と<口語体>に近い文体を用い、専門分野の知識、及び公的な物事に関するものは<カタカナ>や<漢文>表記と<文語体>に近い表記で用いることが望ましいという抽象的認識を社会構成委員が無意識のうち共有している。これに関して、片山久留美（2016）は、「平安時代において、<和文体のものはひらがな主体表記、漢文脈のものは漢字文あるいは漢字片仮名まじり表記>を持っていたが、中世から表記・文体の和漢混淆が進んだ結果、多様な方略が現れることになった」と指摘している。言い換えると、このような<表記>や<文体>の枠組みは、平安時代から少なくとも明治期前後まで意識として残存し影響を与えたということになる。

ここで、<表記>要素が<内容>や<文体>要素との関係性の中に含まれていることに注目されたい。後述するが、<知識>に関する<内容>のものには<漢字片仮名交じり>表記と<文語体>で書かれる傾向が見られている。しかし、全ての<知識>関連の物事に<漢字片仮名交じり>表記や<文語体>が用いられるわけではなく、更に、片方の要素のみが用いられると、<知識>というイメージが相対的に弱くなると感じられるようになる。その中で、<知識>というイメージを与える要素が<内容>自体か、もしくは<表記>要素・<文体>要素のいずれかであるかが明確ではなく、<文体>機能が<表記>機能であるかのように誘導している可能性もあるとも解釈できる。すなわち、<表記>要素のみを研究対象にしてその機能を突き止めても、それが果たして<表記>の独自の機能であるとは言い切れない状態である。しかし、従来の研究では両方の要素を区分せず同一のものとして扱っていることが多く、その関係性を明確に述べているものはほぼ見られない。なお、この傾向は戦前のみに見られる特徴の一つで、国語施策により一般的な文の表記が<漢字平仮名交じり>に、文体が<口語体>となった戦後から三要素の関係性は完全に解体されたと言えよう。本稿では、<カタカナ>表記の機能を可能な限り明確に捉えるためには上述の三要素の関係性と構造の

把握が先行されるべきであると主張する。よって、戦前の時期の資料の考察においては、①<内容><文体><表記>の三要素の関係性と構造、②その構造の中で<カタカナ>表記の機能、という二つのものが同時に行われることとなる。

また、今までの表記研究は<語彙>の観点から行われていたものが多い。特に、語彙表記も上記の三要素の影響を受けて決められていた可能性が挙げられている。これに関して遠藤好英（2000）は、明治期の滑稽本では外国の物事が漢字・カタカナと併用されている一方、政治小説では漢字表記のみで仮名表記は見られないと述べ、<内容>や<文体>による<語彙の表記>の使い分けが存在していたと主張している。しかし、本稿で取り扱う三要素の関係の明確化は<表記>機能を突き止めるためのプロセスの一つであり、それ自体が目的であるわけではない。よって、いかなる要素がその関係性を呼び起こしているかについては言及せず、<表記>機能を明らかにすることにのみ集中する。また、語彙表記に関する研究は非常に多いため本稿でもその研究を用いるとするが、<文>とレベルが異なっているため先行研究をまとめて提示する程度にしたいと思う。

3. 本稿の用語の設定、および前提について

本章では、本稿全体で用いる用語を定義する。一般的な用語をやや異なる意味で用いることが多いため混乱することが多々あるかと思われるが、それに関してはご了承願いたい。なお、臨時的に用いるものについては、その用語に注を付ける形で説明を取り行うこととする。

① 時期区分について

言語体系および言語意識は社会構成員の意識の中で連続的かつ緩やかに生成・変化・拡張される過程で共通的な社会的地位を獲得したものである。よって、現代日本語に見られる機能や現象は過去の意識と関係を持っているもので、突如現れたものではない。なお、特定の時期に見られる言語の特徴を正しく捉えるため

には、明確な時期区分基準を設ける必要がある。本稿では、その出発点を〈明治期〉、更に明確にすると〈明治維新〉前後から本稿が書かれている 2020 年代までの時期を考察対象とし、〈明治維新〉から〈終戦〉までを〈戦前〉、〈終戦〉から現代までを〈戦後〉と区分する。〈終戦〉の〈戦争〉は〈第二次世界大戦〉と指すものであり、明治期から昭和にかけての広い時期を一つの時期として捉えてもいいのかについてはやや議論があると思われる。しかし、本稿では〈日本語体系に大きな変化を与えた時期〉を区分点として用いており、〈明治期〉と〈第二次世界大戦の終戦〉はその基準として適切であると判断できるため、〈戦前〉の時期を細かく区分することは行わないこととする。

すでに述べたことであるが、言語体系の変化は社会の変化と深くかかわっており、〈明治維新〉は外部の要因が強く影響し、〈終戦〉は外部の要因と内部の要因が強く影響していると考えられる。その点において、その両時期を言語の変化の時期として捉えることは妥当であると思われる。実際、〈明治維新〉以後は言文一致運動と日本語の文字体系の整備、〈終戦〉以後は日本語の標準的表記と文体の設定、仮名遣いの整備などの言語的变化が起こっている。以上をまとめ、本稿での時期の区分を以下のように提示する。

(1)戦前：明治維新（1867 年（1800 年代半ば以後））から終戦（1945 年）までの時期

(2)戦後：終戦以後（1946 年）から現代（2020 年代）までの時期

② 〈カタカナ〉と〈平仮名〉について

本稿では、〈カタカナ〉表記と〈漢字片仮名交じり〉表記を〈カタカナ〉で、〈平仮名〉表記と〈漢字平仮名交じり〉表記を〈平仮名〉で取り扱い、形態上の視覚的な特徴を述べる際にのみ両者を区分して指すこととする。例えば、〈オハヨウゴザイマス〉と〈オ早ウ御座イマス〉という文を前者の場合は〈カタカナ

＞、後者の場合は＜漢字片仮名交じり＞と称するものの、全体的に区分する際には同じ＜カタカナ＞として取り扱うこととする。

また、＜漢字片仮名交じり＞にも＜カタカナ＞が含まれているため、両者を同レベルのものとして取り扱っても＜カタカナ＞表記の機能を概観することには問題がないと考えられる。更に、本稿の最大の目的の一つは＜カタカナ＞表記の中核的な＜機能＞を突き止めるもので＜漢字交じり＞文との違いを突き止めることではないため、両者を同レベルのもので取り扱っても差し支えないと判断した。また、＜漢字片仮名交じり＞は＜漢カ交＞で、＜漢字平仮名交じり＞は＜漢ひ交＞と略して用いることとする。以上をまとめ、本稿での表記区分を以下のように提示する。

(1)平仮名：＜平仮名＞や＜漢ひ交＞を含んだもの。形態的に区分する場合にのみ用語を区分する

(2)カタカナ：＜カタカナ＞や＜漢カ交＞を含んだもの。形態的に区分する場合にのみ用語を区分する

③ ＜口語体＞と＜文語体＞について

＜口語体＞や＜文語体＞といった＜文体＞の定義は研究によって異なっており、＜和文折衷体＞や＜漢文訓読体＞などのバリエーションも非常に多く存在しているため、考察に入る前に本稿なりの定義を明確に抑えておく必要がある。本稿では、＜文体＞の種類は非常に多いものの、＜表記＞要素が中心になっているため、少々乱暴ではあるが、＜口語体＞と＜文語体＞という二つの基準で大きく分けることとする。なお、その定義を、1916年国語審査委員会が編纂した『口語法』に求める。『口語法』では、名詞、代名詞、数詞、動詞、形容詞などの品詞の特徴をもとに＜文体＞を分けており、特に＜動詞＞や＜形容詞＞においては既存の＜四段活用＞ではない特殊な活用が見られていると述べている。

また、深澤愛（2003）は、明治期の総合雑誌である『太陽』には一つの文章の文末に〈なり〉や〈だ〉が混在しており、〈文語体〉と〈口語体〉の両方の要素が同時に用いられているものが多々見られていると指摘している。言い換えると、当時の〈文体〉の区分においては〈文末表現〉も非常に有効であるということである。しかし、このような揺れが認められているため、〈文末〉や〈文法〉要素のみで〈文体〉を区分することはやや困難であると思われる。よって、本稿では、文末が〈なり〉や〈たり〉であっても、文全体の文法要素が〈口語体〉のものであると〈口語体〉として扱い。文末が〈である〉などであっても、文全体の文法要素が〈文語体〉のものであると〈文語体〉として扱うなど、文全体を基準に両者を分けることとする。以上をまとめ、本稿では文体区分は以下のように提示する。

(1)口語体：文が〈である（あります）〉や〈だ（です・ます）〉調で終わるもの、文法活用が五段に準ずるものなど、文全体的に言文一致体である〈口語体〉要素が多く見られる文体

(2)文語体：文が〈なり・たり〉や〈や・ぞ〉調で終わるもの、文法活用が四段に準ずるものなど、文全体的に平安以後の伝統的な〈文語体〉要素が多く見られる文体

④〈機能〉と〈プロトタイプ〉について

本稿の目的の一つである〈カタカナ〉表記の機能を明確にすることは、その根底に存在する要素を突き止め、本来の役割、すなわち原型を明らかにすることに繋がる。〈原型〉は〈プロトタイプ〉という用語として現れることが多く、庵功雄（2012）はその用語を以下のように定義している。

プロトタイプ（典型）というのはある概念において中心的に連想されるもののことです。例えば、「鳥」という語を聞いたときにすぐに連想され

るのは「鷺、鳩、つばめ」などであり、「ペンギン、にわとり」などはそうではないということが実験的にも確かめられていますが、そうしたすぐに連想されるものが「鳥」のプロトタイプです。

プロトタイプという概念は属性（素性）の束として考えられます。つまり、その類によって関与的な属性をより多く持っているものがよりプロトタイプに近いということになります。例えば、「鳥」の属性として、<飛ぶ><羽を持つ>という2つの素性を認めるとすると、「鷺、鳩、つばめ」などはその素性を共に持つのに対し、「ペンギン、にわとり」などは<羽を持つ>という素性は持つものの<飛ぶ>という素性は持たないため、前者の方が後者よりも「鳥」のプロトタイプに近いということになります。（庵功雄『新しい日本語入門 ことばのしくみを考える 第2版』（2012）、p. 95）

この定義を踏まえると、<プロトタイプ>とは<根底に存在する共通した属性の束>ということになり、その属性を多く持っているほど<プロトタイプ>に近いということになる。鳥類の特性を集めて<鳥>たり得る核心的な要素を突き止めたように、<カタカナ>表記においても、かなり多くの観点からの傾向を重ね合うことで、より根本的で核心的な要素を突き止めることができると期待できる。

一方、奥田靖雄（1996）は、動詞<みる>に如何なる漢字を当てるかによって非常に多様な意味の表出ができる一方、それらには共通した意味が内在していると述べ、それを<中核的な意味>、すなわち<プロトタイプ的な意味>であると述べている。上述の庵（2012）と奥田（1996）の提示している<プロトタイプ>は一見似ているものの、庵（2012）は属性の束を、奥田（1996）はその<属性>自体を<プロトタイプ>と称しており、かなり混同が見られている。

本稿は、＜カタカナ＞表記の根底機能を明らかにする目的を持っているため、方向的には奥田（1996）の＜プロトタイプ＞の定義に非常に近いけれども、一般的な＜プロトタイプ＞という用語との誤解を避けるため、＜機能＞という用語を用いることとし、＜プロトタイプ＞という用語は一切用いない。更に、＜機能＞という用語が＜プロトタイプ＞という用語よりもより一般的なものであるが、＜根底要素＞という用語で用いる際には鉤括弧を施した＜機能＞のように提示し、それ以外の一般的な場合は鉤括弧を施さずそのまま用いることとする。以下、本稿での＜機能＞という用語の意味を簡略に提示する

(1)＜機能＞：根底に存在する根本的な要素の一つ、＜プロトタイプ＞を構成する要素のこと

(2)機能：(1)の意味のない一般的な語彙

④ 多様な観点の重ね合わせによって＜機能＞を明らかにする研究方法について

本稿で取り扱う＜カタカナ＞表記は、少なくとも現代日本語においては非常に多く用いられ、研究によってもその＜機能＞が異なっている。後述する内容であるが、戦前においては＜公的＞＜知識＞＜音声＞、戦後においては＜若者のイメージ＞＜アンスタンダード＞＜外国＞＜冷静＞などの＜機能＞が見られるのという結果が見られ、その＜機能＞は非常に多岐にわたっている状態である。本稿は、個別の資料で見られる傾向を重ね合わせ、そこから見られる共通項を＜機能＞として捉えるというプロセスを採用する。すなわち、ミクロな観点からの研究を多く行い、それらをマクロな観点に移行するものである。このような研究方法に関しては、佐藤芳明（2016）のものが非常に役に立つ。佐藤（2016）の研究は日本語ではなく英語の文法を扱ったものであるが、日本語の＜カタカナ＞表記と

同様かなり多様な意味を持っているとされる<to 不定詞>の文法要素の<機能>を、多様な例文を重ね合わせることで提示している。

佐藤 (2016) は、<to 不定詞>の基本的性質であると思われる<未来指向>という従来の認識では捉えられない例外的な使い方が非常に多く存在していることを指摘しながら、より広い視野での意味論的考察が必要であると主張している。以下の (1) と (2) は、発話する時点で<まだ起こっていない状態>を表すのに対し、(3) と (4) は<すでに起こった過去の状態>を表しており、意味の相違が発生している。

- (1) My dream is to become a movie star. (私の夢は映画の俳優になることです)
- (2) To be or not to be; that is the question. (生きるべきか死ぬべきか、それが問題である)
- (3) I' m glad to see you here. (ここであなたに会えて嬉しいです)
- (4) I saw him to be a liar. (私は彼を嘘つきだと見た)

佐藤 (2016) は (3) や (4) のようなものを例外として扱うのではなく、これらをも広くカバーできる新しい定義を提示する必要があると述べながら<TAM-complex>¹という概念を採用し、本来<前置詞 to>という方向性 (空間的) の意味から<to 不定詞>という未来指向 (時間的) の意味へと拡張し、更に認識判断的という命題的な意味を複合的に持つようになったと主張している。佐藤

(2016) はこの<機能>を明確に提示していないが、既存の<未来指向>という時間的意味に<認識>というモダリティ要素を入れることで、例外となったものの一部をもカバーできるより広い<機能>の提示に成功している。

¹ テンス・アスペクト・モダリティ (Tense-Aspect-Modality: TAM) を指す。佐藤 (2016) は、この三つの要素は混成的なもので、各々の領域を明確に分けることは難しい上に、絶えず変化している言語の特性を考えると、このような観点からの接近は非常に有効であると述べている。

一方、日本語体系では<表記>を文法要素として取り扱っていないため、英語とまったく同様に捉えることはできないと思われる。しかし、上記の<to不定詞>は本来<未来志向>という意味合いでのみ認識されてきたが、実際は<テンス><アスペクト><モダリティー>という三つの要素が関係し中核的な意味をなしていたことを考えると、現代日本語において多岐にわたっている<カタカナ>表記における中核的な機能も少しは明確化できると期待できよう。そのため、<表記>要素のみ概観せず、<文体>や<内容>の要素の影響やその関係性の中での機能を明らかにすることは意義があると思われる。

⑤ <公的>および<知識>に関する<内容>の枠組みに関して

一般的に、戦前の時期には<公文書>および<法律>に関する物事を表すには<漢カ交>と<文語体>が好まれたという認識があり、1889年公布された『大日本帝国憲法』にも以上の組み合わせが選択されている。実際、西洋の知識関連書籍の翻訳においても<漢カ交>と<文語体>の組み合わせが好まれ、<知識>関連分野との膠着も認められている。

清水卯三郎(1874)は、「或曰、爾此ノ編ヲ述ル何ソ平假名ヲ以テセサル。曰、誰々否々、我平假名ノ説ノ如キ只後進ノ人ニ便スル耳。此ノ編ノ如キ、偏ニ学者ニ謀ル者ナリ」(『明六雑誌』第七號、「平假名ノ説」)と、<漢カ交>表記が当時の学者向けの文に好まれていたことを述べているが、これは、知識分野の<内容>と<表記>の膠着認識が知識人の間で共有されていたことを意味していると思われる。これに関して、大橋崇行(2014)も同様の考察を行なっている。大橋(2014)は、西洋から流入した知識分野の書籍を翻訳する際に<漢カ交>表記と<文語体>が用いられる傾向があるが、それは英語を含むラテン語の統語構造が中国語と同じSV0であるためであると述べている。明治期以前までの日本の知識関連書籍の大多数は中国からのもので、これらは<漢文>で書かれ、横に<カタカナ>を添えて読み下していく形で構成されているものが多い。大橋

(2014) は、西洋語で書かれた書籍を日本語へ翻訳する過程で、過去の〈漢籍〉で用いた方略がそのまま選択されることは非常に自然であったと述べている。しかし、日本人が書いた知識書籍は、文体は〈文語体〉であっても必ずしも〈漢カ交〉表記が選択されておらず、その選択において単なる意識のみならず異なる要因が影響をも与えている可能性をも提示している。よって、本稿においては、少なくとも〈公的〉や〈知識〉に関する〈内容〉の物事は〈漢カ交〉表記と〈文語体〉の組み合わせが好まれる〉という認識が存在していたことを認め、この傾向が実際見られているかをも検討し、論を展開していきたいと思う。

また、同じ研究者の氏名が同じ章の中で繰り返し用いられる際には、研究者の姓と研究の年度のみを取り上げ、異なる章にて再登場する際には改めて全体の氏名と年度を提示する。例えな、田中太郎（2020）となった場合、同じ章の中に登場する際にはなるべく田中（2020）と苗字と年度のみを取り上げ、他の章で改めて言及される場合には田中太郎（2020）と全体の名前を取り上げることとする。

第2章 戦前の〈カタカナ〉表記機能の概観

本章では、戦前の国定国語教科書（以下、教科書）、雑誌、新聞の告知文（以下、告知文）、連載漫画の資料に見られる〈漢カ交〉の表記状況を概観する。各部分で述べる内容を先取りすると、〈国定教科書〉が用いられた時期は全国で一時的な教育がなされた時期であるため教育による意識の統一化が可能であったと思われるため、〈雑誌〉や〈新聞〉は当時の一般大衆や知識人の間で用いられた媒体であるため、意識を垣間見る資料としても相応しいと判断した。ただし、〈漫画〉は前の資料と性格が異っている点、漫画の形式や変化を論じた研究は多数あるものの〈言語〉に集中した研究は殆ど行われていない点から、既存の研究と異なる観点からの概観ができることが期待できるため資料として取り扱うことに意義があると判断した。詳細に関しましては、各資料のところでもう一度述べることにする。

また、先述したように、戦前においては〈特定の〈内容〉は特定の〈表記〉や〈文体〉で書くべきである〉という認識としての枠組みが存在していたと思われるため、その関係性の把握を先行しなければならないと判断し、こちらの傾向も同時に概観する。戦前のカタカナ機能を概観するために取り扱う資料群の時代を視覚的に簡略にまとめたものが、以下の〈表-1〉である²。

² 明治維新は一般的に1868年からであると認識されているが、〈表-1〉では時期を区切っているため、1870年からであるとする。なお、ここで取り上げる各資料の時期は先行研究を含めた、実際の考察時期であり、調査対象の時期とは異なることは先に断っておく。例えば、新聞の広告文の場合、調査対象となったのは1945年までであるが、〈公的団体〉の〈文〉の〈漢カ交〉表記が見られたのは1912年までであるため、1910年までとする。実際、〈個人〉や〈一般団体〉の〈文〉の〈漢カ交〉表記は継続として見られている。

＜表－1＞ 各資料の対象時期

	1870	75'	80'	85'	90'	95'	1900	05'	10'	15'	20'	25'	30'	35'	40'	45'
教	■															
雑	■															
告	■															
漫	■															

資料は、＜教科書＞、＜雑誌＞、＜告知文＞、＜漫画＞の順で提示する。＜教科書＞は他の資料群を全てカバーする広い時期に用いられ、＜教育＞という特殊な場面の性質上、かなり影響力が強かったと推測できるためである。次に、＜雑誌＞資料は＜告知文＞より長い時期に跨っているため、二番目で概観する。＜漫画＞は他の資料群と性質がやや異っているため、個別に取り扱うべきであると判断し、最後の部分で取り扱う。

本稿は、＜カタカナ＞の＜機能＞を明らかにすることを目的としているが、全体的な＜表記＞研究は＜語彙＞要素を中心に行われてきたため、＜語彙＞における＜カタカナ＞表記の＜機能＞を先に押さえておく必要があると考えられる。この作業を通じて、より明確な＜カタカナ＞表記の＜機能＞を提示することができると期待できる。よって、戦前の＜語彙＞観点からの＜カタカナ＞表記の＜機能＞傾向を、先行研究をまとめる形で簡略に取り上げ、＜文＞観点からの考察に入る。

第1節 ＜語彙＞に見られる＜カタカナ＞表記

戦前において一つの文の中に二つの仮名が混在して見られている方略は狂言の中の発話文のみで、一般的にはあまり用いられない特殊なものであった。本稿の対象時期より更に遡ることになるが、坂梨隆三（1988）の研究は＜カタカナ＞表

記が江戸時代の人情本や洒落本などで如何なる役割を果たしているのかを明らかにしたものである。詳細は省略するが、坂梨（1988）は、そのような作品の中でも口語的な性質の強い感動詞、間投助詞、擬音語、俗語、終助詞などの品詞にカタカナがもっぱら用いられる傾向が見られ、これは当時の言葉を生き生きと効果的に描写するために用いられた方略であった可能性が高いと述べている。

<地の文>において、一つの文の中で二つの表記を意図的に取り入れたほぼ最初の資料は江戸初期の『西洋紀聞』である。これは新井白石が編纂した西洋の研究書で、西洋の国名や地域名など、西洋と関係のあるものを意図的にカタカナで表記している。これに関する研究として石綿敏雄（1989）のものが挙げられる。石綿（1989）は、『西洋紀聞』は、日本の物事とは異質的であることを表すために西洋の物事を意図的にカタカナで表記した最初の資料になると主張し、西洋の物事をカタカナで表記しようとする資料が明治期まで徐々に増加したと述べている。なお、外来語や外国に関わるものの全てが物事がカタカナで表記されるわけではないことに注意する必要があるとも言及している。石綿（1989）は、表記上の揺れは認められるものの、全体的な傾向としてはカタカナ表記が優位であったため、非カタカナ表記は単なる例外として認識されていた可能性があったと主張している。しかし、これは<漢ひ交>表記の文にのみ見られる特徴で、<漢カ交>の文の中でも外国の物事がカタカナで表記されたのかについては言及されておらず、一般的な認識として捉えることはやや困難であると思われる。

杉本つとむ（1989）は、同様の観点からカタカナ表記の事情を更に詳しく述べている。杉本（1989）は、『こんてむつすむん地』のようなキリシタン資料においてキリシタン用語が平仮名で表記され傍線を付す方略が用いられていたが、江戸時代から外来語やラテン語・ポルトガル語・オランダ語などが意識的にカタカナで表記されていることから、カタカナの位置が江戸時代から確定した可能性が高いと述べている。白石の『西洋紀聞』や森島中良の編纂した『類漿紅毛語訳』において、外国の物事のカタカナ表記意識が単語のみならず文までカタカナで表

記していることが見られており、この意識は、後に漢字では中国文化を表し、カタカナでは西洋文化を表すという新しい対立に発展したとも主張している。

国立国語研究所（1987）（以下、国語研）は、『中央公論』という明治期からの雑誌に見られている〈表記〉の傾向を述べている。特に、当時の外来語や外国語の急激な増加により本来漢字で表記されたいものも〈カタカナ〉で表記されるようになり、全体的な〈カタカナ〉表記の比率も増加する様相が現れていると報告している³。詳しくは、1906年に12.5%、1916年に13%であった外来語の〈カタカナ〉表記が、1926年に58%、1936年に78%まで急増し、1926年から表記の逆転が見られていると指摘している。なお、国語研は、明治以後の日本語体系は30年も満たないうちに激変し、そのまま現代の日本語体系へと繋がっていくと述べている。

後述する内容であるが、明治期の研究として、高梨信博（1989）のものが挙げられる。高梨（1989）は、国定教科書が導入される1900年代以前には〈平仮名〉と〈カタカナ〉が同等に扱われ、文の中で強調したい箇所を〈漢ひ交〉文では〈カタカナ〉で、〈漢カ交〉文では〈平仮名〉で表記する傾向が見られていると指摘している。これは、明治期初期には両表記の上下関係や優劣関係がなく互いの表記手段を補助する要素であったことを証明するものであると述べている。

貝美代子（1997）は、国語国定教科書の第一期（1904年）から第五期（1946年）までの国語教科書において、外国の物事がカタカナで表記される傾向が見られていることを確認し、国語のみならず他の科目の国定教科書をも視野に入れ、外国の物事の表記傾向を明らかにしている。貝（1997）の調査結果をまとめたものが、以下の〈表-1〉である。

³ 研究所は件数のみを提示しており、比率は発表者によるものである。1906年は全31535件のうち512件（約1.62%）、1916年は全31837件のうち271件（約0.85%）、1926年は全33162件のうち710件（約2.14%）、1936年は全34049件のうち1101件（3.23%）で、急増していないものの、次第に増加していることは明確である。

<表-1> 国語国定教科書における外国の物事の表記傾向

	外来語・外国語	外国地名	外国人名
第一期 (1904年)	① 漢字平仮名交じり文では平仮名、漢字片仮名交じり文ではカタカナで表記される ② 促音は小書き ③ 両表記に棒引き仮名遣いが用いられる		
第二期 (1910年)	① 主にカタカナで表記されるが、平仮名（こつぶ、まつち）や漢字（瓦斯、煙草、硝子）も見られる ② 促音は小書き、大書きが両方用いられる	① カタカナ・漢字表記 ② カタカナ表記の場合、右に二重傍線が付される ③ 漢字表記の場合、振り仮名が平仮名で付される	① カタカナ表記 ② 右に傍線が付される ③ 二語以上に分かれた場合、読点（、）を用いる
第三期 (1918年)	① 主にカタカナ表記であるが、低学年では平仮名でかかれることもあり（ごむまり、めりんす、らんぷ）、漢字（煙草、温突）も見られる		① カタカナ表記 ② 傍線がなくなる
第四期 (1933年)	② 促音は小書き、大書きが両方用いられる	① 中国の地名と少数を除き（印度、西藏）、カタカナ表記 ② 二重傍線がなくなる	① カタカナ表記 ② 二語以上に分かれた場合、ダブルハイフン（＝）を用いる
第五期 (1941年)	① 主にカタカナ表記であるが、一部は平仮名（ゴムまり）、漢字（ココ椰子、サゴ椰子）表記される ② 促音は小書き		① カタカナ表記 ② 二語以上に分かれた場合、中店（・）を用いる

外国人名は国定の第二期から出現し、時代によって傍線の有無や記号の違いが見られるだけで、初めから一貫した<カタカナ>表記が見られている。外国地名も同様に第二期から出現しているが、その様相はかなり複雑である。<漢字>と<カタカナ>、<平仮名>が混用されていたものが、第三期からは中国や印度などの特定地域の例外を除くと、<カタカナ>のみで表記されるようになる。これについては、大正12年（1923年）に臨時国語調査会による『常用漢字表』の「固有名ニハ本表ニナイ文字ヲ用キテモ差支ナイ。タヽシ外国（支那ヲ除ク）ノ人名地名ハ仮名書トスルコト。」という記述からもその認識を垣間見ることがで

きよう。外来語や外国語の事情はより複雑で、主に<カタカナ>で表記されているものの、特定の語彙は<平仮名>や<漢字>で表記されることも認められているとまとめられよう。

以上からすると、戦前の時期には外国の物事が<カタカナ>の主な表記対象で、その他にも特定の単語を視覚的に強調、もしくは取り立てるために意図的に<カタカナ>で表記する方略がなされていたということになる。言い換えると、語彙の<カタカナ>表記は、明治期以前と以後において、一貫して<何か異なることを表す>ために用いられていたと言えよう。

第2節 <国語教科書⁴>に見られる<カタカナ>表記

戦前の<カタカナ>表記の<機能>を明らかにするための資料として、政府主導の国定教科書は非常に有効なものであると思われる。1900年代以前には、教育水準や教育の方向性、教育制度が地域によって異なっていたことが多く、教科書の種類も非常に多様であった。しかし、明治維新以来、日本の近代化を促進するために教育制度を整備する必要性が生じ、1903年から全国のほぼ全ての小学校において共通した政府主導の国定教科書が用いられることとなる。これは、当時の学生が共通した知識や認識を教えられていたことを意味しており、それは言語意識として例外ではないと思われる。特に小学校は、社会一般の知識や社会性が学べる家庭以外の最初場であり、ここで形成された認識がかなり長く影響を与えていた可能性は十分であると考えられる。更に、<教科書>は他の資料をもカバーする広い時期にかけて用いられている点からも、研究の基準点になれると考えられ、最初の資料にすることは意義があると思われる。

⁴ 以下、<国語教科書>と<教科書>、<読本>を同意のものとして取り扱う。

1. 先行研究

明治維新以来、近代化を促進するために教育制度を整備することは、教科書を整備することと同等の意味を持っており、政府が認可した教科書を使用する<前検定期⁵>を経て、1903年からは文部省が編纂する完全な国定のものに変わることになる。この国定教科書、更に国語国定教科書に見られる文の<文体>と<表記>を取り扱った研究として、高梨信博（1989）と森岡健二（1991）が挙げられる。

高梨信博（1989）は、明治維新以後、近代学制制度が法令として確立した1872年から戦後の1946年までの時期を<前検定期><検定期><国定期>に分け、各時期の<表記>の特徴を述べている。氏は、国定期は政府の定めた種類の教科書で教育を受けた時期であったため、この教科書に用いられた<表記>規範や使用法、言い換えると<表記意識>は、当時の一般的な意識や規範に一番近い形態であった可能性が高いと主張している。しかし、単なる意識だけでなく、児童の発達過程を考慮しなければならない教科書の構成上の特殊性に注意しなければならず、この意識を一概に当時<一般的であったもの>として捉えることは危険であると述べ、綿密に検討する必要があると主張している。高梨の教科書の時期区分、及びその基準をまとめたものが、以下の<表-2>である。

⁵ この用語は、下記の高梨信博（1989）によるものである。

<表-2> 国語国定教科書の時期区分と特徴・基準

時期		年代	時期区分の基準	学習順序
前検定期	前期	明治 05 年 (1872 年)	学制制度法令 小学校則	並列学習
	後期	明治 14 年 (1881 年)	小学校教則綱領	
検定期	前期	明治 19 年 (1886 年)	第一次小学校令	
	中期	明治 24 年 (1891 年)	小学校教則大綱	
	後期	明治 33 年 (1900 年)	第二次小学校令 小学校令施行規則	
国定期	第一期	明治 37 年 (1904 年)	『尋常小学読本』八冊	
	第二期	明治 43 年 (1910 年)	『尋常小学読本』一二冊	
	第三期	大正 07 年 (1918 年)	『尋常小学国語読本』一 二冊	
	第四期	昭和 08 年 (1933 年)	『小学国語読本』一二冊	
	第五期	昭和 16 年 (1941 年)	『ヨミカタ』二冊 『よみかた』二冊 『初等科国語』八冊	
	第六期	昭和 22 年 (1947 年)	『こくご』四冊 『国語』一一冊	平仮名先習 カタカナ後習

高梨（1989）は、1884年文部省が編纂した『読方入門』で両表記を1日4文字ずつ学ばせることを提案している点、検定期までは低学年の教科書に平仮名が数的に多く見られていた傾向があったものの、実際は<イロハ>と<五十音図>が同時に出されることが多く<表記>の先習・後習の概念が非常に弱かった可能性があることを踏まえ、明治初期の頃には現代日本語のように<表記>による役割の分担が一般化していなかった可能性がある」と指摘している。下記の（7）は、全体の文が<漢カ交>で書かれている中、強調したい語彙を<平仮名>で表記している。これは、<漢ひ交>文の中で強調したい語彙を<カタカナ>で表記する現代の方略とは対立するものである。

- (1) 鉄ヲ強ク焼キ、ヤハラカニシテ、槌ニテ打チ、鋤、鍬等ヲ作ル。コレヲきたふト云ふ。鍛フル人ヲかぢト云フ。鉄ヲ火ニテトカシ、かたニツギ込ミテ、鍋、釜等ヲ作ル。コレヲいるト云フ。鑄ル人ヲいものト云フ。（『日本読本』三・35オ（1887））（高梨（1989:53）からの再引用。下線は発表者による）

しかし、このようなケースは非常に少なく、〈漢カ交〉文には〈カタカナ〉のみを、〈漢ひ交〉文には〈平仮名〉のみを用いるのが一般的であったと述べており、更に、外国語や外来語などを表記することにおいても、異なる表記を選択せず傍線や記号などで区分していたとも主張している。言い換えると、少なくとも国定期に入る 1900 年代以前までは、現代日本語のように〈漢ひ交〉が標準で〈カタカナ〉が補助的に用いられるというような表記上の上下・優劣関係が存在せず、両表記が同等の価値を持っていたと述べている。

〈表記〉の教え方については、文部省が 1886 年編纂した『読書入門』の「文字モ易キヲ先ニシテ、難キヲ後ニスルヨリ善キハナシ」の部分を用いている。当時は文字の形態が比較的単純であった〈カタカナ〉を先に学ばせる方がいいという認識があり、実際、国定期以前の教科書では上述のように〈表記〉の上下・優劣関係という認識がかなり弱かったため両表記が同時に示されていたものの、国定期からは〈カタカナ〉先習ということに変わっている。しかし、第四期からは〈漢ひ交〉が強勢となっており、学校における文の表記と実際における文の表記の間に若干のずれが認められている。国語国定教科書の文の〈表記〉状況をまとめたものが、以下の〈表-3〉である。

<表-3> 国語国定教科書の<表記>の比率 (単位：%)

	第一期	第二期	第三期	第四期	第五期	第六期
漢カ交	39	32	9	4	0	0
漢ひ交	61	68	91	96	100	100

森岡健二(1991)は、後に言文一致体と認められる<口語体>の成立時期を1908年から1910年の間であるとみなした山本正秀(1965)の主張を認め、国語国定教科書の第一期のものと第二期のものに見られる<文体>の比較を行い、第一期の文には<文語体>の文法的特徴が多く見られ、第二期の文からは<口語体>が徐々に増えていることが明確な傾向として認められていると主張している。第一期の文にも<文語体>とは認めがたい<口語体>のようなものが多数見られているが、それは実際の<話し言葉>をそのまま書き写したものである点、<文語体>でも第二期以後の<文語体>からは見られない独特な文法要素などが用いられている点を取り上げ、第一期の国定教科書が用いられた1900年代はまだ<口語体>という文体が十分成立されておらずかなりの揺れが見られた時期であり、現代の<口語体>のような文法形式のものが見られるのは第二期以後であると主張している。すなわち、第一期と第二期の<文体>は質的に異なっているため、<文語体>と<口語体>を取り扱う際には時期にも注意する必要があると述べている。以下、<話し言葉>をそのまま書き写したものを取り上げる。地の文のみならず、人物の発話においても間投詞などが頻繁に用いられており、現代の文の中の口語体とはやや異質的な感じを与えている。

- (2) オナジヨーナトリガ、ムカフカラ、トンデキマス。マー。ハヤク、トンデクルデハアリマセンカ。(第一期・三の四)
- (3) マー。ミゴトナブドーデハアリマセンカ。コノブドーノツルハ、タローノオヂイサンガ、コドモノトキ、サシキニシタノデス。……ミナサンモ、アキカハルカニ、ヨイブドーノツルノエダヲキッテ、サシテオイテゴランナサイ。(第一期・三の十九)
- (4) カウモリハ、夏ノ夕方、ヨク、ソトラトンデキルカラ、ミナサンハ見タコトガアリマセ

ウ。(第一期・五の十四)

(5) 郵便のお話は、ま一、このくらゐにしておきませう。(第一期・八の一)

2. 本章の方向性

先述したように、戦前の時期の文の中における〈表記〉機能を明らかにするためには、〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の枠組みの把握が先行する必要がある。よって、〈表記〉のみならず〈文体〉や〈内容〉の要素にも目を向け、それらを総合的に把握する必要がある。しかし、〈文体〉と〈表記〉などを個別に扱った研究は多数見られているが、その要素の間関係に関して言及した研究はほぼ見られない状態である。特に、明治後期の言語学の最大の変化の一つとして〈言文一致体〉が取り上げられ、〈文体〉を中心とした研究が非常に多く見られている。ゆえに、〈カタカナ表記〉の機能のみならず、三要素の関係も明確にする方向で論を進めることが有効であると思われる。

国定教科書を最初の資料として位置付ける理由としては、先述したように国定教科書が明治期から終戦までの長い期間にわたって用いられており、他の資料の時期を広くカバーしていることに加え、政府主導で行われた一律的な政策であるゆえに、一般的に通用していた認識としても捉えられる可能性が高いためでもある。

しかし、高梨(1989)も指摘したように、教科書は学生の身体及び精神的発達過程をも考慮して構成されている点、政府主導であるために一般的な社会認識とは関係のない一方的な思想を押し付けていた可能性がある点など、教科書に見られる傾向が果たして社会一般のものとして捉えられるのかについては疑問が残る。後述するが、1910年から用いられた第二期の国語国定教科書は、1904年から1905年にかけて行われた日露戦争の影響により軍国主義的内容や戦争を描写する内容のものが非常に多く、他の時期に比べてかなり特殊な傾向が見られている。

る⁶。なお、後述する総合雑誌の先行研究においてもほぼ同様の傾向が見られている点などを考慮すると、ここで用いられた表記意識が一般的なものであったと言い切れない。しかし、このような政府の意図的な操作が認められる一方、当時の一般的な意識も影響を与えていた可能性があるため、本稿ではその意識を＜傾向＞として捉えても問題ないと判断し、＜一般的なものである＞として広く捉えることとする。



＜図-1＞ 低学年の国語教科書

調査資料として、国定教科書である＜尋常小学読本＞、＜高等小学読本＞に、一般教科書である＜中学校国語教科書＞も加えて概観する。国定教科書のみならず一般教科書をも資料として扱うのは、すでに指摘した通り、国定の場合は政治的な意図が反映され一般的な意識とは異なる方向性を持たせることができるため、その影響力が相対的に弱かったであろう一般教科書をもとにも扱うことで、より明確な機能の概観が期待できるためである⁷。よって、政府主導のもののみならず、一般出版社の教科書のものをも概観することは意義があると判断

し、これらを総合的に取り扱うこととする。先行研究の高梨（1989）は、＜漢ひ交＞と＜漢カ交＞の両表記は第二期までは勢力を保っていたが、第三期からは＜漢ひ交＞がかなり優勢になり、第四期のような＜漢ひ交＞のみといてもいいよ

⁶ これは国語国定教科書のみならず、他の教科書においても同様に見られる特徴である。Jason（2009）は、第二期の終身教科書において＜忠義＞や＜忠君＞の精神を強調する内容が多くなっていることを指摘し、その原因を日露戦争という社会的事情に求めている。

⁷ 当時の一般教科書も政府の許可を予め得た会社のみが出版できたものの、国定教科書より政府の影響力は非常に弱かったと考えられる。

うな状況になったと述べている。故に、本稿の考察においては第三期までのもののみを対象とする。また、第一期から第三期までの『尋常小学読本』の最後の巻のみを

対象としているが、これは低学年向け教科書の特殊性のためである。

同じく高梨（1989）によると、国語国定教科書は<カタカナ>を先に学べるように構成されている。実際、国語国定教科書の第1巻を見ると、全ての文が<カタカナ>で表記されており、<平仮名>表記は文のみならず語彙においても見られない。<表記>のみならず<文体>も<デス>や<マス>などの<口語体>のもののみ見られ、年齢が高くなるにつれて多様な文体が現れるように構成されている。このような教育過程の特殊性を考え、低学年向けの教科書より高学年向けのものを対象として方がより適切であると判断した。これらの状況を踏まえ、調査資料とする教科書を以下の（6）から（11）に提示する。各時期の右側の括弧内の数値は、対象資料の数であり、総18巻の471件である。なお、全ての資料は『国立教育政策研究所教育図書館 近代教科書デジタルアーカイブ』に掲載されているPDFファイルのものを使用した⁸。

- (6) 尋常小学校 国定教科書 国語読本：第一期（1）、第二期（1）、第三期（1）
- (7) 尋常小学校 国定教科書 国語読本（秋季始業・複式）：第二期（1）、第三期（1）
- (8) 高等小学校 国定教科書 国語読本：第一期（1）、第二期（1）、第三期（1）
- (9) 高等小学校 国定教科書 国語読本（女子用）：第二期（1）、第三期（1）
- (10) 高等小学校 国定教科書 国語読本（農村用）：第三期（1）
- (11) 中学校教科書 国語・国文：第一期（2）、第二期（2）、第三期（3）

⁸ <https://www.nier.go.jp/library/textbooks/K130-K140.html>（最終アクセス：2021年1月4日）

また、読本の〈内容〉の分類基準を設定する必要がある。本稿では〈詩〉や〈候文〉のように形式や文体が定まっているものを除いて、その内容に準じて〈説明文〉、〈文学〉、〈経験文〉、〈偉人伝〉のように分類する。なお、日記や随筆は別途の分類を設けず、作者の主観的考察や経験が含まれているものを〈経験文〉として取り扱う。

例えば、第一期の尋常小学読本の「老人の話」という文は、小太郎という主人公が学友と共に村の老人の家を訪ね、徳川家康に関する物語を聞く内容となっている。この文は〈杵物語〉という二つの物語からなっている〈杵物語〉の形式をとっているが、全体的な内容が実際の人物である徳川家康の逸話を紹介するものになっていることから〈偉人伝〉として分類する。また、第一期の尋常小学読本の「おふみの慈善」は、新聞記事を読んだ後の感想や主人公の行動の変化などを述べており、日記のような客観的な文になっているため、この文は〈経験文〉として分類した。これを〈日記〉として取り扱わないのは、一人称ではなく三人称の観点から書かれており、〈日記〉をその下位分類として位置付けた方が適切であると判断したためである。同じく第一期の尋常小学読本の「地球」という分は、先生が学生の質問に答えながら自分の知識を述べる〈問答文〉の形式であるが、内容的には特定の物事を説明しているので〈説明文〉として分類する。その他、文学作品や、仮想の主人公を立てて物語を進める内容のものを〈文学〉として分類する。

また、同じ内容のものが繰り返し掲載されているものも多く見られているが、これらは必要な場合のみ言及し、通常は別途のものとして取り扱うこととする。

3. 〈国語教科書〉に見られる〈内容〉〈文体〉〈表記〉要素の関係

以下、国定国語教科書である読本の〈内容〉〈文体〉〈表記〉の状況をまとめ、時期別の傾向を概観してから教科書別の傾向を概観する。時期のみならず教科書の特性も概観する理由は、各教科書の対象年齢が異なっているため、その〈

内容>においても特定の傾向が見られる可能性が高いためである。<カタカナ表記>機能の考察は、三要素の関係性を明確にしてから取り行う。資料の国語教科書の詳細については、<資料1>を参照されたい。

3.1. 時期別の傾向

第一期から第三期までの国語教科書の資料の件数は、第一期が88件、第二期が168件、第三期が215件であり、各時期別にばらつきが見られている。よって、同時期の傾向を概観する際には件数と比率を併用し、異なる時期を比較する際には比率を用いることとする。以下、<表記>と<文体>、<内容>の状況を表にて提示する。

<表-4> 読本の<表記>と<文体>の状況⁹

	表記		文体	
	漢ひ交	漢カ交	口語体	文語体
第一期	77 (87.5%)	11 (12.5%)	18 (20.45%)	70 (79.55%)
第二期 ¹⁰	149 (88.69%)	18 (10.71%)	25 (14.88%)	142 (84.52%)
第三期	211 (98.14%)	4 (1.86%)	82 (38.14%)	133 (61.86%)

<表-5> 読本の<内容>の状況

	詩	候文	説明文	経験文	文学	偉人伝
第一期	9 (10.23%)	3 (3.41%)	45 (51.14%)	14 (15.91%)	10 (11.36%)	7 (7.95%)
第二期	14 (8.33%)	5 (2.98%)	105 (62.5%)	24 (14.29%)	11 (6.55%)	9 (5.35%)
第三期	24 (11.16%)	9 (4.19%)	102 (47.44%)	33 (15.35%)	31 (14.42%)	16 (7.44%)

⁹ 以下、<表-11>まで、単位は<件>である。

¹⁰ <漢文>と<漢文体>が1件存在し、全体の件数を167件とする。

まず、〈表記〉の傾向を概観する。第一期と第二期において、〈漢ひ交〉と〈漢カ交〉の比率は9:1に近く、第三期にはほぼ全ての文が〈漢ひ交〉に変わっている。先行研究の高梨（1989）の〈表-2〉とはかなり異なる傾向が見られているが、これは資料群を拡張したためであると思われる¹¹。言い換えると、国定国語教科書が導入された時点ですでに、かなり特殊な場合を除くと〈漢ひ交〉表記が一般的なものになったと捉えられよう。

次に、〈文体〉の傾向を概観する。第一期から第三期の時期に一貫して〈文語体〉優勢の傾向が見られている。特に、第二期に〈文語体〉がやや増加し、第三期は第一期より数が少なくなる一時的な増加傾向が見られている。これに関しては、日露戦争という社会的要素と無関係ではないと思われ、実際、内容的にも軍国主義的内容や戦争などのものが他の時期に比べて多く見られている。大日方純夫（2006）は、第二期の国語国定教科書において、「天皇陛下の御製¹²」では国に尽くす誠について、「日本海海戦」で日露戦争の様子について提示しており、更に、「烈士喜劔」では日本武士道の精華の発揮を称え、「軍人に賜はりたる勅諭」では軍人のみならず全国民が忠勇の心を忘れてはいけないことを強調している内容となっていると述べている。これは、特定の〈内容〉と特定の〈文体〉が共起している可能性を意味していると思われる。

その可能性、すなわち〈表記〉と〈文体〉の間に共起傾向、もしくは関係が認められるのかについては、以下の〈表-6〉を参照されたい。

¹¹ 詳細に関しては、次節で概観する。

¹² 国定第二期の教科書での題名は「明治天皇の御製」であるが、ここでは氏のをそのまま引用する。

<表-6> 読本の<表記>と<文体>の共起状況

		第一期		第二期		第三期	
		口語体	文語体	口語体	文語体	口語体	文語体
第一期	漢ひ交	15 (17.05)	62 (70.45%)				
	漢カ交	3 (3.41%)	8 (9.09%)				
第二期	漢ひ交			22 (13.10%)	127 (76.18%)		
	漢カ交			3 (1.79%)	15 (8.93%)		
第三期	漢ひ交					81 (37.66%)	130 (60.47%)
	漢カ交					1 (0.47%)	3 (1.40%)

如何なる<表記>も<文語体>と共起している傾向が非常に強く見られているものの、<漢カ交>は、その数が非常に少なく、有意義な数値であるとは判断しかねる状態である。この共起状況を踏まえると、少なくとも<表記>と<文体>の間に相関関係があるとは言い難い状態であることは明白である。よって、本稿では両者の関係についてこれ以上言及せず、必要な場合にのみ述べることにする。

<内容>に関しては、<詩>と<候文>は決められた様式が依然として存在していたため、文体は<文語体>、表記は<漢ひ交>という組み合わせが非常に多く見られている。また、文学も原本の一部をそのまま引用したものが多く、教科書を執筆する側の認識はほぼ反映されない構造となっている。本稿ではこれらの状況を踏まえ、全ての時期において数的に半分以上を占めている<説明文>と<経験文>を取り上げ、<表記>と<文体>との関係を概観する。以下、<表-7>にて、<説明文>と<経験文>の<表記>と<文体>の状況をまとめ、提示する。

〈表一七〉 〈説明文〉と〈経験文〉の〈表記〉と〈文体〉の共起状況

	説明文		経験文	
	口語体	文語体	口語体	文語体
漢ひ交	70 (31.25%)	154 (68.75%)	20 (46.51%)	23 (53.49%)
漢カ交	4 (14.81%)	23 (85.19%)	3 (50%)	3 (50%)

〈表記〉においては〈漢ひ交〉優勢、〈文体〉においては〈文語体〉優勢であることは他のジャンルとも合致するところであるが、〈経験文〉の〈文体〉においてはほぼ同率であることが見て取れる。また、〈経験文〉の〈漢カ交〉と〈文語体〉の組み合わせは3件であるが、3件とも同じ題名のものであるため、実質的には1件であると言えよう。こうなると、〈経験文〉においては、他のジャンルと異なって、〈文語体〉が優勢であるものの〈口語体〉もかなりの勢力を持っていたと捉えることができる。

また、上述のように、異なる教科書に同じ内容のものが繰り返し掲載されることがあるが、教科書によって異なっている文の表記が異なっているものも見られている。第二期の『尋常小学読本 12』の9課の〈学校落成式〉と、第二期・第三期の『第二種 尋常小学読本 5・6 学年用 乙下』の24課の〈学校落成式〉がその例で、一部の語彙を除くと内容としては同じものとなっているが、文の表記は前者が〈漢ひ交〉、後者が〈漢カ交〉となっている。

(12) 昨年ノ夏カラ建築ニカ、ツテキタ學校ガ落成シテ、前週ノ土曜日ニハ落成式ガ舉行サレタ。

(13) 今年の春から建築にかゝつて居た學校が出来上つて、前週の土曜日に落成式があつた。

前者は1910年のもの、後者は1913年のもので、かなり短い期間において〈表記〉に関する意識が変化したとは考え難い側面もある。また、同じ内容のものが異なる〈表記〉になっているこのようなケースも今回の資料の中で1件のみで、

かなり特殊なものであると考えられる。これらを踏まえると、〈内容〉と〈文体〉の関係性は少なからず認められる可能性が見られたが、〈内容〉と〈表記〉の間では有意義な差が依然として見られない状態であると言えよう。

3.2. 教科書別の傾向

時期別違いのみならず、教科書別の違いも重要であると思われる。先行研究でも指摘した通り、教科書には当時の一般的な認識のみならず政府による特定の内容などが意図的に含まれている可能性がある。更に、学生の成長過程に即した配慮も考慮しなければならない。そこで、教科書別の傾向を概観することは、その意識が如何なるものであるかをより明確に把握できる有意義なものであると考えられる。まず、尋常小学の読本、すなわち国語教科書の状況を以下の〈表-8〉に提示する。

〈表-8〉 尋常小学読本の〈表記〉と〈文体〉の共起状況

		第一期 (1903)		第二期 (1910、1913)		第三期 (1923、1930)	
		口語体	文語体	口語体	文語体	口語体	文語体
第一期	漢ひ交	9 (40.91%)	7 (31.82%)				
	漢カ交	1 (5.16%)	5 (22.73%)				
第二期	漢ひ交			9 (15.52%)	41 (70.69%)		
	漢カ交			3 (5.17%)	5 (8.62%)		
第三期	漢ひ交					25 (44.64%)	28 (50%)
	漢カ交					1 (1.79%)	2 (3.57%)

〈文体〉においては、〈両文体同率—文語体強勢—両文体同率〉の傾向が、〈表記〉においては全時期にかけて〈漢ひ交〉強勢の傾向が見られている。先述し

たように、＜文体＞は第二期前後の社会的な特殊性が影響を与えたと見られ、その要因が取り除かれた第三期の時期には本来の傾向に戻っており、第二期の時期に一般的な認識としては＜両表記同率＞であった可能性が高かったと推測できよう。

以下、高等小学の読本の状況を、＜表-9＞に提示する。

＜表-9＞ 高等小学読本の＜表記＞と＜文体＞の共起状況

		第一期 (1904)		第二期 (1910、1912)		第三期 (1926、1927)	
		口語体	文語体	口語体	文語体	口語体	文語体
第一期	漢ひ交	6 (28.57%)	10 (47.62%)				
	漢カ交	2 (9.52%)	3 (14.29%)				
第二期	漢ひ交			12 (23.53%)	31 (60.78%)		
	漢カ交			0 (0%)	8 (15.69%)		
第三期	漢ひ交					44 (48.35%)	47 (51.65%)
	漢カ交					0 (0%)	0 (0%)

＜文体＞においては、＜文語体優勢—文語体強勢—文語体優勢＞の傾向が、＜表記＞においては全時期にかけて＜漢ひ交＞強勢の傾向が見られており、両文体が半分ずつであった尋常読本に比べ、＜文語体＞が多くなっていることが特徴的である。一方、＜表記＞は依然として＜漢ひ交＞強勢であり、第三期以後はほとんど見られていないことから、＜漢カ交＞は非常に弱い立場であったと推測できる。

以下、中学の読本の状況を、＜表-10＞に提示する。

<表-10> 中学読本の<表記>と<文体>の共起状況

		第一期 (1904)		第二期 (1910、1912)		第三期 (1926、1927)	
		口語体	文語体	口語体	文語体	口語体	文語体
第一期	漢ひ交	0 (0%)	45 (100%)				
	漢カ交	0 (0%)	0 (0%)				
第二期	漢ひ交			1 (1.72%)	55 (94.83%)		
	漢カ交			0 (0%)	2 (3.45%)		
第三期	漢ひ交					12 (17.65%)	55 (80.88%)
	漢カ交					0 (0%)	1 (1.47%)

<文体>は全時期にかけて<文語体>強勢、<表記>は全時期にかけて<漢ひ交>強勢になっており、前の小学読本よりもかなり鮮明な傾向が見られている。中学読本は過去の作品や書籍をそのまま引用したものが非常に多く、各章の最初もしくは最後の部分に作者や書籍名を挙げていることが特徴的である。第二期の<口語体>も『狂言記』からの狂言によるものであり、実質的に第二期の時期までは<文語体>のみであったと言えよう。なお、<文語体>の強勢の理由として、江戸以前の作品や書籍からの引用が多いためであることも関係している可能性がある。また、全時期にかけて<漢カ交>で表記されたものは全て公的文書で、文学や随筆などのジャンルでは見当たらない。

以上の傾向をまとめると、高年齢になるにつれて、<文体>は<文語体>に、<表記>は<漢ひ交>に重点が置かれるようになっていく。もし、<表記>や<文体>が<内容>と関係しているなら、時期や年齢に関わらず、一貫した傾向が見られるはずであるが、それは認められていない。これは、教科書における<表記>や<文体>は、社会一般の意識より学生の成長過程や政府の政策などの要素がかなり強い影響を与えていたことを意味している可能性を示唆している。この

傾向は、第五期の尋常小学の読本にも見られている。先行研究の高梨（1989）は、第五期から全ての〈表記〉が〈漢ひ交〉になっているが、〈カタカナ先習〉であった当時の教育方針を考えると、全ての文の〈表記〉が〈漢ひ交〉であったとは考えにくい。尋常小学読本は第五期から、一年生向けの『ヨミカタ』、二年生向けの『よみかた』、三年生以上向けの『初等科国語』に細分されるが、高梨（1989）は一年生と二年生向けのものを含まなかった可能性がある。『ヨミカタ』と『よみかた』の文の〈表記〉の状況を、以下の〈表-11〉に提示する。

〈表-11〉 第五期の尋常読本の〈表記〉状況

	ヨミカタ 一	ヨミカタ 二	よみかた 三	よみかた 四
漢ひ交	0	5	26	25
漢カ交	1 ¹³	21	0	0

最初に学ぶ国語教科書は〈漢カ交〉のみで構成されており、学年が上がるにつれて徐々に〈漢ひ交〉表記が多くなる構成となっている。両表記が同時に見られているのは『ヨミカタ 二』のみで、これは文の表記が〈漢カ交〉から〈漢ひ交〉へと変わる中間過程のものとして捉えられると思われる。実際、26章からなっている『ヨミカタ 二』の中で〈漢ひ交〉が見られるのは15章、20章、23章、25章、26章で後半に偏っており、表記交替の意図が見られている。すなわち、少なくとも国語教科書の文に用いられる〈表記〉要素は、〈内容〉や〈文体〉要素と関係を持たず、教育的な要因が強く影響していると思われる。

¹³ 『ヨミカタ 一』は章の区分がない点から、全体を一つとして扱うこととする。

4. <国語教科書>に見られる<カタカナ>表記の傾向

<教科書>に限っては、<内容><文体><表記>の三要素の関係が存在していた可能性は非常に低い。<内容>と<文体>要素は非常に弱くはあるが、相関関係が認められるも、<表記>要素との関係はほぼ認められていない。

日露戦争の時期、教科書に軍国に関する内容の増加と<文語体>の増加が共に行われていたことから<内容>と<文体>要素の関係は認めることができるものの、<表記>要素との関係、及び<表記>要素への影響はほぼ見られない。が、その<内容>と<文体>要素の関係性も一時期の傾向であって、第三期からは非常に弱くなっている。<表記>においては、知識<内容>のものは<漢カ交>で表記されると述べたが、<内容>と<表記>要素の関係性は全く認められず、こちらには<子供の成長過程を考慮した教育的措置>という要素が介入している可能性が見られた。言い換えると、他の要素との関係・認識より、なるべく多様な<表記>と<文体>を馴染ませるため多様な要素をバランスよく取り入れている可能性が考えられよう。<教科書>における三要素の関係性を、以下のよう提示できると思われる。

<教科書>の三要素の関係：<内容>—<文体>/<表記>¹⁴

弱くはあるが<漢カ交>が如何なる状況で用いられるかを、傾向として垣間見ることができると思われる。上記の(12)と(13)で取り上げた<学校落成式>は、村の小学校の完成を祝う場面を描写した日記調のもので、後半は校長の演説内容がそのまま<文語体>で記されている。なお、全体的に日記調であるこの文に<漢ひ交>と<漢カ交>の両方が選択されたことを見ても、<内容>と<表記>の間に関係がないことは明白である。しかし、これは教科書のみならず一般に

¹⁴ <—>は関係性を表し、</>は分離性、すなわち他の要素との関係性が弱いことを示す。

においても同様であったと思われる。当時の実際の日記においても両表記が用いられている点から、〈表記〉には個人差が強く影響していたことを考えると、日常生活においても〈表記〉に関する明確な使い分けの意識がかなり弱かった可能性が高い。第二期の読本が編纂された時期の実際の日記を見ると、〈表記〉と〈文体〉がかなり自由に用いられており、個人差が見られている¹⁵。

(14) [本日ノ天候] 朝ヨリ結ウマデ快晴入営以来始メテ見ル所ナリ [世紀一九〇一年] 内閣ノ交送モアリ経済界ノ恐慌アリ、北清事件モアリ甚ダ変事アリシ年ナリ。己レハ亦書生生活ヨリ軍隊生活ニ変入シ錯雑ナル事ノミ心ニ浮カビシ故ニ二十世紀ノ初一年モ甚ダ短クノミ感ジタリ。(1901年12月31日、北海道の歩兵大26隊に所属する陸軍兵士の日記)¹⁶

(15) 朝、新聞紙上にて旅順の攻撃、我軍大勝利の報に接するや直ちに国旗を家に立てた。実に愉快。飯が多く喉を通らなかつた。九時頃式のために登校。式後先生より我軍の快報をき、天皇陛下、大日本陸海軍万歳を三唱をした。天地もために震動する計り。(1904年2月11日、京都府に住む尋常高等小学校の4年生少年の日記)¹⁷

(16) 海水浴も此頃は楽しいでしょう。よせては返す波の音になぐさめらせ/¹⁸白いかもめなどの飛ぶのを見るのは面白いでしょう。ドゥードゥーと云う波の音は自然の音楽の様であります。多くのひ暑客は海辺を散歩して居ます。皆の顔には喜びが満ちています。(1910年8月23日、高等女学校1年の少女の夏休みの日記)¹⁹

繰り返しになるが、〈教科書〉という資料には〈教育〉という特殊な要因が介入しているため、三要素の関係性はあまり重要視されていない。中学校の国語読

¹⁵ 性別や職業などの問題も関わっていると思われるが、本発表の方向性とは離れている故に、触れないこととする。

¹⁶ <http://tabilista.com/明治34年-北海道の歩兵第26連隊に所属する陸軍兵士/> (最終アクセス：2020年3月13日)

¹⁷ <http://tabilista.com/明治37年：京都府に住む尋常高等小学校の4年生の/> (最終アクセス：2020年3月13日)

¹⁸ この部分に人物画が描かれていて、次の文との間に句読点がない。

¹⁹ <http://tabilista.com/明治43年：明治時代の女学生の夏休みの日記%E3%80%82高等/> (最終アクセス：2020年3月13日)

本は公文書が〈漢カ交〉で表記されているが、これは公文書の原文をそのまま掲載したもので、これは教育とは関係なく〈公的〉内容と〈漢カ交〉表記の膠着があったという一般社会の認識として取り扱うべきものとなっている。〈教科書〉における〈表記〉には特定の意図で選択されているわけではなく、〈漢カ交〉と〈漢カ交〉という文の表記手段がある〉ということを学習対象である学生に認識させる目的で用いられている。言い換えると、現時点において、教科書における〈漢カ交〉表記には〈文体〉や〈内容〉要素との関係性も特別な〈機能〉もなく、教育の観点から学生たちに〈表記〉の体系を馴染ませるための目的のみが働いており、他の要素、すなわち〈内容〉や〈文体〉との関係性は考慮されていないと考えられる。

〈教科書〉の〈カタカナ〉表記機能：

〈教育〉目的で用いられているため、関係性や機能は見られない

〈教育〉という特殊な要因は、三要素の関係性よりも優先され、〈表記〉要素が持っているはずの〈機能〉もを無効化していることが見られている。現時点では〈表記〉の〈機能〉が見られないと捉えたが²⁰、他の資料と対照を通じて、異なる見地が得られる可能性もある。それに関しては後述し、以下、〈雑誌〉資料の傾向を概観する。

²⁰ 〈表記〉の機能を〈教育〉と捉えても良いが、それでは〈表記〉が如何なる場合においても〈教育〉的な目的として機能していると考えられるおそれがある。また、これを認めたとしても、〈カタカナ〉表記の機能を明らかにする本稿の目的とはやや外れているように思う。よって、ここでは〈教育的な目的で用いられ、他の機能は見られない〉と捉えることとする。

第3節 <雑誌>に見られる<カタカナ>表記

<雑誌>資料は<教科書>より対象層が非常に限定されており、なお、その予想読者層が全て同じ雑誌を手にしていただけではないため、<雑誌>に見られる意識はかなり特殊なものである可能性が高い。なお、<雑誌>を手にして読者は相対的に裕福で知識を有していると考えられ、ここで見られる意識は当時の<知識人>のものであると捉えても差し支えないと思われる。後述するが、既存の研究は相対的に広い読者層を持っていた<総合雑誌>を資料にしたものが多いため、本稿では、<知識内容>に焦点を当て、<知識専門雑誌>全体に見られる<カタカナ>表記の<機能>を明らかにする。なお、<公的>及び<知識>関連の内容のものが<カタカナ>表記と関係を持っている可能性があることを先に述べたが、その仮定が真であることを証明する観点からも<専門雑誌>資料を用いての考察は意義があると思われる。

1. 先行研究

先述の語彙研究でも言及した国語国立研究所（1987）（以下、国語研）は、『中央公論』という雑誌に見られている現代語の成立の過程を多様な観点から調査・分析し報告している。国語研では<内容><文体><表記>の三要素の相関関係ではなく、<内容>と<文体>要素の関係性を指摘し、<表記>要素においては語彙要素との関係のみで考察を進めている。まず、<小説>では、<口語体>がかなり優勢で、1919年まで連載された小説の80%から100%に<口語体>が選択されている。一方、<詩>は<文語体>がかなり優勢で、1919年まで載せられた詩の84%から100%に文語体が選択されている。<文学>ではない<一般>的な内容での<口語体>は1899年に1%、1900年に3.7%だったものが1901年に23.6%まで急増し、1905年に47.9%まで上がったものの、1906年には29.3%に減

少している。しかし、1907年にまた47.4%に上がり、その後も上昇を続け、1919年には93.5%の文に口語体が選択されると報告している。一方、〈一般〉的な内容においては、一つの文の中に両文体の特徴が混用されているものも見られており、1899年と1900年に2件ずつ現れている。その後、1901年に19件、1902年に22件、1903年に14件でかなり増加するものの1907年には4件まで減少し、その後また1918年まで1件から8件まで散発的に見られたものが1919年からは全く見られなくなった。

石井久美子(2013)は、『中央公論』とその派生誌である『婦人公論』を資料に、各資料の〈文体〉と〈表記〉の関係について考察を行なっている。両者は同出版社から出されたもので、前者が男性向け、後者が教育を受けた女性向けのよう読者層の違いが見られている。なお、内容的にも前者は国際的な政治、思想に関するもの物事を〈文語体〉で書いたものが多く、後者は日常生活の物事や流行の紹介や女性運動に関する内容を〈口語体〉で書いたものが多く見られている。また、両雑誌に同時に記事を掲載している作者たちも雑誌によって異なる〈表記〉や〈文体〉を用いており、読者層や文の内容に相応しいと思われる〈文体〉や〈表記〉の組み合わせが存在していた可能性があったと指摘している。

深澤愛(2001、2003a、2003b、2003c)の一連の研究は、〈語彙〉要素での研究が混じっているものの、〈内容〉〈文体〉〈表記〉要素との関係性も認められるためここで取り上げることとする。深澤は一連の研究の中で、〈文体〉や〈表記〉要素が外国の物事を表すために選択される〈語彙〉の表記に影響を与えている可能性を提示している。

深澤(2001)は、総合雑誌『太陽』の外国地名の〈表記〉において、〈漢字〉と〈カタカナ〉表記の両方が同時に用いられている文を対象に、〈表記〉の選択基準の明確化を試みている。深澤(2001)は、〈文体〉により選択される〈表記〉が異なっている可能性を提示したもののその傾向は見られず、また、両方の表記が同時に見られていることから、表現意図という観点からの説明は非常に困難

であると述べている。しかし、「戦争後の学術」というタイトルの文に〈カタカナ〉表記が非常に多く見られていることを取り上げ、その原因を、〈話すように書く〉という速記体の性質に求めている。〈速記〉というものは演説者の話を直接聞き、その内容を文字に写すものであり、そこに外国の地名などが言及されると、それが如何なる漢字で表記されていたかが不明であり²¹、〈発音のまま書く〉過程で〈カタカナ〉表記が選択された可能性が高いと述べながら、このような〈速記〉の方略が外来語や外国語の〈カタカナ〉表記を加速化したと述べている。しかし、全ての〈速記〉にこのような傾向が見られているわけではない点から、この認識が直接的な要因ではない可能性が非常に高いことをも主張している。

深澤（2003b）は、外国の物事の〈カタカナ〉表記傾向が、外国の地名が日本に定着したから〈カタカナ〉で表記されるようになったのではなく、むしろ日本語の言語体系の中に定着した故に日本語の文法や文体などの影響を受けやすくなり、特に当時の新文体で広く用いられるようになった〈口語体〉では従来の漢字表記ではない新しい表記方略、すなわち〈カタカナ〉表記が現れやすくなったことなどの複数の要因が影響を与えている可能性を述べながら、そのような性質を〈口語体文体のもつカタカナ表記の受け入れ易さ〉と定義している。すなわち、外国のものごとの〈カタカナ〉表記傾向は〈新文体〉の出現という当時の日本語の事情によるもので、外国のものだから〈カタカナ〉で表記すべきであるという認識によるものではないということである。

この研究に先立ち、深澤（2003a）では、総合雑誌『太陽』の中の外国地名が論説欄および雑記欄に集中して見られていることを踏まえ、『太陽』の前身雑誌の一つで論説が主に掲載されていた『日本大家論集』における〈漢カ交〉と〈漢

²¹ 深澤（2001）は、明治後期には外国の地名などの表記が多岐にわたっており、一つの国名においても多様な漢字が用いられ、発音も少々異なっていたことを指摘している。そのため、演説者と速記物の間の誤解を避けるべく、漢字表記が回避され、聴こえたものをそのままカタカナで表記した可能性が高いと主張している。

ひ交>表記両方の文の中での外来語の表記状況をまとめている。その結果、<漢カ交>表記の文では<漢字表記>や<符号のついたカタカナ表記>が、<漢ひ交>表記の文では<漢字表記>や<符号のないカタカナ表記>が見られていると報告しながら、外来語の表記に<平仮名>が選択されないと述べている。識別の観点からだと、<漢カ交>表記の文では<平仮名>で表記した方がより効果的であるにもかかわらず、その方略は用いられず、なおその原因についても説明は困難であると述べながら、文を<書く側>の認識のみならず<読む側>の認識をも視野に入れた総合的な考察が必要であると主張している。

深澤（2003c）は、更に、『太陽』の前身雑誌であった『日本大家論集』と含む5種の雑誌²²における文の<表記>や<文体>、その中における外国の物事の表記傾向を明らかにしている。文の<表記>に関しては、1889年から<漢カ交>から<漢ひ交>の移行が見られているものの<文体>が依然として<文語体>優勢という『太陽』初期と同様の傾向が見られている。外国の物事の表記においては文の<表記>に関係なく漢字表記が非常に多く、これは<カタカナ>表記がほぼ同率で見られた『太陽』初期の傾向を異なっている。これについて深澤（2003c）は、当時、現代<口語体>と認識されている新文体が十分確立しておらず、文法的側面においても<文語体>と大きな違いが認められていなかったことから、漢字が選択され続けた可能性について述べている。

2. 本章の方向性

上記の先行研究の深澤の一連の研究は、語彙的な側面も混在しており、本稿の観点や方向性とは少々合致しない側面があると思われる。そこで、本稿では語彙的側面を最大限排除しつつ、<文体>や<表記>の側面のみを汲み取りながら論

²² 『日本大家論集』 『日本之法律』 『日本商業雑誌』 『婦女雑誌』 『日本農業新誌』

を進め、〈語彙〉の〈表記〉に関しては、必要な場合のみ言及することとする。
 以上を踏まえ、先行研究をまとめたものが、以下の〈表-12〉である。

〈表-12〉 先行研究の〈文体〉と〈表記〉状況

資料 年度	『中央公論』	『婦人公論』		『太陽』（前身5種を含む）	
	文体	文体	表記	文体	表記
1887年	文語体			文語体	漢カ交
1891年					
1892年					
1894年					
1895年					
1900年					
1901年	両文体混在				漢ひ交
1907年					
1909年					
1910年	口語体	口語体	漢ひ交	口語体	
1916年					
1919年					
1924年					
1925年					
1926年					
1928年					

全ての雑誌資料において、〈表記〉と〈文体〉の交替は徐々に行われたと考えられる。一方、〈文体〉の混在に関しては『中央公論』の研究でのみ見られるため、そこにのみ〈両文体混在〉という欄を設けた。他の雑誌資料においては、該当する〈表記〉や〈文体〉が優勢であったという認識で差し支えないと思われる。なお、『中央公論』には〈文の表記〉に関する言及がないため、〈表記〉欄を設けなかった。全体的な傾向として、〈文体〉の交替は1909年から、〈表記〉の交替については『太陽』系列のみであるが1894年からその移行が見られている。

先行研究で用いた雑誌資料は全て〈総合雑誌〉であるが、この雑誌は特定の分野に偏らず多様な内容扱っているため、当時の読者層が文字の読み書きのできた人に限られるものの〈専門雑誌〉よりは相対的に幅広い読者層を持っていたと予想される。一方、〈専門雑誌〉は文字の読み書きのできる人の中でも特定の分野に関心のある人を対象に書かれたものであるため読者層が非常に限られ、ここで用いられる認識は少々特殊なものであると言えよう。本稿では、〈専門雑誌〉を〈総合雑誌〉に対立するものとして取り扱い、〈総合雑誌〉に見られる言語的認識が一般的な認識に似ていたと捉えることとする。

〈〈知識〉に関する〈内容〉は〈文語体〉と〈漢カ交〉で書かれるべきである〉という認識が知識人の間で長く保持されていたと述べたが、この〈表記〉や〈文体〉にも交替傾向が見られるとしたら、社会的に無視できないほどの一般化が進んでいた証拠としても捉えられよう。言い換えると、このような認識の変化にも関わらず変わらないものがあるとしたら、それがその機能呼び起こす中心的な要素である可能性が非常に高いということである。よって、〈総合雑誌〉のみならず〈専門雑誌〉をも視野に入れることで、〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の関係性や〈表記〉の機能をより明確にすることができよう。

本稿では、知識に関する内容を取り扱う雑誌を資料として取り上げ、前章の国語読本同様、三要素の関係性と〈カタカナ表記〉の機能を明確にする。医学専門雑誌である『中外医事新報』（以下、中外）と『医学中央雑誌』（以下、医中）の2種類に、海洋の気候専門雑誌である『海と空』（以下、海空）を加えてその傾向や状況を概観する。

雑誌資料は『国立国会図書館デジタルアーカイブ』に公開されているPDFファイルを用いる。題名などは公開されているものをそのまま用い、誤字や文字が省略されている箇所は目視で記入した。3種類の雑誌は10年おきに、各年度の最初と最後に発行された二巻ずつを対象とする。しかし、『中外』は1880年に創刊されたものの、当サイトにおいては1882年のものから掲載されている点か

ら、1882年のものから概観する。なお、この雑誌の閉刊年度は1940年であるため、最後の年度は1942年ではなく1940年とする。また、他の雑誌の内容をそのまま引用したと見られるものは調査対象外とする。更に、本稿では〈内容〉を〈知識分野〉と限定したので、〈内容〉が如何なるものなのかについては特別な事情が見られるのみに言及し、それ以外は言及せず〈知識分野〉と捉えるものとする。

3. 〈雑誌〉に見られる〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の関係

以下、専門雑誌ごとの〈文体〉〈表記〉の状況をまとめ、その関係性を概観する。各資料の詳細については、別途資料を参照されたい。ただし、『医学中央雑誌』はその量が非常に多いため、題名を数字で表している点は、予め断っておく。

3.1. 『中外医事新報』

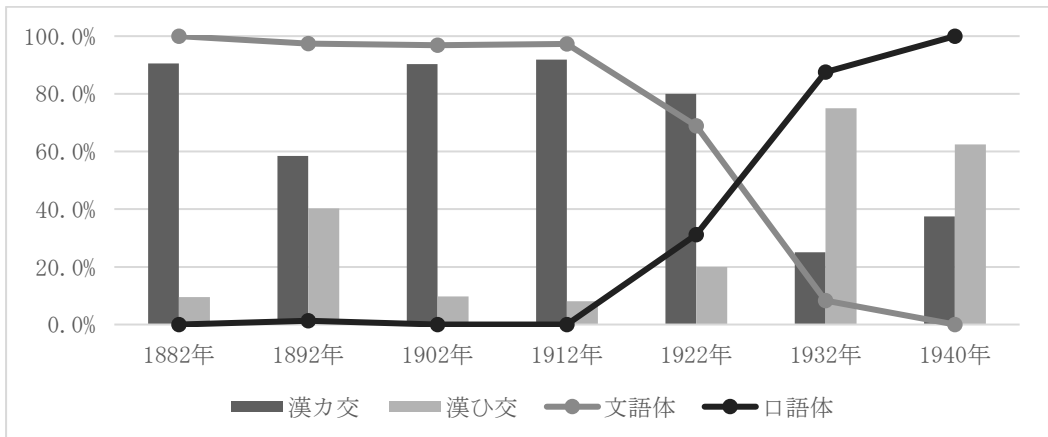
『中外』は1880年から1940年まで刊行された〈医学総合雑誌〉で、西洋の医学論文や医学に関するエッセイのみならず日本人による論文も掲載されているものである。『中外』資料の対象年度は1882年、1892年、1902年、1912年、1922年、1932年、1940年であり、後述する理由により1923年から1931年までのものも対象とする。用例は全体で588件である。詳細は、〈資料2〉を参照されたい。

まず、『医中』の〈表記〉と〈文体〉状況を以下の〈表-13〉に提示し、各々のグラフを〈図-2〉に記す。薄い網掛けは件数が一番多いもの、濃い網掛けは比率が一番高いもの、斜線は0件であることを意味する。

<表-13> 『中外』の<表記>の<文体>状況（1882年から1940年まで）²³

	文の表記			文体		
	漢カ交	漢ひ交	その他	文語体	口語体	その他
1882年	19 (90.5%)	2 (9.5%)		21 (100%)		
1892年	45 (58.4%)	31 (40.3%)	1 (1.3%)	75 (97.4%)	1 (1.3%)	1 (1.3%)
1902年	56 (90.3%)	6 (9.7%)		60 (96.8%)		2 (3.2%)
1912年	34 (91.9%)	3 (8.1%)		36 (97.3%)		1 (0.7%)
1922年	36 (80%)	9 (20%)		31 (68.9%)	14 (31.1%)	
1932年	6 (25%)	18 (75%)		2 (8.3%)	21 (87.5%)	1 (4.2%)
1940年	6 (37.5%)	10 (62.5%)			16 (100%)	

<図-2> 『中外』の<表記>の<文体>状況（1882年から1940年まで）²⁴



<表-13>と<図-2>から、1892年に一時的に<漢ひ交>が急増するが1902年にまた急減し、1922年と1932年の間で逆転している傾向が見られている。先行研究で取り上げた総合雑誌の『太陽』系列の雑誌が1894年から<漢ひ交>優勢に変わり、『婦人公論』は創刊した1916年からすでに<漢ひ交>であったことに比べるとこの傾向は10年近く遅いもので、専門知識に関する雑誌における認識の保守性が見て取れる。

²³ 単位は<件>である。

²⁴ 単位は<%>である。

また、特定の欄に＜漢カ交＞が偏っていることも見られている。＜摘録＞はほぼ全ての年度に見られるもので日本国内や外国で発表された論文や発表の概要及び要点を翻訳して提示した学術的なものである。全体の 91 件のうち、＜漢ひ交＞は 1 件のみで、他は一貫して＜漢カ交＞が選択されている。

＜文体＞の傾向はかなり鮮明で、1922 年と 1932 年の間で傾向の逆転が見られている。1940 年には全体が＜口語体＞で、もはや＜文語体＞は見られない状態である。

1892 年の＜口語体＞は 1 件で、「赤痢病原探究結果報告（續）」という題名の文に見られている。話し手が聞き手を意識しているような表現がいくつか見られている点において、発表した内容を書き写した速記であると思われる。下の下線部は、実際の聞き手がいなくかなり不自然な言語要素で、現場性のあるものであることを明らかに示している部分である。

(17) 扱て是から私が當地に於て研究した處の成績を御話致しませう。（後略）（『中外醫事新報』（306）、25頁）

(18)（前略）日下の両君は今回の試験には非常に御助力ありてお蔭で斯く速に成績を得る事が出来ましたから改めて茲に深く其勞を謝します（聴衆拍手大喝采）（完）（『中外醫事新報』（306）、33頁）

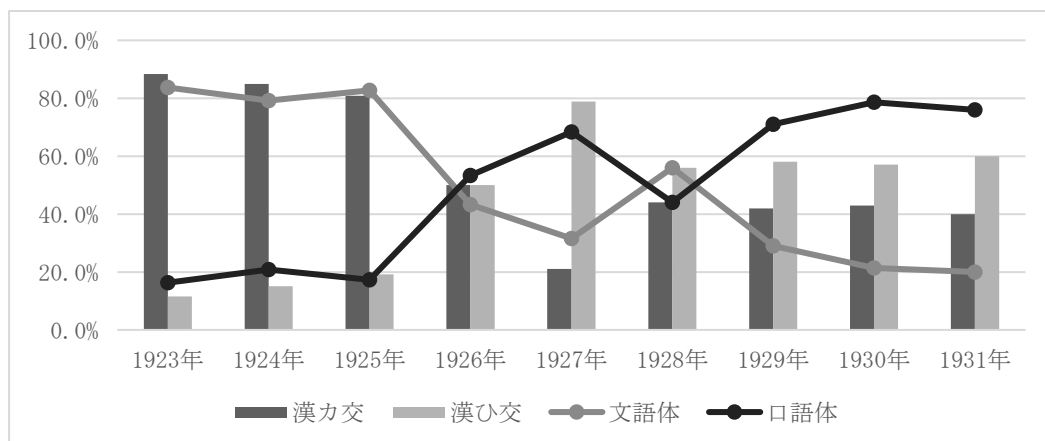
1892 年の＜その他＞は漢文で書かれたもので、＜表記＞も漢字のみで構成されている。1902 年のその他の 2 件は＜文語体＞と＜口語体＞の文法要素が一つの文の中で同時に現れているものである。文末が「である」体であるものの、連体形の「なりたる」や使役の連体形の「しむる」などが用いられ、＜口語体＞がまだ確立していない当時の状況を表しているものであると思われる。1912 年のその他も 1902 年と同様、文末と文法要素との混用が見られるものである。1932 年のものについては、後述する。

〈表記〉と〈文体〉、両方とも1922年と1932年の間に傾向が変わっているの
で、1922年と1932年の間の傾向を更に詳しく見る必要があると思われる。同
じく、10年間の〈表記〉と〈文体〉の様相を以下の〈表-14〉と〈図-3〉に提
示する。前回と同様、薄い網掛けは件数が一番多いもの、濃い網掛けは比率が一
番高いもの、斜線は0件であることを意味する。

〈表-14〉 『中外』の〈表記〉の〈文体〉状況（1923年から1931年まで）²⁵

	文の表記			文体		
	漢カ交	漢ハ交	その他	文語体	口語体	その他
1923年	35	5 (11.6%)		36 (83.7%)	7 (16.3%)	
1924年	45 (84.9%)	8 (15.1%)		42 (79.2%)	11 (20.8%)	
1925年	42 (80.8%)	10 (19.2%)		43 (82.7%)	9 (17.3%)	
1926年	15 (50%)	15 (50%)		13 (43.3%)	16 (53.3%)	1 (0.4%)
1927年	4 (21.1%)	15 (78.9%)		6 (31.6%)	13 (68.4%)	
1928年	11 (44%)	14 (56%)		14 (56%)	11 (44%)	
1929年	13 (41.9%)	18 (58.1%)		9 (29%)	22 (71%)	
1930年	12 (42.9%)	16 (57.1%)		6 (21.4%)	22 (78.6%)	
1931年	10 (40%)	15 (60%)		5 (20%)	19 (76%)	1 (4%)

〈図-3〉 『中外』の〈表記〉の〈文体〉状況（1923年から1931年まで）²⁶



²⁵ 以下、〈表-16〉まで、単位は〈件〉である。

²⁶ 単位は〈%〉である。

<表記>と<文体>要素の両方とも1926年から傾向の逆転が見られている。<文体>は1928年、一時的に<文語体>優勢となったものの翌年から<口語体>優勢に変わり、閉刊の1940年まで続くこととなる。『中央公論』と『太陽』において外来語の表記が漢字からカタカナに変わっている時期も1926年であり、ある相関関係が認められている可能性もあるものの、これについては更なる研究が必要であるため、これ以上のことは言及しないこととする。

また、1926年の<文体>のその他は、「モルモツト疑義、附、鶴文字の事」という題名の文に見られている。この分の筆者は医学論文を漢文と漢字で書いていた頃には問題がなかったものの、新たな文体が生まれ西洋の言葉、特に西洋の医学用語を無批判的に使用することにより不自然な日本語表現が多数見られるようになったことを批判し、このことにより、印刷の際に原稿に修正を要請することも多くなったと述べながら、その現状や医学用語の表記法などの問題について言及している。この文は、筆者がこの文を書くことになったきっかけについて言及している部分と、上記の詳細な内容を述べる部分からなっており、前者は<文語体>、後者は<口語体>で書かれている。また、後者の<口語体>には<申上げる>や<存じます>などの謙譲表現が一貫して見られており、へりくだった文になっている。なお、<只今例に挙げました臆と云ふ字に就て申しますならば、(後略)> (1345頁、下線は論文の作成者によるもの) という表現も見られ、直接演説をしているような感覚で書かれた文であると思われる。

1931年の「ベルツ先生内科醫局當直日誌(承前)」にも両方の表記が見られている。1889年のベルツという先生が在職していた内科で見つかった3冊の当直日誌をそのまま写したもので、1931年の1170号から連載されている。日誌を紹介する連載の最初の部分は<口語体>で書かれているのに対し、日誌の内容は殆ど文語体で書かれている。しかし、日誌の性格上、書き手が毎回変わっているわけで、特に笠原光興という人物は、最初は<文語体>を用いたものの次第に<口

語体>と<文語体>を混ぜながら日誌を書いている傾向が見られており、書き手による個人差が認められている。

- (19) 天気快晴、例に依て倍氏の外來診察室巡回等あり、夜に入り、院内静謐、絶へて病者呻吟の聲聞かず (3月6日、1173号:356)
- (20) 泰平無事、鼓腹擊壤。 (3月21日、1174号:407)
- (21) 本日高橋某氏の解體あり。夜に入り静穩。(中略) 其他「カンフル」注射等を行ひて、漸く輕快を致せり。(中略) 如何なる天幸なるや、無事に相濟みて幸福なりし。之に反して本夜の當直は思ひ遣られますね。(5月18日、1177号:564)
- (22) 一則あさ女に水を持參せしめ、久振りにて愉快の當直をしました。(5月20日、1178号:614)
- (23) 之れに就きても莫兎比涅の効力には……御影で安眠しました。(6月5日、1178号:615)
- (24) 此日天氣晴朗にして熱度亦甚だ酷ならず、郊外散策には屈竟なり。(6月23日、1180号:90)

また、他の人が作成した日誌の<文語体>にも<何でせう>や<筆誅し置きま
す>のような口語体文法の特徴が見られている。連載の始まった時期は 1931 年
であるが日誌の書かれた時期は 1890 年代以後である。その時代の傾向と比較し
てみると、論文や論説という特定の分野を除いて一般の領域においては 1900 年
代の前後から現代の<口語体>と認められある文体が少しずつ見られ始め、交替
の兆しが見られていたと思われる。

なお、全時期において、雑誌の最後の部分に<雑事>という欄が設けられてお
り、日本国内や海外の医療保険に関する情報や学会及び発表会の開催のお知らせ、
特定の個人の事情などが載せられている。本文の内容に比べると専門性が非常に
薄く、<表記>においても 1892 年から 1940 年まで一貫して<漢ひ交>が選択さ
れており、<文体>は、<文語体>で書かれていたものが 1932 年から<口語体
>に交替されている。<表記>要素より<文体>要素の交代が遅れて見られてい

ることは、<文体>要素と<内容>との膠着性が非常に強かったことを表すものであると考えられよう。

3.2. 『医学中央雑誌』

『医中』は、1903年ドイツの『医学全科中央雑誌』とモデルにして作られた雑誌で、当時、日本で書かれた医学論文の題名と抄録、海外の学会などで発表された著名な論文の翻訳などが掲載されていた<医学論文雑誌>である。現在は紙の雑誌を発行しておらず、『医中誌 web』という医学関連論文の検索サイトとして運営されている。

『医中』資料は、『中外』と同様、1903年から1943年まで10年おきに、その年の最初と最後に刊行されたものとする。用例は全体で3183件である。全体の内容としては、海外や日本全国の著名な医学関連雑誌や書籍に掲載された論文の概要をまとめたもので専門性が前者の『中外』より相対的に強い。1933年からは日本の論文のみが収録され、概要がなく論文の題名や著者、掲載された雑誌名のみのももある。概要が書かれていないものは統計から除外した。詳細は紙面の都合上、提示しがたい点を予め断っておく。

『医中』の<表記>と<文体>の状況を、以下の<表-15>に提示する。なお、数値においてもかなり明確な傾向が見られたため、グラフと網掛けによる提示は省略する。

<表-15> 『医中』の<表記>の<文体>状況（1903年から1943年まで）

	文の表記			文体		
	漢カ交	漢ひ交	その他	文語体	口語体	その他
1903年	218 (100%)			218 (100%)		
1913年	193 (100%)			193 (100%)		
1923年	523 (100%)			511 (97.7%)	12 (2.3%)	
1933年		1007 (100%)		1002 (99.5%)		5 (0.5%)
1943年		1242 (100%)		1239 (99.8%)		3 (0.2%)

少数ながら両表記が共存した『中外』に比べ『医中』ではその傾向が見られず、1923年と1933年を境界にその傾向が完全に逆転している。なお、表記交替の時期は『中外』と同様であるものの表記傾向は非常に明確な形で見られている。

<文体>においては、全ての年度において<漢語+ス>の漢語動詞、<なり>や<たり>、<如し>や<ず>などで文が終わる形式が多く見られ、全体的に<文語体>の体制が保たれている。1923年に一時的に口語体が見られるが、すぐ消えているのも特徴的である。1923年の389号には翻訳された海外の論文が2件、410号には3件掲載されているが、いずれも<である体>が選択されており、日本人による国内論文に見られる<口語体>は7件である。1933年と1943年に見られる<その他>は、概要が数値だけで書かれているもの、及び文が非常に短いため文法要素を通じての文体の判断が難しいものである。しかし、これらのケースはかなり少なく、いずれかの文体に分類されても結果や傾向を覆すほどの多大な影響は与えられないと判断し、明確な分類は試みないこととする。以下、<その他>に分類したものの例を提示する²⁷。

(25) (1) 軽機関銃空包に依る腿背管銃創。 (2) 軽機関銃空包に依る自殺。 (3) 小銃実包弾に依る胸部貫通銃創。 (「銃創の三例」、642:78)

(26) (1) 色盲患者に網膜有髄神経を併有する症例。 (2) 全色弱の一例。 (3) 乳頭血管異常分岐の二例。 (「最近一ヶ年間に於ける興味ある臨床例」、665:934)

<表記>の交替は認められたものの<文体>の交替は一時期のゆれが見られただけで、少なくとも1943年までは<文語体>が好まれる傾向が続いている。こ

²⁷ 漢字は現代の表記で書き直したものである。

ちらでも、＜内容＞と＜文体＞の間の膠着がかなり強勢であったことが認められている。

3.3. 『海と空』

『海空』は1921年から2015年まで海洋気象学会で発行したもので、海洋の天気及び気象に関する研究論文やエッセイなどを掲載する＜学術雑誌＞である。

『海空』資料は、1921年、1931年、1941年、1945年の最初と最後に刊行されたものを対象としており、全体の用例は48件である。全体的に学術的な色彩が強く、日本人による投稿論文のみならず外国の論文を翻訳したもの、学界に属する会員の個人的な知らせなども簡略に挙げられている。＜表記＞と＜文体＞の状況を、以下の＜表-16＞にて提示する。なお、件数がかなり少ないため、グラフと網掛けによる提示は省略する。詳細は、＜資料3＞を参照されたい。

＜表-16＞ 『海空』の＜表記＞の＜文体＞状況（1921年から1945年まで）

	文の表記			文体		
	漢カ交	漢ひ交	その他	文語体	口語体	その他
1921年	1 (7.7%)	12 (92.3%)		1 (7.7%)	12 (92.3%)	
1931年		8 (80%)	2 (20%)		8 (80%)	2 (20%)
1941年		12 (75%)	4 (25%)		12 (75%)	4 (25%)
1945年		9 (100%)			9 (100%)	

『海空』は＜知識分野＞の雑誌であるにもかかわらず、先述した医学雑誌2種類と違って＜漢カ交＞と＜文語体＞が1件のみ見られ、ほぼ全ての文が＜漢ひ交＞と＜口語体＞になっている所が特徴である。また、＜その他＞は文が存在せずタイトルのみ挙げられているもので、＜表記＞と＜文体＞の判定が不可能なものである。＜文語体＞は1921年の1-1号の＜大正十年四月十三日～十七日の黄砂に就きて＞という題名の文に用いられており、＜漢ひ交＞と共起している。また、＜漢カ交＞は1921年の1の8号の＜ニゲリアノ風ト天候ト雨量＞という翻

訳文に見られ、＜口語文＞と共起している。ここでは前の雑誌とは異なる＜内容＞＜文体＞＜表記＞の相関関係が見られている。

4. ＜雑誌＞に見られる＜カタカナ＞表記の傾向

以上の『中外』『医中』『海空』は＜内容＞的には＜知識＞に近いという共通項があるにもかかわらず、＜表記＞と＜文体＞においては異なる傾向が見られている。全体的に見ると、1900年代前後から発行されたものは＜文語体＞と＜漢カ交＞優勢、1920年代前後から発行されたものは＜口語体＞と＜漢ひ交＞優勢という傾向が見られていると言えよう。なお、＜文体＞や＜表記＞傾向の変化も一般的なく＜総合雑誌＞より10年遅く表れている、＜知識＞分野の保守性が見て取れるところでもあると考えられる。

先行研究で見られている＜総合雑誌＞の場合、文の＜表記＞の傾向は『太陽』系列にのみ見られるため一般化することは難しいと思われるものの、その傾向だけを取り上げると、＜表記＞は1900年代以前にすでに交替が見られており、＜文体＞は1900年代後半に交替がほぼ完了していることが見て取れる。1910年代から刊行された『婦人公論』が初めから＜漢ひ交＞と＜口語体＞で書かれていることは、すでに、そのような＜表記＞と＜文体＞が一般的であるという認識が広まっていたためであると考えられよう。

一方、＜知識雑誌＞の場合、＜表記＞と＜文体＞両方とも1920年代に至ってようやく交替が見られるようになる。『医中』の場合、＜文語体＞が終戦まで優勢であることが見られている。1920年代から刊行された『海空』の＜文体＞と＜表記＞が＜総合雑誌＞と同様＜口語体＞と＜漢ひ交＞優勢になっていたことは、この時期には＜知識＞関連の＜内容＞のものは＜文語体＞と＜漢カ交＞で書くべきだという認識がかなり弱まり、たとえ＜知識＞関連のものであっても、従来の認識にとらわれず、一般的になっていた＜表記＞と＜文体＞を選択しても良いという認識が広まっていたと言えよう。言い換えると、一度膠着した＜

知識><文語体><漢カ交>の組み合わせも1920年にはすでに解体されていたが、知識関連分野の保守性がその変化を受け入れず導入を遅らせた可能性がある。つまり、この三要素の組み合わせは非常に頑固であったとも言えよう。

以上をまとめると、<内容><表記><文体>の三要素の関係、及びその認識は、少なくとも1900年代後半までは影響を及ぼしていたと考えられる。そして、<表記>要素が要素としての影響力を先に失い、<文体>と<内容>は既存の規範的な枠組みの中でのみ関係性を保持したまま、終戦までその関係を維持したのではないかと考えられる。すなわち、1900年代以後から作られたものは既存の<内容><表記><文体>の構造に縛られず、社会一般に広まっていた<表記>や<文体>が選択される傾向が次第に強くなったと言えるものの、<文体>においてはある程度<内容>との関係性が認められた状態であったということである。一方、語彙表記の側面ではあるが、<文体>が語彙の<表記>に影響を与えていた可能性を述べた先行研究の深澤（2003c）の考察もあり、<表記>要素が関係性を全く持っていない可能性は非常に低いと言えよう²⁸。以下、三要素の関係性を提示する。

<雑誌>の三要素の関係：<内容>—<文体>/<表記>

以上のことから、<漢カ交>表記は明治以前から<知識>関連内容と関係があるかのように認識させる機能があったと考えられる。これを裏付けるものとして、木坂基（1989）の研究が挙げられる。木坂（1989）は、明治期に発行された文献や雑誌などの資料から、日本の近代化に影響を与えたと思われる書籍と集め

²⁸ これは文の表記意識と語彙の表記意識を同じレベルで取り扱ってもいいのか、ということにも繋がると思うが、これらの意識はまったく同様のものではなくてもその根底では同じものを共有して可能性が高い。故に、本稿ではこれらが同じ意識を共有しているという仮定で論を進める。

て1928年に発刊した『明治文化全集』から五巻²⁹を選択し、それらの〈表記〉と〈文体〉の状況を以下の〈表-17〉のように提示している。

〈表-17〉 『明治文化全集』における〈文体〉と〈表記〉

	1位の組み合わせ			2位の組み合わせ			その他
	文体	表記	件数	文体	表記	件数	件数
自由民権	漢文直訳体	漢カ交	8件 (47%)	普通文語体	漢カ交	3件 (17.6%)	6件 (35.4%)
外国文化	漢文直訳体	漢カ交	5件 (41.7%)	軟文型 普通文語体	漢ひ交	3件 (25%)	4件 (33.3%)
風俗	軟文型 普通文語体	漢ひ交	7件 (43.8%)	漢文直訳体	漢ひ交	3件 (18.6%)	6件 (37.6%)
文明開花	言文一致体	漢ひ交	8件 (26.7%)	普通文語体	漢ひ交	7件 (23.3%)	15件 (50%)
雑誌	漢文直訳体	漢カ交	186件 (81.2%)	軟文型 普通文語体	漢ひ交	11件 (4.8%)	32件 (14%)

木坂（1989）は、『自由民権』『外国文化』『雑誌³⁰』には論説³¹的内容が多く、『風俗』『文明開花』には一般市民の生活や世間の流行などに関する内容が多いと述べながら、前者には〈文語体〉と〈漢カ交〉の組み合わせが、後者には〈口語体〉と〈漢ひ交〉の組み合わせが優勢であることを提示している。

しかし、全体の用例数が少なく、〈表記〉と〈文体〉の組み合わせの数に有意な差が見られずかなり多様な組み合わせが試みられている点を考えると、ここに見られる傾向が果たして一般的なものであったかについては疑問が残る。これは、当時、西洋からの新たな思想を受け入れる過程で日本社会及び言語体系に影響を与え、既存の組み合わせが崩壊している途中であることを表していると思われる。にもかかわらず、日常生活と関わる内容においては〈口語体〉と〈漢ひ交

²⁹ 『自由民権編』第五巻、『外国文化編』第十六巻、『雑誌編』第十八巻、『風俗編』第十九巻、『文明開化編』第十二巻

³⁰ ここでは〈論説雑誌〉や〈論文雑誌〉などを指す。

³¹ 論説とは、自分が所有している知識を、その素養や知識を持っていないものに伝えるためのものであると言えよう。その点において、論説的内容とは知識的内容と同等の意味を持っているもので、前者を〈知識的〉なもので捉えてもいいように思われる。

>の組み合わせが、知識と関わる内容においては<文語体>と<漢カ交>の組み合わせが少なからず優勢であることは、<表記>や<文体>が相応しいという認識が非常に強かったことを意味しているとも言えよう。

まとめると、程度の差はあるものの、<表記>と<文体>要素には、文の<内容>が読み手に特定の内容と関係があると予め予測させる機能が潜められていた。特に<文語体>と<漢カ交>には文の内容が<知識めいたもの>であると予測させる機能があり、両者はほぼ同じ影響力を持っていたと思われる。一方、1900年代以後からその機能は<文体>要素にほぼ委ねられ<表記>要素の影響力は非常に弱くなったものの、認識としては依然として<知識と関わるものである>という機能を持っていたと思われる。しかし、そのプライオリティは<文体>要素より低くなり、同様の影響力を持っていた頃に比べると<重要ではない>要素と化したとも言えよう。言い換えると、雑誌分野における<漢カ交>表記は、<知識と関わっている可能性を強調する副次的な要素>として機能していたと考えられる。

<雑誌>の<カタカナ>表記の機能：

<知識>めいたものであることを表す副次的要素

<副次的>とは、<選択肢として二番目となるもの>であって<なくてもいい>ものではないことに注意されたい。これは<文>を表すためには<文字>体系が必要であるためである。本稿では、文が如何なる内容であるかを素早く認識させるに当たって<表記>要素より<文体>要素が強く影響していた可能性を提示しているのみで、両要素の優劣を述べているわけではない。この関係については本稿の後半で更に述べることとする。以下、新聞資料の<告知文>の傾向を概観する。

第4節 新聞の〈告知文〉に見られる〈カタカナ〉表記

〈新聞〉は明治期から情報や知識を与える非常に有効な手段として用いられており、現代においても、形態は多少変わったものの、かなりの影響力を持つメディアの一つである。しかし、〈新聞〉も先述の〈雑誌〉と同様、相対的に裕福で知識のある人々が手にすることが多かったと見られ、〈雑誌〉と同様、ある程度知識を有している社会構成員の意識を再確認することになると思われる。一方、〈雑誌〉資料の考察において、〈知識との関係性を表す副次的要素〉として機能している可能性が挙げられたため、その傾向をより一般性のあるものに近づける作業としても〈新聞〉資料を用いての考察は意義があると思われる。なお、本章では〈新聞〉を資料として用いるが、新聞の記事ではなく新聞に掲載されている〈広告〉の下位分類の一つである〈告知文〉という限定した資料を用いて先述の資料と同様〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の関係と〈カタカナ〉表記の〈機能〉を概観する。

1. 先行研究

新聞、特に広告の研究は、その形態の変化過程や発達過程に焦点が当てられており、言語学観点からのものはほぼ見られない状態である。そこで、本章の先行研究でも直接的に言語学観点から概観したものはなく、間接的に垣間見ることのできるものが挙げられることとなる。

まず、明治期や大正期の新聞媒体の影響力や読者層について言及した研究として、山本武利（1974）のものが挙げられる。山本（1974）は、1922年と1924年の時点で文字の読み書きができないイリテラシーの比率が日雇労働者と女性の方が相対的に高いという調査結果をもとに、その階層における新聞購読率もかなり低かったと推測している。更に、相対的に若い世代であっても学歴が高くなるに

つれ新聞および雑誌の購読率が高く、新聞の購読率には年齢要因のみならず学歴の要因がかなり影響を与えている可能性を提示している。

片山朝雄（1996）は、現代の新聞に掲載されている記事などの言語基準に関して述べている。現代の新聞や放送で使用される〈漢字〉制限や〈文法〉は国語審議会が制定した現代日本語の標準的使用法に準じているが、それは新聞社や放送局が直接介入できる記事やニュースなどの限られたもののみ適用されるもので、広告などの領域においてはその基準が厳しく適用されない可能性が高かったであろうと述べている。

春原昭彦（2004）は、戦前の新聞に掲載された広告の発達過程について調査している。明治初期にはまだ〈広告〉という用語が定着しておらず、〈報告〉〈報条〉〈告文〉などの多様なものが用いられていたと指摘している。形式的側面においても、明治初期の最初の新聞広告は文字のみで構成されていたものが多数であったが、1877年以後から絵や写真が挿入されたものや広告欄の大きさや文字の大きさを調整したものなど、視覚的側面へ移行するようになったと述べている。なお、当時は〈広告〉という用語の意味や概念も現代と異なっており、商品を紹介するもののみならず求人広告や役所および一般団体によるお知らせなども〈広告欄〉にまとめて掲載されていたため、現代の〈広告〉と同様の感覚で捉えてはならないと主張している。

2. 本章の方向性

〈新聞〉は文字の読み書きができる少数のリテラシー向けの媒体であったが、その集団の中では非常に影響力のあるものであったと考えられる。また、同じ新聞に掲載されたものであっても、〈記事〉と〈エッセイ〉〈広告類〉〈連載漫画〉などの要求される言語意識は質的にやや異なっており、特に、その〈広告〉の概念が現代のものと質的に異なっていることも明らかになった。言い換えると、新聞の広告類に見られる言語意識は新聞記事に要求されるような厳格なものでは

なかったものの、社会一般が受け入れられるようなものであったということである。同時に、新聞記事に用いられた言語意識は理想的なもの、その他の領域に用いられた言語意識は、ゆれは例外などをも含めて社会一般に受け入れられた多少はゆるい言語意識で、後者の方がより一般的な意識を反映したものであったと言えよう。

先述したように、戦後と戦前の〈広告〉の概念は質的に異なっているため、本章における〈広告〉の定義を明確にしておく必要がある。巽健一（2004）は、現代の〈広告〉とは、本来の目的を果たすために特定の媒体に接した際〈間接的に触れることになるもの〉で、特定の情報を与えることを第一の目的としている点において、〈組織および個人による意図的・一方的なコミュニケーション活動〉でもあると定義している。例えば、電車の中に掲載されている〈広告〉は特定の目的地に向かうために電車を利用する過程で触れることになるもので、その〈広告〉を見るために電車を利用することは滅多に見られないということである。巽（2004）は以上をまとめ、現代の〈広告〉の性質を、〈間接的〉〈意図的〉〈一方的〉〈コミュニケーション活動〉であると述べている。一方、戦前の〈広告〉に関しては先行研究の春原（2004）が指摘しているように明確な定義がなく、現代の感覚では〈広告〉として認め難い非常に多様な物事が〈広告〉として取り上げられている。



＜図-4＞ ＜読売新聞＞1886年9月30日の広告の一部

上記の＜図-4＞は＜広告欄＞に掲載されたもので、左から順に、＜新聞の価格を下げることを告げるもの＞、＜＜星松三郎＞という個人の事情を知らせるもの＞、＜工芸見本館の開館を知らせるもの＞となっている。前者の2件は特定の内容を＜受け手＞に一方的³²に伝えるもので、後者の1件は特定の内容を目にした＜受け手＞がある行動をするように働きかけているものである。現代の＜広告＞は特定の商品を紹介することで企業側が利益を得ようとしているものが多く、＜広告＞を目にした＜受け手＞が、商品を購入するか特定の場所に訪問するかという＜行動＞を起こさなければ成り立たないように仕組まれている。よって、＜図-3＞の前者の2件と後者の1件の＜広告＞は質的にやや異なり、相互の行動を前提としているか否かに関わる＜方向性＞、不特定多数か特定の人物たちを対

³² ここで取り上げた＜一方的＞という単語は、先述の巽（2004）が提示した＜一方＞というものとは質的に異なっている。巽（2004）が取り上げた＜一方的＞とは、不特定多数の＜受け手＞の反応が必要になるものの紙や映像という媒体の性質上即時的な相互コミュニケーションができないということにおけるもので、本稿で取り上げる＜一方的＞とは、特定の＜受け手＞に伝えたい内容のみを伝える段階でコミュニケーションが終わっても差し支えないということにおけるものである。

象にしているか否かに関する〈対象〉という二つの要素において違いが見られていると思われる。

本稿では、前者の2件のように〈特定の人たちにのみ特定の内容を知らせること〉に焦点が当てられているものを〈告知文〉と称し、考察対象とする。〈告知文〉という分類名は本稿の試みによるもので、〈特定の内容を知らせる〉機能が多く見られるため当てたものである。後者の1件も〈告知文〉に似ているものの、〈不特定多数に特定の働きをするように誘導する〉という側面において、現代の〈広告〉の感覚に近いと思われる。更に、先述したように、後者のような働きをする〈広告〉も明治初期までは〈文〉中心であったものの、徐々に絵や写真などの視覚的要素中心に発展していたため、その後も依然として〈文〉形式中心であった〈告知文〉を考察対象として取り上げた方が適切であると判断した。言い換えると、特定の内容を知らせる働きをする広義としての〈広告〉という媒体は、情報を一方的に提供することでも成立する〈告知文〉と相互の働きが前提となっている狭義の〈広告〉からなっていると言えよう。ここで、〈広告〉の用語を分割しないのは、本稿が対象とする資料は〈告知文〉であり、〈広告〉という用語は文脈によって十分読み分けられると判断したためである。簡略にまとめると、以下のように提示できる。

広告（広義）＝〈告知文〉＋〈広告〉（狭義）

本章では、先述の章と同様、〈告知文〉を用いての〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の関係性とその中における〈カタカナ〉表記の機能を明確にすることを目的とする。〈告知文〉の資料は、インターネットの画像アーカイブに掲載されているものを活用する。明治期の1890年までの資料は〈大学共同利用機関法人人間研究文化機構 国文学研究資料館〉の〈明治期出版広告データベース〉を用い、1891年から1945年までの資料は〈東京大学総合研究博物館〉の〈日本の新

聞広告 3000>のアーカイブを使用する。日本の全国紙である<読売新聞>、<朝日新聞>、<毎日新聞>、<日本経済新聞>、<産経新聞>を中心とするが、<産経新聞>は正式の創刊年度が1942年であるため除外する。また、必要に応じて、上記の新聞意外のものも参照する。一方、<日本経済新聞>も同様に1942年の創刊であるものの、その前身である<中外物価新聞>、<中外商業新聞>のデータが存在しているため、この両者を対象とする。なお、新聞によっては東京・大阪などの地域で発行されたものを個別に扱っているものもあるが、本発表においては地域による区分は行わず、同一のものとして取り扱う。サイトに<新聞名>で検索をかけ、各年度の検索結果の最初と最後のものを考察資料とするが、画像の問題で判別が非常に困難な場合はそれ以前や以後のものを対象とする。

なお、先述の<表-1>においては、<告知文>資料の対象時期を1880年代から1910年代のみとしているが、これは<告知文>の数が1880年から1940年代に進むにつれ減少する一方で³³、ここで見られる<表記>や<文体>要素の機能は、主に1880年代から1910年代のものとして捉えた方が適切であると判断したためである。よって、1880年代から1940年代までの資料を対象としているものの、ほぼ9割が1880年代から1910年代のものであるため、その時期のみの意識として捉えた方がより適切であるということである。

³³ 全体の99件のうち、1880年代に31件、1890年代に22件、1900年代に7件、1910年代に25件、1920年代に13件、1930年代に0件、1940年代に1件見られている。実際の広告を目視しても、狭義の<広告>は徐々に特定商品を紹介するために視覚的方略が多く用いられたようになり、<告示文>はほぼ見られなくなる。資料の年度の偏りも考慮しなければならないものの、この方向性自体は適切であると考えられる。

3. 新聞の〈告知文〉に見られる〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の関係

まず、上記の時期および新聞に掲載されている全体の広告数と〈告知文〉の状況を、以下の〈表-18〉に提示する。

〈表-18〉 戦前の各新聞社の広告状況（単位：件）

	広告欄全体の件数	〈告知文〉の件数
読売新聞	310	46 (14.89%)
朝日新聞	204	19 (9.31%)
毎日新聞	145	26 (17.93%)
日本経済新聞系列	75	8 (10.67%)
総計	734	99 (13.49%)

先行研究の春原（2004）によると、1909年6月から1910年5月までの新聞広告の全体行数は2705行であり、薬品に関するものが489行、化粧品に関するものが362行、書籍に関するものが321行で、この三つの商品が広告全体の4割を占めており、影響力が非常に強かったと推測できる。一方、〈告知文〉は平均的に1割から2割を占めている点で、件数においては少ないものの、一定の比率を保持していたことが見て取れよう。

また、〈告知文〉は大きく個人によるものと一般会社などの一般団体によるもの、公的団体によるものとで分類できる。〈個人〉は、個人名を出して特定の内容を掲載したもの、〈一般団体〉は特定団体が特定の商品を披露する目的でなく、お知らせなどの内容を掲載したもの、〈公的団体〉は役所や裁判所などの団体によるものであると言えよう。〈個人〉は15件、〈一般団体〉は40件、〈公的団体〉は44件で、個人による掲載が認められていたものの、数的には団体が非常に優勢であったと見られる。

以下、〈告知文〉の〈表記〉や〈文体〉の傾向を以下の〈表-19〉にて提示する。

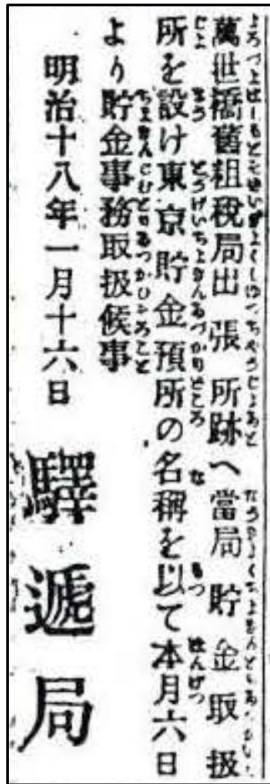
<表-19> <告知文>の<表記>と<文体>状況 (単位: 件)

		個人	一般団体	公的団体	計
文体	文語体	15	38	44	97
	口語体	0	2	0	2
表記	漢ひ交	1	14	17	33
	漢カ交	12	26	27	65
	その他	2	0	0	1

全体的に、<文体>としては<文語体>がかなり優勢、<表記>においては<漢カ交>が<漢ひ交>より二倍優勢という傾向が見られている。<表記>の<その他>は、<朝日新聞>1888年12月30日に掲載された両方の表記が混在しているものと、<毎日新聞>1926年9月10日に掲載された「横濱ギロン合名会社ギロン氏ハ神戸オリエンタルホテルに居る³⁴」という題名のもののみである。<文体>に関しては<口語体>が2件のみ見られているが、両方とも<主婦之友>という雑誌の出版社によるもので、関東大震災後の雑誌社の被害状況と、来月の発行の日程に関する内容である。この<口語体>傾向は、<婦人之友>という雑誌が、学歴のある女性よりのみならず更に多くの一般女性をも対象にしたものであり、内容的にも日常生活関連の内容を主力にしたものであったことと関係があると思われる³⁵。すなわち、全体的な雑誌の<内容>が日常生活と関係を持つため、<文語体>が選択されることはやや不自然であるという認識が働いた可能性が高い。

³⁴ しかし、助詞<ハ>は中世から意図的に片仮名で用いられてきたものなので、単にその意識が明治期まで続いてきたものである可能性が非常に高い。

³⁵ 石田あゆ(1998)は、同じ女性向け雑誌である『婦人公論』と『主婦之友』を比較している。石田(1998)は、前者のものは教養雑誌の色彩が強く、後者は日常生活を再現したものに過ぎず、ニュースや報道などのものはほとんど見られないため、両者には性格の違いが存在していることを指摘している。



<図-5> 1885年の告知文

文の<表記>に関しては、<公的団体>による<告知文>より<個人>による<告知文>の方で<漢カ交>表記が好んで用いられていることが特徴的である。<告知>というものがもつ<公的性>のために<個人>によるものでもその表記が好んで用いられていたと思われるが、それとは異なる要因が<個人>による<告知文>の表記に関与していることも考えられる。これに関しては、後述する。

本稿の最初の部分で述べた、<公的内容><文語体><漢カ交>の要素の膠着性について述べたが、その関係性が真であるかを抑えておく必要があると思われる。<告知文>の中でも<公的>な要素が相対的に強いと予想される<公的団体>に

よる<告知文>に注目し、具体的な<内容><表記><文体>の状況をまとめた。詳細は<資料4>を参照されたい。

<公的団体>による<告知文>の43件の全ての<文体>は<文語体>であり、<公的>な<内容>と<文語体>の強い膠着関係が認められている。文の<表記>においては、<漢カ交>表記が27件、<漢ひ交>表記が16件で、6:4の比率を成している。時期的にも、1900年代以前までは両表記がほぼ同率であったものの、1900年代以後は<漢カ交>優勢に転じている。全体的な<内容>としても工事の入札や不動産売買に関する知らせのものが多く、現代の<広告>の感覚とは非常に異なっていたものが多く見られている。

<図-5>は、<貯金業務の分散のため、新たな事務所を設けるという公告>という1885年の<告知文>であるが、<漢ひ交>で書かれているだけでなく平

仮名のルビが付されている。本稿の調査対象において、ルビが付された告知文はこの1件のみであり、かなり特殊なものであると言えよう。

4. 新聞の〈告知文〉に見られる〈カタカナ〉表記の傾向

まず、〈公的〉〈漢カ交〉〈文語体〉要素の膠着性が強く認められ、要素の間に関係性が存在していたことが更に明確になった。〈公的団体〉のみならず〈個人〉による〈告知文〉の全体から見ても同様の傾向が認められ、特に1900年代前後から〈漢カ交〉表記優勢傾向が強くなっていることが特徴的である。一方、〈読売新聞〉は他の新聞に比べて文の〈漢ひ交〉が相対的に多く見られているが、これは、〈読売新聞〉に掲載された〈公的団体〉の〈告知文〉の比率が他の三紙と異なり少なく見られていることと関係があると思われる。

〈文体〉と〈内容〉要素の強い膠着傾向、前の二つの要素と〈表記〉要素弱い膠着傾向は、先述の〈教科書〉と〈雑誌〉資料と同様の傾向である。また、〈公的団体〉の〈告知文〉の中でも、〈神奈川県庁〉の〈告知文〉は全て〈漢ひ交〉、〈東京都庁〉の〈告知文〉は全て〈漢カ交〉のように、官庁によって特定の文の〈表記〉が好まれて用いられている傾向も見られている。これは、文の〈表記〉が政府主導の政策により強制的に行われたものではなく、かなり自由に行われていたことを意味している。言い換えると、文の〈表記〉要素には特定の機能が存在するもののその影響力は微々たるものであったということである。よって、〈表記〉要素は、前の資料と同様〈副次的要素〉であったと言えよう。以上をまとめ、〈告知文〉における〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の関係は、先述の雑誌資料と同様、以下のように提示できるとと思われる。

〈告知文〉に見られる三要素の関係：〈内容〉—〈文体〉/〈表記〉

<団体>による<告知文>と<個人>による<告知文>に用いられている<文体>や<表記>要素の機能を同様のものとして取り扱ってもいいのかについては疑問が残る。まず、<文体>からすると、両者を同じ<文語体>で分類したものの、<団体>による<告知文>には<漢文>や<候文>に近い形式がよく見られている。<候文>は本来、手紙や書簡などのより日常生活寄りの分野で用いられたものであるものの、その性質故に方言などの影響を大きく受けず、全国で用いられる一種の標準語的地位を獲得することになったという五十嵐力（1935）の研究がある。また、荒井英次（1969）は、江戸時代の<候文>は手紙や書簡などの往来物のみならず、<公文書>や<貿易文書>などの公的なものにも用いられるなど、非常に広く用いられたものであったと述べ、更に、『演習古文書選』には、文の性質が<公文書>に近くなるほど、仮名の比重が低くなり<漢文調>に近くなる傾向が見られると述べている。実際、<公的団体>による<告知文>には文末の<候>のみならず、<なり><たり><すべし><漢語動詞>のような漢文文法要素が多く、仮名の比重は相対的に少ないことが見られている。一方、<個人>による<告知文>には<候文>の特徴だけでなく、<帰れ>などの<命令形>や<申上候>などの<敬語要素>、<告ぐ>などの和語動詞が見られ、<聞き手>を意識した、相対的に砕けた形式の<文語体>が用いられている。

<広告>の<受け手>は不特定多数であるが、<告知文>、その中においても<個人>によるものは<特定の人物>に向けて出されることが非常に多く、この性質は他のものとやや異なっている。すなわち、<個人>による<告知文>は、<送り手>が想定している<受け手>に伝えたい内容がなるべく早く届くようにするため、<新聞>という媒体を用いて行う手段であったと言えよう。言語において<聞き手>を想定した要素が多く見られているのは、このような性質から起因したものであると考えられる。

<個人>の<告知文>の表記に<漢カ交>表記が好んで用いられることも、このような性質から説明できると思われる。何かを知らせる行為自体はやや<公的

>なものであり³⁶、それ故に<漢カ交>表記が選択されることも十分考えられる。しかし、本稿では、その性質の特徴、すなわち特定の<受け手>に特定の内容を<伝達>することに集中し、<漢カ交>と<文語体>の組み合わせの意識が<電報>から起因したものである可能性を提示する。

<電報>とは、伝えたい内容を一文字ずつ電気信号で送り、<受け手>がその信号を受け取って指定された人にその内容を伝達する、というプロセスで対立しているものである。電話が普及していなかった時代には人手による手紙や書簡より内容を早く伝達することができ、地域が限定されていたものの非常によく用いられた手段である。この<電報>は、当然ながら<受け手>の住所を知らなければ利用することができず、なお、文字数によって値段が決められていたものの、少ない文字でもかなり高価格であったようである。このような事情から、<新聞>にそのような<内容>を掲載することは非常に有効なものであったと思われる。電報に比べるとその伝達速度はかなり遅いけれども、急を要しない出来事や<受け手>が複数いるとき、なお住所が特定できない場合には、毎日刊行される<新聞>を利用した方がより効果的であった可能性が非常に高いと推測できる。

当時の<電報>は<カタカナ>のみで書かれており、同時期の<個人>による<告知文>の<漢カ交>表記傾向とはやや異なっている。同じ<カタカナ>ということで捉えても差し支えないが、<漢字>が添えられていることは、当時の媒体及び技術上の限界によるものであった可能性が高い。初期の<電報>は文を一文字ずつ分解して伝達するものであった。よって、漢字表記まで伝達することはほぼ不可能で、<受け手>が任意に漢字を添えることになると、コミュニケーションにおいて誤解が生じる可能性が高く、当時の電報は、漢字を併用したくてもできない状態であったと言えよう。これは、<大阪朝日新聞>1934年6月23日

³⁶ もちろん、私的な内容もあるが、不特定多数が目にする<新聞>という媒体に掲載された時点で、少なからずの<公共性>が与えられると思われる。実際、<個人>による<告知文>の内容は<私的>な内容であっても伝えたい重要な内容のみ簡潔に記されていることが多く、その内容が非常に改まり、なお控えられている。

の〈参観者も驚嘆した漢字交じり 電報大鉄局では愈よ公用に使う 一般に応用を希望さる〉という記事からも見られ、当時の電報において、漢字が添えられることが非常に望まれていたことを意味している。しかし、新聞は媒体や技術の制約がかなり弱く、〈送り手〉による内容をそのまま掲載することができる。当時の認識において、ある内容を素早く伝達することは〈電報〉の役割であり、その〈電報〉は〈カタカナ〉で書かれてものであった。しかし、〈新聞〉という媒体では〈電報〉のような技術上の制約を受けなくなるため、〈カタカナ〉に〈漢字〉を添えた〈漢カ交〉が選択された可能性があると思われる³⁷。

以上をまとめると、〈個人〉よ〈団体〉による〈告知文〉に見られる〈漢カ交〉表記は、形態的には同様であるが〈機能〉においては異なっている可能性がある。以下、その内容を簡略にまとめて提示する。

- 〈個人〉の〈告知文〉の〈カタカナ〉表記の機能：
 - 〈電報〉と同様に機能することを表す副次的機能
- 〈団体〉の〈告知文〉の〈カタカナ〉表記の機能：
 - 〈公的〉な内容であることを強調する副次的機能

誰かに情報を一方的に与えるという同じ機能を持っているものの、〈文体〉要素や〈表記〉要素の機能はやや異なっている。これは、〈表記〉要素が、〈内容〉や〈文体〉要素との関係性よりは弱いものの、この二つの要素との影響関係は依然として持っていたことを意味している。〈電報〉と〈公的〉という両者の機能をもカバーできる上位の要因がある可能性、更に、もしくは〈告知文〉という

³⁷ 〈電報〉が如何にしてカタカナで表記するようになったのかは未だ明らかになっていない。後述するが、英語のアルファベットの大文字と日本語のカタカナ表記の間には使い方においてかなり共通しているところがあり、外国の物事が日本に入ってくつ際にそれが1:1という対応でそのまま〈カタカナ〉で表記された可能性もある。しかし、これに関しては更なる考察が必要であるため、これ以上は言及しないこととする。

ものが<公的>や<私的>という区分なく<改まった内容>を伝えることが多いため、その要因が表記の<カタカナ化>を加速させた可能性も考えられるものの、これらに関しては後述し、以下、<漫画>における傾向を概観する。

第5節 <漫画>に見られる<カタカナ>表記

<漫画>資料は先述の<教科書>、<雑誌>、<告知文>資料とは形態及び性質においても異なっている特殊なものである。<漫画>の定義を如何に捉えるかによってやや異なってくるものの、多様な<文体>が見られる<地の文>中心の先述の資料と違い、<漫画>資料は基本的に<発話文>が中心になる。なお、その発話によって物語が進み、特定の人物に特定の言葉遣いを与えることで、特定の<キャラクター>を意図的に表すこともできる。このような<地の文>と<発話文>の違いによって、<漫画>資料においては先述の資料のようなく<内容><文体><表記>の三要素の関係が成り立たなくなっただけと言えよう。

<漫画>資料の<発話文>は漫画に登場する人物と直接的に結びつき、その<話し手>の性質を表出する。例えば、日本語においては一人称が非常に多く、どのような一人称を持たせるかによって<話し手>の性質が異なってくる。金水敏(2003)は、このような性質をもつ言語要素を<役割語>であると定義しており、拙稿(2019a)では、その<役割語>要素が文法要素と同様、文の組み合わせを制限する要素として機能している可能性を提示している。

本稿では、<内容><文体><表記>の三要素の関係性を先に抑えた先述の資料と同様、<発話文>の<カタカナ>要素が特定のキャラクターを表す<役割語>として機能しているかを先に抑えておく必要があると主張する。<役割語>とは、上述したように金水(2003)が提唱した概念で、<ある特定の言葉づかい

(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階級、時代、容姿、風貌、性格等)を思い浮かべることができる、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ>(2003:205)と定義されている。これは、社会構成員が共有する<ステレオタイプ>の意識と結びつき、特定の<キャラクター>を素早く提示及び把握できるようにする方略として用いられている。後述するが、現代日本語においては<カタカナ>表記が<役割語>の要素として機能している可能性が見られたため、これが戦前においても同様に見られているかを抑えておくことは意義があると思われる。

1. 先行研究

戦前の<漫画>における研究は先述の<新聞>研究と同様、漫画自体の歴史や形態の変化などの観点からのものが多く、言語学観点からのものはほぼ見られない状態である。その中で、新聞連載漫画における発話文の表記に関して述べている徐園(2009)の研究は非常に役立つものである。

徐(2009)は、戦前の時期に新聞で連載されていた漫画190編を対象に、その<内容>や<形式>の変遷のみならず、<言語的特徴>の変化についても述べている。当時の新聞において、連載漫画は新聞を決定する重要な一要素になっており、各新聞社はなるべく子供から大人までが楽しめるように多くの漫画を連載していた。しかし、1923年の関東大震災後、東京に本社をおいていた多くの新聞社が災害に遭い、紙類の不足によって新聞の本来の目的である記事以外のものを減らさなければならなくなった。その後、漫画の数は激減し、一つの漫画を子供から大人までが無理なく読めるようにする必要性が生じた。徐(2009)は、当時の教育において<カタカナ>が先に学習されていたことを反映し、幼い子供でも

漫画が無理なく読めるようにするための配慮的措置として漫画の〈発話文〉の表記が〈カタカナ〉に変わり、その傾向が終戦まで続いたと述べている。

2. 本節の方向性

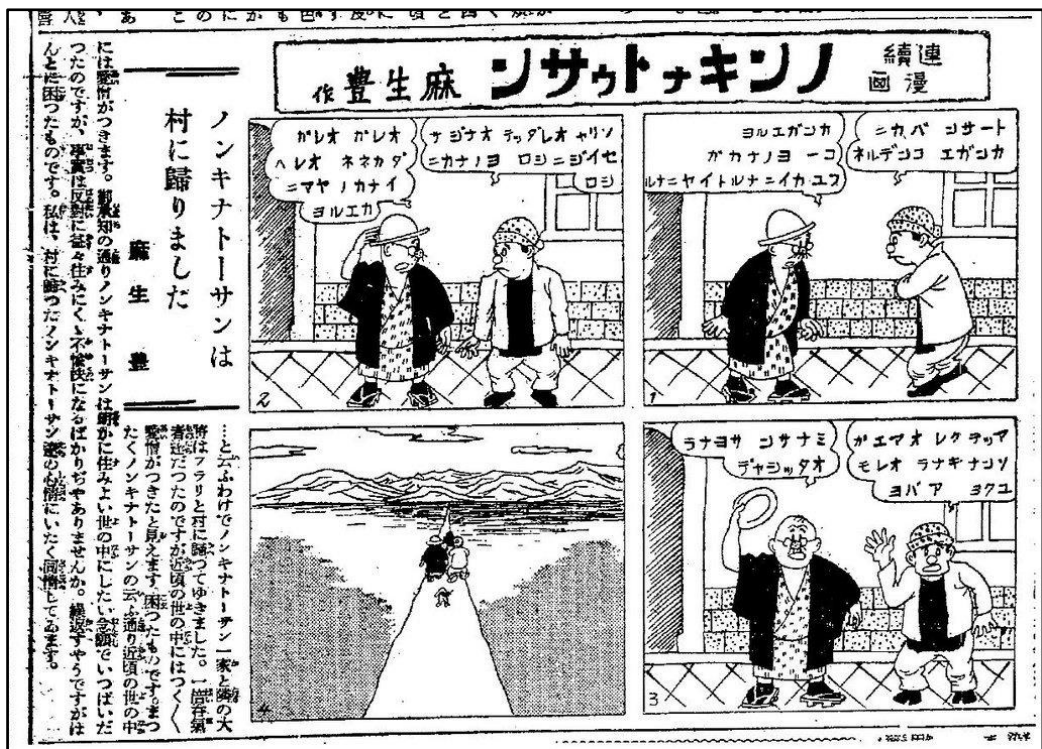
戦前の漫画は新聞や雑誌に連載されていた連載物や単行本、赤本などの非常に多様形態のものが存在していた。しかし、赤本はその出版事情のため資料が殆ど残っておらず、影響力においても全国規模であった〈新聞〉や〈雑誌〉の連載漫画より劣っていたと考えられる。よって、考察資料として〈赤本〉を除外し、連載漫画や単行本のみを取り扱った方がより適切であると判断した。なお、先述したように、〈漫画〉資料においては〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の関係は成り立ちにくく、〈役割語〉というあらたな観点からの研究が非常に有効であると考えられる。よって、本章の考察は、以下のプロセスで行われることとなる。

- ① 漫画の〈発話文〉が〈役割語〉として機能しているか否か
- ② 機能しているなら、如何なる〈キャラクター〉を表す要素として機能しているのか、機能していないなら、如何なる機能を持っているのか

先行研究の徐（2009）は、この機能が子供読者を配慮するための方略として用いられたものであると述べている。当時の教科書において〈カタカナ〉が先に学ばれていたことは高梨信博（1989）の研究でも明らかになっており、その可能性は非常に高いと思われる。なお、あくまでも配慮的措置であったため、強制性もない。

しかし、子供読者を配慮するための措置として文が〈カタカナ〉で表記されたなら、それが〈漫画〉の〈発話文〉のみに見られることはやや不自然であると思われる。実際、連載漫画に関する編集部や作家のコメントや感想文のみならず、子供向けの〈雑誌〉や〈新聞〉の一般記事などが〈カタカナ〉で書かれているも

のはほぼ見られない。大人が幼い子供に読み聞かせるため<カタカナ>で表記されている可能性も挙げられるものの、このように大人が読む側になってくると、<表記>を敢えて<カタカナ>にする必要性は更になくなる。よって、漫画の<発話文>の<カタカナ>表記には<配慮>要素意外の要素も影響を与えている可能性が高いと考えられる。



<図-6> 『ノンキナトウサン』の最終回の画像

<図-6>は、麻生豊が連載した『ノンキナトウサン』という漫画の最終回の画像である。作中の人物の発話は<カタカナ>で表記されているが、<ノンキナトウサンは村に帰りました>で始まる作家のコメントや感想文の部分は<漢ひ交>で書かれており、表記の違いが見られている。一方、戦後直後の作品になる

が、手塚治虫が連載した『マアチャンの日記帳』という漫画は、人物の発話のみならず作家のコメントまでもが<カタカナ>で書かれ、最初の連載の編集部の推薦コメントは<漢ひ交>で書かれている。徐（2009）の研究によるならば、後者の手塚治虫がより子供読者への配慮意識を持っていた作家になる。しかし、この<配慮>という要因は非常に抽象的で、この要素のみで<カタカナ>表記の機能を説くことはやや難しいと考えられる。よって、本稿では、<配慮>という要因を認めつつ、他の要因も影響を与えていた可能性が高いという前提で論を進める。

なお、考察に入る前に、<漫画>という用語を如何に捉えるかという定義も明確にしておく必要がある。日本における<漫画>という用語は、葛飾北斎によって1800年代始め頃に編纂された『北斎漫画』の中で初めて登場し、<物事をとりとめもなく気の向くまま漫ろに描いた画>と定義されている。この流れは1862年、横浜に滞在していた外国人向けに発刊された日本初の漫画雑誌である『ジャパン・パンチ』に繋がり、当時の社会像を風刺するものを意味する用語として機能する。しかし、当時の<漫画>は、状況を説明する文に<絵>を添えた形式のものが多く、現代のような感覚ではなく、<絵物語>に近い<絵>のスタイルの一つとして用いられていた。実際、この後、風刺絵としての<漫画>の画風は西洋の絵柄と融合し、<ポンチ絵>という名称に変わり、独自のスタイルとして自立する。その後、今泉一瓢³⁸が『一瓢雑話』において、自分の<漫画>は北斎の絵柄とは異なると言及したものの、<漫画>を<Cartoon>の訳語として用いている点においてこちらの意味も現代の<漫画>と質的に異なっていると言えよう³⁹。現代のような形式、言い換えると<Comic>の訳語として<漫画>と

³⁸ 今泉一瓢は筆名で、本名は今泉秀太郎である。

³⁹ 今泉一瓢の速記物である『一瓢雑話』の<漫畫の修業>において、<漫畫と云ふものは、一口にいへば、一種の滑稽畫であつて、其内に諷刺的の意味を含んだものもある、又全く含まないものもある。日本に昔からある漫畫は、鳥羽畫、又は北斎漫畫のやうな類の畫であつて、其外には、俗に

いう用語を用いた人物は明治後期にデビューした北澤楽天である。北澤はコマ割り
りと人物の発話で物語を進める形式を導入した人物で、それ以後<コマ割り
りと人物の発話によって物語を進める>ものが<漫画>であるという認識が定着し、現
代まで続いてきたと思われる。

本稿は、広く戦後の<漫画>資料までを対象にしているため、戦後の漫画形式
に近いものを基準にする方が適切であると判断した。よって、<分割したコマで
物語が進み、人物の発話と思われる文が添えられているもの>を<漫画>として
取り扱うこととする。この要素が揃えられていれば、コマの外に状況を説明する
<文>が添えられていても<漫画>で認めるが、<コマ割り>だけのものは<漫
画>として認めない。

<漫画>を考察するにあたって、<マンガ図書館 Z⁴⁰>という無料公開サイト
に掲載されている 1910 年代、1920 年代、1930 年代、1940 年代のものを中心
に、検索サイトで<明治連載漫画><大正連載漫画><昭和連載漫画>と検索を
かけた結果出された画像、『テヅカ・イズ・デッド ひらかれた漫画表現論
へ』、『手塚治虫＝ストーリーマンガの起源』という手塚治虫を取り扱った本に
掲載されている画像などの資料を用いることとする。なお、一つの単行本に年代
の異なる複数の漫画が収録されている場合は、これらを分解し個別の作品として
取り扱う。例えば、北澤楽天による『楽天全集 プルプロ漫画集』は一つの書籍
であるものの、中には<ブルプロ鳥瞰図><金の力><プロの生活戦線><水の
泡><サラリーマン><プロの商売><ブルプロ対照><エロナンセンス><う
そつきクラブ><懐中凧々篇><御前様気質>の 11 作品が収録されており、

オドケ畫と云ふ、至つて淫猥、野卑な畫が最も廣く行はれて居る>と述べており、当時、一般的に
用いられてきた<漫画>と自分の<漫画>が異なっていることを強調している。よって、今泉一瓢
の<漫画>の発言は、昔から続いてき北斎の<漫画>という用語を再定義する必要があったという
当時の認識を間接的に見せたものであると捉えられる。

⁴⁰ <https://www.mangaz.com> (最終アクセス：2021年6月15日)

各々が異なる形式や<文体>、<表記>で表現されている。一方、岡本一平による『一平全集』は一つの書籍にタイトルのない風刺漫画が<政治漫画篇><雑篇>という<内容>でのみ分けられており、この場合は分解せず一つの書籍をそのまま用いることとする。また、麻生豊という漫画作家の情報及び画像の一部は、『大分県立歴史博物館—宇佐風土記の丘— 麻生豊マンガ資料コレクション』のサイトを参照した。

3. <漫画>に見られる<カタカナ>表記状況

戦前の漫画資料は64件で、年代別には1930年以後のものが多数であると推測される。推測とは、各作品の連載年度及び発表年度が定かではなく、収録されている書籍の殆どが1930年以後出版されたためである。また、本稿で定義した<漫画>の形式に合っているものは34件、その中で文が<カタカナ>で表記されているものは22件で、<漫画>形式の半分以上を占めている。以下、<表-21>にて詳細を提示する。上述のように、年代は不明確な場合、書籍の出版年度や当時の社会状況、<マンガ図書館Z>の年度区分を参照し、任意の区分を行った。

<表-21> 戦前の<漫画>形式の作品における発話文の<表記>状況

年度	タイトル	作家	発話文の表記
1913年	愛らしき少女：ヨヘイ画集	渡辺与平	カタカナ
1923年	正チャンの冒険	樺島勝一 織田小星	カタカナ
1923年	ノンキナトーサン	麻生豊	カタカナ
1928年	とんだはね子	北澤楽天	漢ひ交・カタカナ
1920年代	水の泡	北澤楽天	漢ひ交・カタカナ
1920年代	大人の見た子供	北澤楽天	漢ひ交・カタカナ
1920年代	動物の世界	北澤楽天	漢ひ交・カタカナ
1920年代	小さい茶目さん	北澤楽天	漢ひ交・カタカナ
1920年代	一平全集(6、10、11巻)	岡本一平	漢ひ交・カタカナ
1920年代	ジャズ狂時代	麻生豊	カタカナ
1920年代	奥様	麻生豊	カタカナ

1931年	金言警句川柳漫画集	北澤楽天	カタカナ
1931年	蛸の八ちゃん	田河水泡	漢ひ交
1932年	ミスターシュウマイ	田河水泡	カタカナ
1934年	タンクタンクロー	阪本牙城	カタカナ
1935年	コグマノコロスケ	吉本三平 芳賀まさお	カタカナ
1936年	江戸っ子健ちゃん	横山隆一	漢ひ交
1936年	養子のフクちゃん	横山隆一	漢ひ交
1937年	末ッ子ゴロチャン	横山隆一	カタカナ
1937年	マキツタ!	長谷川町子	漢ひ交
1938年	半ちゃん捕物帳	島田啓三	漢ひ交
1938年	ホーラゴラン	長谷川町子	カタカナ
1930年代	スピード太郎	穴戸左行	カタカナ
1930年代	大力角兵衛	我孫子つねじ	カタカナ
1930年代	只野凡児	麻生豊	カタカナ
1930年代	ガソリンお吉	田河水泡	カタカナ
1930年代	テク助漂流記	中島菊夫	漢ひ交
1930年代	日の丸旗之助	中島菊夫	漢ひ交
1930年代	エロ、ナンセンス	北澤楽天	漢ひ交
1940年代	クロチャンシロチャン	芳賀まさを	カタカナ
1940年代	怪奇星団	桑田二郎	漢ひ交
1940年代	冒険児ブッチャー	横井福次郎	漢ひ交
1940年代	黄金バット	永松健夫	漢ひ交
1940年代	バット君	井上一雄	漢ひ交



<図-7> 『愛らしき少女：ヨヘイ画集』

一番早い時期の作品である『愛らしき少女：ヨヘイ画集』は、渡辺与平による画集で、漫画の形式が見られるのは1コマのみである。しかし、横に添えられている説明文ではくかぜふくなあなあふくなあ（中略）美代ちゃんはこんな歌を唄ってゐます>

書かれており、少女の発話が単なる発話ではなく<歌声>であることを明確にしている。

樺島勝一・織田小星による『正チャン』シリーズは、『アサヒクラブ』という雑誌と『朝日新聞』で連載され、非常に多くの人気を得た作品である。4コマの起承転結の構造となっているこの作品は、人物たちの発話のやりとりとコマ枠の外の説明文で物語を進める形式を取っている。なお、両方の表記が完全なくカタカナ表記になっているところが特徴的である。特に、先行研究で取り上げた徐園（2009）は、『正チャンの冒険』をはじめとして、本来＜漢ひ交＞で表記された作品の多くが＜カタカナ表記＞に変わったと述べている点からも、本作品の重要性が見て取れると思われる。

麻生豊という作家の作品の発話は全て＜カタカナ＞で表記されている。特に、上述の『ノンキナトウサン』は＜夕刊報知新聞＞で連載され、かなりの人気を得たもので、アニメや映画でも制作された麻生の代表作である。一方、徐（2009）と清水勲（1999）によると、『ノンキナトウサン』という作品は、『呑気な父さん』、『のんきな父さん』という前作があり、これらの作品にはコマ数の違い、『ノンキナトウサン』を除くと＜発話＞が＜漢ひ交＞で表記されるなどの形式的な違いも見られていることを指摘している。すなわち、『ノンキナトウサン』という作品は、かなり多様な形式を経て＜4コマ＞の＜カタカナ＞表記に定着しており、これはこの形式が当時の一般的なものであったためであると考えられる。なお、戦後の作品になるが、同作家が1951年から連載した『息子の時代』や『がっちゃん』という作品のものは＜漢ひ交＞になっており、当時の認識にかなり敏感に反応した作家であると推測される。



<図-8> 『とんだはね子』

一方、北澤楽天が1928年から連載した『とんだはね子』という作品では、同一の作品であるにも関わらず、エピソードごとに異なる<表記>が見られている。また、一つ

のエピソードでは全ての人物の発話と同じ<表記>が使用され、一貫性が見られている。

また、ほぼ全ての作品において、発話全体が<漢ひ交>表記であっても間投詞や感嘆詞などは<カタカナ>で表記されていることが多く見られている。このような間投詞や感嘆詞には明確な意味があるわけではなく、注意を喚起して注目させる働きを持っている。言い換えると、この要素がなくても非文にならないことから、<意味>のみならず異なる側面をも強調している可能性があるということである。下の(28)の<アノ>が<あの>であったなら、遠くにあるものを指す代名詞として受け入れられていたと思われる。更に、平仮名の<あの>が無くなったらやや不自然な文になっていたと思われるが、カタカナの<アノ>は文から削除しても全体の意味に何の影響も与えない。

(27) ウワア、大変だ (『楽天全集 凸茶目漫画集』<とんだはね子>、p. 83)

(28) アノ一才うかがいますが、あの貸家の持主はどちらでございませう (『楽天全集 ブルプロ漫画集』<エロナンセンス>、p. 115)

(29) マア嬉しい私の家あすこよ（『テク助漂流記』、52コマ）

(30) ヤイ魚を元の通りにして返すかさもなけりや猫は返さん（『日の丸旗之助』、p. 77）

なお、同じ作家がほぼ同時期に連載した作品であっても異なる〈表記〉が用いられることも見られている。長谷川町子の『マキツタ!』と『ホーラゴラン』は、同じ『東京日日日報』にて連載された漫画作品で時期的にも2年の違いがあるものの、発話の表記は異なっている。これは、新聞によって特定の表記基準が存在しなかったことを意味し、作家も〈表記〉を無意識的に用いていたことを表していると言えよう⁴¹。

4. 〈漫画〉に見られる〈カタカナ〉表記の機能

戦前の〈漫画〉には非常に多様な形式が混在しており、如何なる基準を設けるかによって研究資料がかなり異なってくる。本稿では、〈発話文〉が見られ、コマにより物語が進むものを〈漫画〉であると定義し、戦前の漫画資料の〈発話文〉の〈カタカナ〉表記機能を概観した。徐（2009）は関東大震災という社会的事件と『正チャンの冒険』という作品の大人気が混沌状態であった当時の漫画の形式の確立および発話文の〈カタカナ〉表記傾向をも呼び起こそした可能性を論じ、特に後者は〈子供のための配慮〉という要因から説明できると主張している。本稿ではその可能性を認めつつ更に観点を広げ、発話の〈カタカナ〉表記が特定のキャラクターを表す〈役割語〉として機能している可能性を提示した。

しかし、戦前の漫画における〈発話文〉の〈表記〉要素が〈役割語〉として機能している可能性は非常に低いと思われる。〈役割語〉とは特定の人物が特定の

⁴¹ 〈無意識的〉という言葉がやや曖昧であるが、この両作品は内容もほぼ同じで、全体的に子供向けのものとして描かれたものである。無論、作家が特定の作品をより子供向けのものとして設定していた可能性も考えられるが、これはこの意識が非常に恣意的・相対的な性質のものであったことを意味する。言い換えると、明確な基準がなくかなり意識的に使い分けていたことも可能なので、一つの〈意識〉として捉えても差し支えないと判断した

キャラクターを持っていること際立たせるために用いる要素である。作中の特定の人物がくわたくしがして差し上げますわ。あなたは静かにご覧になって>などの<女性語>を用いるとその人物は他の人物に比べて<女性>属性が強いことが考えられるが、もしほぼ全ての人物が<女性語>を用いてしまうと、それが標準になり、むしろその言葉遣いをしない人物のキャラクターが強調されることになる。また、特定の人物は特別な事情がない限り一つの作品において一貫した言葉遣いが見られることが期待されるものの、戦前の漫画においてはエピソードごとに<表記>が異なって一貫性が見られるものもあり、更にその<表記>が変わることで見られるべき<キャラクター>の変化も見られない。よって、戦前における<カタカナ>表記要素は<役割語>として機能していない可能性が非常に高いと考えられる。

本稿では、<発話>という行為は音声要素に基づくものであり、<発話>の<カタカナ>表記が<音声的>要素であることを強調する要素として機能している可能性を提示する。<音声>とは、有機物の呼吸器官によって発されるもので聴覚的な側面が非常に強く、視覚的要素である<文字>と対立する要素である。このような<聴覚的要素>が<視覚的要素>へと変換する際に<カタカナ>が選択される傾向が見られていることは、すでに多くの研究からも明らかになっている。

坂梨隆三(1988)は、<漢ひ交>で書かれる傾向が強かった江戸期の戯作作品の中で部分的に見られる<カタカナ>表記の役割についての考察を行なっている。坂梨(1988)は談義本、洒落本、黄表紙、草双紙、滑稽本、読本、人情本などの幅広い戯作の発話文にカタカナが見られていることに注目し、それらが<一トたび><見レば>といった接尾語、捨て仮名、送り仮名(活用語尾)と<取ツて><知らざア><手ン手に>といった促音、長音、撥音、なお、単語であっても口頭語的な性質の強い語を表す場合に用いられている傾向が見られていると述べている。また、時枝誠記の文法の二分類のうち、話し手の立場の直接的表現の

多い<辞>に属する品詞である感動詞、助詞、助動詞、接続詞、一部の副詞が<カタカナ>で表記される傾向が強いことをも取り上げながら、当時の言葉を生き生きと描写するのに<カタカナ>表記が効果的に用いられていたことは明確な事実であると主張している。なお、このことは前節の漫画の間投詞や感嘆詞が<カタカナ>で表記されている傾向とも関係があると思われる。

矢田勉（2014）は、文章内容のみならず教育水準や集団によって選択される<文>の表記が異なっていることを述べながら、特に文学的内容に用いられた<平仮名>と音声言語を文字に移す際に用いられる<カタカナ>表記傾向が如何なる変化を遂げたのかを概観している。矢田（2014）によると、<口頭語性>の高いものを<カタカナ>で表記する傾向は室町から江戸期まで引き継がれるが、次第に<即場面性>の高い内容のものの表記に限定されるようになると述べ、山崎闇斎などの講義録の<サテ今日ヨリ申コトハ><コンナ丸イモノヲ出シテ>などの即場面性表現が<カタカナ>で表記されている傾向が見られていると具体的な例を挙げている。一方、その要素も徐々に<平仮名>で表記されるようになり、明治期には<口語>が<漢ひ交>、<文語>が<漢カ交>という傾向の転換が行われたことを指摘している。その要因の一つとして、<文語的内容を口語文で表記しよう>とした言文一致運動によるジャンル区分の喪失を挙げている。

一方、本稿で取り上げる<口語体>と坂梨（1988）と矢田（2014）が述べている<口語>が質的にやや異なっていることには注意されたい。本稿の<文体>区分は文法によってなされており、<話し言葉>や<書き言葉>という要素とは関係を持っていない。よって、<音声>という要素が入ると、両者の区分がかなり曖昧になる。なお、本稿では<口語体>と<言文一致体>を同等のものとして扱っているものの、三浦つとむ（1967）は、<言文一致体>が当時の<口頭言語>を中心に形成されたものの、全く同じわけではなく、結果として<一つの文語体>の体系の中に属するようになったと述べている。言い換えると、本稿で取り上

げてきた<口語体>は文法の側面における分類であるため、<音声>要素と関係のあるものであると決めつけるのはやや不自然であるということである。

三浦（1967）が指摘した<<口語体>の<文語体>化>は、<口語体>が実際の<話し言葉>を反映せず、文法的に縛られたため起こった現象であると思われる。<教科書>の考察にて取り上げた森岡健二（1991）の研究によると、国定教科書の第一期である1900年代の<口語体>は第二期である1910年代の<口語体>とかなり異なっており、<聞き手>が想定され、間投詞などの要素も頻繁に用いているため文が長くなっていることが特徴であると述べている。

本稿では<文体>を文法的基準によって分類しているが、その中の<口語体>と<文語体>は質的に異なっており、なお、その<口語体>が<話し言葉>からかなりの影響を受けていることも事実であると思われる。この<話し言葉>が音声的なものであるならば、<口語体>も音声的なものを相対的に多く持っている要素として捉えられよう。この<口語体>と<音声>との関係をまとめ、以下のように提示する。

<音声>	口語	話し言葉： より実際的なもの	口語体：既存の<口語>の要素がより多い。よって、音声的なものとして捉えても差し支えないと考えられる。 (本稿の口語体)
		口語体： より体系的なもの	
<書籍>	文語	文語体： より体系的なもの	
		書き言葉： より改まったもの (本稿の文語体)	

<カタカナ>と<音声的要素>の組み合わせの認識は少なくとも室町時代から存在したもので、その<音声的要素>が<口語体>要素との共起を呼び起こしたと思われる。講義録とは、話す内容をそのまま書いたものでなるべく早く書き留めるため字体が相対的に単純な<カタカナ>が選択されていたが、徐々に話す内容をまとめて書く形式に変わり、表記も<漢ひ交>傾向に転じるようになる。本

来、カタカナは漢籍に講義の内容を付加するため用いられたものであり、講義録や速記物のカタカナ穂由紀もそのような特徴の上で考えることもできよう。しかし、〈話す内容をそのまま書くか否か〉によって表記が変わっていることが見られているならば、〈聞いた内容をそのまま書くか否か〉も〈表記〉の選択に影響している可能性も十分考えられよう。このような性質は、〈話し言葉〉＝〈音声的要素〉＝〈口語体〉が相応しいという認識に発展し、それを表すのに〈カタカナ〉が好んで用いられたとするならば、反対に〈カタカナ〉と〈音声〉要素との関係も認められるということになると考えられる。

明治初期の言文一致運動により〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の関係が解体され、〈音声的要素〉と〈カタカナ〉の組み合わせも解体されたものの、〈音声的要素はカタカナで表記する〉という認識は依然として残存し、習慣的に使用されていた可能性もある。漫画の〈発話文〉が〈カタカナ〉で表記されることもその意識の延長線上から捉えられると思われるが⁴²、全ての漫画に〈カタカナ〉が用いられるわけではなく、同作家であっても表記が異なっていた点を考えると、その〈表記〉が必須要素であったとは考えにくい。このようなものを先述の資料では〈副次的要素〉と捉えてきたが、漫画資料においてもほぼ同様の傾向が見られていることは明白であると言えよう。

このような観点からすると、先行研究の徐（2009）の〈子供の配慮〉という要因も〈副次的要素〉として捉えられると思われる。しかし、同じ作家の同じ作品の中における発話の表記の変化における説明が非常に困難になり、〈漢ひ交〉表

⁴² 漫画のコマ枠の外に漫画の説明を添える形も見られているが、これらは一種の〈活動弁士〉と関係があると考えられる。〈活動弁士〉とは、無声映画の上映中、その内容を説明する解説者であり、観客に対して単に説明する訳ではなく物語っているように振る舞う役者であった。『正チャンの冒険』シリーズのコマ枠の中の発話は人物の実際の発話になっており、外の文はコマの状況を説明する内容となっているが、〈ドングリノコロガツテキルモリノナカニ二人ガクルト〉〈ソノトキワキノ小サナアナカラカオヲダシタノハクマバチデ〉というように、読者に語りかけているような形式となっている。これも〈発話〉と捉えられ、本文の〈カタカナ表記〉と同様の傾向であると考えられるが、資料が非常に少ないため、今後、更なる資料を加えて考察を行いたい。

記は<配慮がない>とも言いかねないと思われる。なお、先述したように、<子供の配慮>が漫画の発話文でのみ行われていることは、<配慮>とは異なる要因が介入している可能性をも示唆しているものであると捉えられる。

以上をまとめると、漫画資料における<発話文>の<漢カ交>表記は、<役割語>や子供の配慮という側面より<音声的な要素であることを強調する副次的要素>として機能していた可能性が高いと捉えることができよう。

<漫画>の<カタカナ>表記の機能：

<音声的要素>であることを強調する副次的要素

第6節 戦前の<三要素>の関係性と<カタカナ>表記の機能

1. 戦前の<内容><文体><表記>要素の関係

明治以前の日本語の<文>では<内容><文体><表記>の三要素が関係を持っていることが多く、その関係性は<特定の<内容>のものは特定の<表記>や<文体>で書く方が望ましい>という認識に発展した。この認識は互いの要素に影響を与え、特定の<文体>で書かれると如何なる<内容>であるか、また特定の<表記>が用いられるだろう、という一種の<ステレオタイプ>を形成した。

しかし、江戸時代から続いた鎖国政策が明治に入り完全に解除されることで、より多くの人々が西洋文化に触れることとなり、新たな西洋文化や思想を日本語で表現する必要性が増してくる。それとほぼ同時期に行われた<言文一致運動>の影響もあり、既存の日本語の認識構造はかなり混乱する。その過程で、従来の<三要素>の関係にも影響が及び、徐々に解体されたと思われる。既存の研究は<三要素>のうち<二つの要素>の影響関係に関するものが多かったが、本稿で

は<三要素>の関係性を明確にする必要があると判断し、なお、<表記>機能を明らかにするためにもその作業が先行しなければならないと判断し、考察を行った。

その結果、戦前の<国語教科書>、<雑誌>、<告知文>資料における<三要素>の関係性の変化が明確に見られた。特に、<表記>要素の影響力の弱化が明確に見られ、特定の<内容>や<文体>との関係性が明確に認められぬようになり、重要度の非常に低い要素と化している。その傾向は<文体>にも見られているものの、<表記>よりは<内容>との関係性、すなわち膠着性が強く認められ、特に明治初期から続いた<知識>関連内容のものは終戦まで<文体>が保持されていることが見られている。本来、<漢力交>や<文語体>で書かれていたものも<表記>要素が先に変わり、その後<文体>が変わる形式となっている。

一方、<国定教科書>は、その資料の特性上、<多様な<表記>や<文体>を学生に馴染ませる>ことを目的としているように見られ、<内容><文体><表記>の関係性が認められていない。にもかかわらず、<戦争>や<愛国>などに関する<内容>の増加と<文語体>の増加が共に行われていることを見ると、<内容>と<文体>の関係性はある程度認められると考えられる。以上の内容をまとめ、以下のように提示する。

明治以前の三要素の関係：<内容>—<文体>—<表記>

終戦までの三要素の関係：（<内容>—<文体>）—<表記>

言い換えると、<表記>要素は他の要素との影響関係からほぼ解放され、<内容>や<文体>要素を補強、もしくは強化する<選択的要素>となったと考えられる。これは、<表記>要素に個別の機能があるのではなく、特定の<<性質>を強化する機能>が備えられている可能性が高いとも提示できる。例えば、<表記>要素には<公的>イメージを与える機能そのものではなく、<公的>なイメ

ージを更に際立たせる機能があるとも言えよう。よって、〈表記〉要素の機能の概観においても〈既存の要素を如何なる方向へと〈強化〉しているのか〉という方向で概観した方がより適切であると考えられる。

2. 戦前の〈カタカナ〉表記の機能

各資料における〈カタカナ〉表記機能が〈副次的要素〉として捉えられたことは、〈表記〉要素の影響力が非常に弱くなり〈相対的に弱く、既存の要素を強化するだけで関係性はあまり持たない〉要素となったためであると思われる。更に、三要素とは関係の薄い〈漫画〉資料でも〈〈発話文〉の〈表記〉が全体の内容や人物の性格の把握に影響をほぼ与えない〉という特徴が見られ、〈漫画〉資料においても〈表記〉は〈選択的〉、すなわち〈副次的要素〉となっていると捉えることもできる。以下、〈各資料〉において〈カタカナ〉表記要素が持っている予想された機能を (A) から (D) にまとめて提示する。

- (A) 〈教科書〉における〈カタカナ〉表記機能：〈教育〉という要素のため、明確に見られない
- (B) 〈雑誌〉における〈カタカナ〉表記機能：〈知識〉機能の副次的要素
- (C) 〈新聞の告知文〉における〈カタカナ〉表記機能：〈公的〉〈電報〉機能の副次的要素
- (D) 〈漫画の発話文〉における〈カタカナ〉表記機能：〈音声〉機能の副次的要素

〈国定教科書〉を除く全ての資料において〈表記〉要素が〈副次的要素〉として機能していることが見られている。なお、〈表記〉要素のみを見ると、この機能が〈カタカナ〉だけのものでありと考えられるがちだが、〈文体〉や〈内容〉という他の要素の関係性の中から見ると、これらが〈文体〉や〈内容〉によって

示し出された<カタカナ>の一側面にすぎないものであり、その共通部分⁴³が中核的なものでありと捉えることができよう。

一方、<表記>要素を<副次的>なものとして捉えると、<表記>要素が用いられなくても全体の構造はそのまま保持されなければならない⁴⁴。例えば、<カタカナ>表記だけに<<公的>イメージを与える>機能があるなら、<カタカナ>表記要素が取り除かれた際、その<文>では<公的である>というイメージが漂わなくならなければならない。しかし、<表記>要素がなくても各資料における特定の<イメージ>は保持されており、これは<表記>要素に<<公的>イメージ>そのものがある訳ではなく<<公的>な側面を強化する機能>が存在しているとも言い換えることができる。すなわち、<カタカナ>表記は、すでに与えられていた特定のイメージの中で<知識><公的><電報><音声>と関連する<性質>を強化している可能性が高く、その機能が<文体>や<内容>と絡み合い、その性質がより強く感じられるようにしていると考えられる⁴⁵。以上の

(B) から (D) のものを、簡潔にまとめたものが、以下の (B') から (D') である。

(B') <雑誌>における<カタカナ>表記機能：<知識>イメージを強化する機能

(C') <新聞の告知文>における<カタカナ>表記機能：<公的><電報>イメージを強化する機能

(D') <漫画の発話文>における<カタカナ>表記機能：<音声>イメージを強化する機能

⁴³ すなわち、教育∩知識∩公的∩音声∩電報のものが<カタカナ>の中核的な機能であると言えよう。

⁴⁴ これは、<表記>要素の存在意義がないと述べているわけではない。先にも述べたが、実際、世界の殆どの言語は表記体系を持っており、表記要素がないと<文>として成り立たないものが多い。本稿で述べていることは<有標としての<表記>>要素を意味し、<表記>要素そのものを指しているわけではないことには注意されたい。

⁴⁵ <表記>にそのような機能があるかのように強く感じられるのは、<表記>が視覚的な要素で<文>を見た際に一番早く目にするものであるためであると思われる。

ここでかなり目立つものが（C）の〈電報〉であると思われる。〈電報〉は技術や手段であり、それ自体が何らかの機能をしている訳ではないためである。そこで、〈電報〉要素を更に概観し、その機能を明らかにすることが先行されるべきであると思われる。

〈電報〉は、特定の文字を音の長短による視覚的な記号に変換してその内容を遠距離にある受け手に送信する〈モールス符号〉の方略を用いたものである。例えば、1869年のモールス符号表によると、〈一・〉は〈イ〉、〈・・・一・〉は〈チ〉を表しており⁴⁶、〈受け手〉はその音を聞いてそれに対応する文字を書き、全体の文の内容を把握する。〈電報〉は人手による手紙よりも早く伝達することができたため緊急を要する内容の送信によく用いられ、それは新聞に掲載された〈個人〉の〈告知文〉の方向性とも合致する。この〈モールス信号〉の〈カタカナ〉表記はこの技術が日本の導入された最初から行われたものでその原因を突き止めることは容易ではないが、〈モールス信号〉は本来〈音声〉であったため、〈〈音声的要素〉を〈文字化〉〉する過程で〈カタカナ〉表記が用いられた可能性があると思われる。

後述する内容を簡略に述べると、英語においても〈モールス信号〉の表記に大文字のみが見られ、英語の大文字が日本語の〈カタカナ〉に相当するものであると捉えることができよう。実際、英語の大文字には〈大きな音〉であることを表す機能があり、その方略も日本語の〈カタカナ〉と合致している⁴⁷。二つの言語の間の直接的な関係性は未だ明確になっていないものの、この対応関係をもとに〈カタカナ〉と〈音声〉を結びつけることもできよう。先述したように、江戸以前の人情本などで〈話す内容を生き生きと伝えるためにカタカナが用いられた〉ことを考えると、〈カタカナ〉と〈音声〉を結びつくことは、〈漫画〉のところ

⁴⁶ 魚留元章（1998）『モールス通信 通信の原点=CW その魅力/運用法/歴史』による。

⁴⁷ この研究に関しては後述し、ここではその主張のみを簡略に取り上げるのみにする。

で述べた内容に加えて非常に説得力のある内容であると思われる。すなわち、〈表記〉と〈カタカナ〉の膠着性は非常に頑固であったと言えよう。

上述の内容からすると、〈個人〉による〈告知文〉の〈表記〉は、〈特定の内容を素早く伝える〈電報〉〉の方略から影響を受けたもので、その根底には〈音声〉要素が絡まっていると言えよう。なお、これは〈漫画〉の〈発話文〉と〈音声〉要素との関係性の側面をも説明できると思われる。

〈音声〉要素と〈カタカナ〉表記の膠着性は、坂梨隆三（1988）が提示した〈漢ひ交〉で書かれた戯作における〈口語性〉の強い要素の〈カタカナ〉表記、矢田勉（2014）が提示した〈口語性〉の強い内容と〈カタカナ〉との膠着のみならず、北海道のアイヌ族の言語を表記する際に用いられた〈アイヌ語カタカナ〉からも見られている。深澤美香（2016a、2016b）は、北海道別海町郷土資料館附属施設である加賀家文書館に所蔵されている〈加賀家文書〉に見られるアイヌ語の表記状況について述べている。本来アイヌ語は文字体系が存在しない言語であったが、18世紀末頃から日本本州と北海道の貿易および公的業務に務めていた通訳館の蝦夷通辞による公文書、及びアイヌ語を表記する必要が生じ、それらを表記するための表記として〈漢カ交〉が選択されている。また、中川裕（2006）は、金田一京介（1923）や知里真志保（1942）のアイヌ語のカタカナで表記において〈ツ〉など、普段は見られないかなり特殊なものが見られていることを指摘している。すなわち、〈アイヌ語〉は〈日本語〉ではないため意味が全く理解できず、〈音声〉を聴いたまま書く必要があったものの、その際の表記に〈平仮名〉ではなく〈カタカナ〉が選択されたということである。これは上述の内容に加え、〈カタカナ〉と〈音声〉要素がかなり強い膠着関係を結んでいた証拠になると考えられよう。

〈知識〉要素と〈カタカナ〉表記の膠着性は、木坂基（1989）の研究をまとめた〈表-17〉ですでに述べているように、〈日常生活〉に関わるものには〈漢ひ交〉表記と〈口語体〉、〈知識〉に関するものには〈漢カ交〉表記と〈文語体〉

の組み合わせの傾向が見られていること、〈知識〉に関する〈内容〉のものは〈漢カ交〉表記が望ましいと述べた清水卯三郎（1874）の言及から容易に推測できよう。

〈公的〉要素と〈カタカナ〉表記の膠着性は、中学校の〈国語教科書〉に見られる〈公文書〉の〈カタカナ〉表記、〈新聞〉の〈告知文〉の〈表記〉から推測できよう。一方、〈告知文〉はその性格上〈改まった内容〉を伝えることが多く、その〈内容〉が〈公的〉なイメージと近い故に〈カタカナ〉表記が選択されている可能性もあり、上述の〈個人〉による〈告知文〉も〈音声〉ではなく〈公的〉要素の観点から説明することもできよう。しかし、その〈内容〉の方向性のみならず〈文体〉も質的に異なっていることを考えると、〈表記〉要素が強調する側面が異なっている可能性が非常に高いと考えられる。

以上のことをまとめ、戦前の〈カタカナ〉表記の機能は、以下のようにまとめられると思われる。

戦前の〈カタカナ〉表記の機能：

〈公的〉〈知識〉〈音声〉性質の強化・強調機能

〈カタカナ〉表記に〈公的〉〈知識〉〈音声〉要素が取り立てられるということは、この要素間に共通した性質、すなわち共通部分が存在していることとも捉えられるもののそれに関しては後述し、以後、戦後の傾向の概観に移ることとする。

第3章 戦後の〈カタカナ〉表記機能の概観

終戦と共に日本は社会・文化・言語体系において非常に大きい変化を迎えることとなる。戦前までは〈漢カ交〉で書かれた法律や公文書などが〈漢ひ交〉で書かれるようになり、特に、1946年の『日本国憲法』が〈漢ひ交〉表記で書かれたことはその象徴であるとも言えよう。教育分野でも平仮名が先に学ばれることとなり、〈漢カ交〉文は急速にその存在意義を失ってしまう。これらの事情により、戦後の〈カタカナ〉表記研究は戦前にも増して〈語彙〉の側面からのものが優勢となり、特に〈外国語〉の観点からのものが非常に盛んに行われることになる。また、〈文体〉も〈口語体〉中心となり、〈文語体〉は戦前よりも狭い分野でのみ用いられるようになる。言い換えると、戦前の〈内容〉〈文体〉〈表記〉の三要素の関係は、戦後の時期には完全に解体され、影響力を失ったと言えよう。また、文の〈漢カ交〉表記もほぼ見られなくなり、〈カタカナ〉は語彙にのみ見られるものとなる。しかし、〈漫画〉などでは依然として文の〈漢カ交〉表記が見られ、なお、その役割は戦前と違って特定のキャラクターを表す〈役割語〉として機能するようになったと考えられる。

本章では、戦前と同様、まず〈語彙〉分野における〈カタカナ〉表記の研究が如何に行われてきたかを先行研究中心にまとめ、その後、〈役割語〉の観点から〈カタカナ〉表記が如何なる機能をしているかを明確にする⁴⁸。特に、後者に関しては、拙稿（2017、2019b）の考察に更なる資料を加え更なる考察を行なったものであることは先に断っておく。

⁴⁸ 後述するが、〈カタカナ〉表記が一種の役割語として機能している可能性は、依田恵美（2011、2013）と李宰錫（2017、2019b）によって提示されている。三要素の関係性が認められないため、この役割語の観点からの概観が有効であると判断した。

第1節 <語彙>に見られる<カタカナ>表記

戦後の<語彙>のカタカナ表記の機能に関する研究はかなり多く行われているが、本稿では土屋信一（1977）、佐竹秀雄（1980、1989、1995）、成田徹男（1994、2004）、徐潤純（2006）、奥垣内健（2010）の研究をまとめる形で論を進める。

土屋（1977）は、1966年の新聞資料に見られるカタカナの使用傾向について述べている。戦後の新聞記事は国語審議会が定めた国語使用基準および各新聞社が定めた基準に依拠して作成されることがかなり多かったため、その中に見られる<表記>意識は日常的なものとは異なるが、認識としては一般性のあるものである可能性が高いことを述べながらその傾向を以下のように分類している。

- (A) カタカナで書く慣習があるもの
- (B) 漢字制限のため漢字で書けず、カタカナで書くもの
- (C) (B) が慣習化して、範囲が広がったもの
- (D) 平仮名と違って、あるニュアンスを持たせるもの

土屋（1977）は、(A) は動植物名、医学や衛生関連の用語、俗語、話し言葉的な性質のもの、(B) は漢字表記が存在するが政府の定めた常用漢字に含まれないため漢字で書けないもの、(C) は(B) の単語が繰り返しカタカナで表記されることで一般性という地位を得て、漢字で書いてもいいと暗黙的に認められていても相変わらずカタカナで表記されるものであるなどの具体例を挙げつつ、いずれは全ての分類が(A) に帰結される可能性が高いと述べている。特に、分類(D) は非常に特殊なもので、特定の<ニュアンス>を持たせるために本来漢字や平仮名で表記する語彙を意図的にカタカナで表記するものである。更に、(D) に属する単語は他のものと違い慣習化されない一回性のものが多く、臨時

的で不安定という特徴があると指摘している。なお、(D)のような方略は<朝日新聞>が創刊された1877年前後の新聞でも見られるものであり、戦後突如現れた意識ではないことに注意する必要があると述べている。

佐竹(1980、1989、1995)の一連の研究は、若者向け雑誌やインターネットなどの資料を用いて、その中に見られるカタカナの使用意識に関するものである。

佐竹(1980)は、当時の若者向け雑誌では<話すように書く>若者特有の新しい文体が見られていると指摘し、従来の<言文一致体>にちなんで<新言文一致体>と命名しながら<カタカナ>表記の役割が非常に大きいと述べている。これは外来語や外国語が頻繁に用いられるため引き起こされる当然の結論である可能性も高いものの、<カタカナ>表記の割合が外来語や外国語の割合よりも高いことを指摘しながら、本来、漢字や平仮名で表記する語彙が<カタカナ>で表記されている可能性を中心に考察を進めている。その結果、感情や評価を表す形容詞及び副詞を<カタカナ>で表記している傾向が見られ、それが若者の心理をより効果的に表すため、頻繁に用いられるようになったと述べている。

佐竹(1989)は、若者向け雑誌の本文のみならず読者の投稿欄、美術館に置かれている学生向けの感想ノート、女子高生の手紙の<文体>及び<表記>傾向を考察した中村久美子(1983)の研究をまとめ、<カタカナ>表記の機能を更に明確にしている。<漢ひ交>表記の文の中で<カタカナ>が用いられると視覚的に目立つこととなり、語彙の意味を強調するだけでなく表現される<感情>までも強調されるようになると主張している。特に、評価や感情などは非常に主観的なもので、それらを漢字や平仮名ではなく<カタカナ>で表記することで本来とは異なる意味やニュアンスを付与することができると述べている。なお、これは、中村(1983)の中でも<アンチ・スタンダード⁴⁹>という用語で説明されてい

⁴⁹ 女子高生の手紙文には英語や記号などが多用され、一般的な言語意識から逸脱している表記が見られている。これは既存の規範からの逸脱を望む心理が言語にも反映されている可能性があることを意味していると述べている。佐竹(1983)はその意識が英語や記号のみならず、日本語の<カタカナ>表記を通じても見られていることを指摘している。

る。一方、美術館の感想ノートでは語彙の〈カタカナ〉表記が相対的に少ないが、佐竹（1989）は、美術館のノートは見知らぬ人に読まれる可能性が高いため〈カタカナ〉表記が避けられている可能性が高いと主張しながら、語彙の〈カタカナ〉表記は異なる意味やニュアンスを与える機能のみならず、人との心理的距離をも表す機能が備えられている可能性を提示した。

佐竹（1995）は、インターネットで収集した文を分析して〈新言文一致体〉の概念を更に明確にしている。佐竹（1995）は、〈新言文一致体〉に〈カタカナ〉表記が非常に多く用いられている特徴があることを再確認しながら、〈カタカナ〉が主に〈評価や感情などの主観的意味を持つ語彙に用いられ特殊なニュアンスを持たせている〉こと、〈〈話し言葉〉であるかのように思わせている〉ことに機能し、この両者が〈新言文一致体〉の主な特徴であると主張している。

成田（1994、2004⁵⁰）は、〈現代かなづかい〉や〈外来語の表記〉などの表記規範があるにもかかわらず、実際の言語使用においては非常に多様な例外が見られており、〈カタカナ〉は特にその例外が多く認められていることを指摘している。なお、本来漢字や平仮名で表記する語彙に〈カタカナ〉が用いられることが多々見られるものの、規則性が見られず全く自由に行われていることが特徴的であると述べている。しかし、一般的に〈カタカナ〉表記では長音が〈ー〉で表記されるのに対し、本来平仮名や漢字で表記する語彙が〈カタカナ〉で表記される際には〈キュウリ〉や〈ヨヅラノムコウ〉のように長音符号が見られず仮名がそのまま用いられていることを取り上げ、和語の〈カタカナ〉表記には〈外来語の表記〉の規範ではなく〈現代かなづかい〉の規範が働いている可能性があるとして主張しながら、〈カタカナ〉表記が単なる例外としてではなく一つの規範として機能している可能性を述べている。成田はその可能性として〈音意識〉を提示しているものの、その詳細については論じていない。

⁵⁰ 2004年のものは、榊原浩之との共同論文である。

徐潤純（2006）は、性別や年齢によって語彙の表記意識が異なっていることが見られると指摘し、本来平仮名や漢字で書かれる語彙が如何なる場合に＜カタカナ＞で表記されているかを＜文の内容＞＜話し相手＞＜気分＞という分類から考察している。その結果、＜個人的な内容を記述する際＞、＜親しい人とコミュニケーションを取る際＞、＜気分が普通ではない時＞に語彙を＜カタカナ＞で表記する傾向が見られ、一般的な表記では表現しにくい＜特別な意味＞を表す機能が＜カタカナ＞に備えられている可能性があるとして主張している。

奥垣内健（2010）は、フォントやデザイン的配置によって同じ語彙のイメージや意味が多少異なってくるように、＜表記＞を変えることでも本来とは異なる意味を与えることができると述べた岡本能理子（2008）の研究をもとに、認知言語学の観点から＜カタカナ＞表記が語彙の意味に如何なる影響を与えているかを明確にしている。奥垣内はインターネットのブログの書き込みを資料に、＜カタカナ＞の鋭角な形が意味把握に影響を与えている可能性を述べ、既存の意味に＜外国＞＜冷静＞＜不法＞＜おしゃれ＞というニュアンスが更に加わって総合的な意味を表出していると主張している。

李宰錫（2017）は＜役割語＞の観点から、知らない単語をそのまま用いる際にその語彙が＜カタカナ＞で表記されること及び真面目ではないキャラクターの発話の語彙が＜カタカナ＞で表記されることが多く見られていることを指摘しながら、語彙の＜カタカナ＞がその人物の＜無知＞や＜真面目の無さ＞の側面を際立てていると主張している。＜無知＞の場合、話し手がその言葉の意味をよく理解しておらず、どこかで聞いたものを文脈に応じて感覚的に用いていることが描写されている。

(31) 知ってる？アイしあう二人がトーダイってところにはいるとね、「シアワセ」になれるんだって。（『ラブひな』（1999）1巻）

(32) …でもイリョウミスってなに？（『ベルソナ5』（2016））

- (33)ニコって人は、料理が上手なんだ……ゼッピンのキッシュ、食べてみたいな。（『ティルズ・オブ・ベルセリア』（2016））
- (34)冗談よ。ジョーダン。でもあなたいい人ね。名前は？（『ブギーポップは笑わない』（1998））
- (35)今回のテストは夏休みの宿題をまじめにやってるまじめっ子さん達にはカンタンよ。（『あずまんが大王』1巻（2000））
- (36)ま、こういうイケナイお楽しみも、今じゃオレらの特権ってやつ。（『PSYCHO-PASS』上巻（2013））

上記の（31）から（33）は<無知>の例で、文の全体的な内容を見てもその語彙の意味をよく知らずに聞いた内容を口にしてしているようになっている。（33）はやや曖昧であるが、話し手はかなり幼い少年で、隣で聞いていた女性はその言葉を聞いて「そんな言葉、どこで覚えたのかしら」と言い返す場面がある。なお、後に異なる人物によって同じ単語が出てくるが、その時には<絶品>と漢字が選択されていることから、ここでの<カタカナ>表記が意図的なものであると述べている。言い換えると、本来の意味を知らずに聞いたままの内容をそのまま用いていることが<漢字表記を知らない>と結合して<カタカナ>表記へと繋がりが、結果的に<無知>の側面を表出するようになったと言えよう。

（34）と（36）は<真面目の無さ>の側面を強調している。これは作家のスタイルによる可能性も非常に高いためやや問題の余地が残っているが、（34）と（36）の人物が本来の職務からやや離れて真面目ではない状態に入ったときには発話の単語が<カタカナ>で表記される傾向が強い。これらは、単語の<カタカナ>表記は<真剣な状況を打ち解かす>ため、話し手が真面目な側面を捨てて滑稽に反応していることも意味し、普段とは異なる側面を強調していると言えよう。なお、これは後述の依田恵美（2011、2013）の<カタコト日本語>の戦略における親近感の表出と関わっているところがあり、<役割語>の戦略とまったく関係がないとも言い切れないと主張している。

以上をまとめると、戦後の時期の〈カタカナ〉表記は、漢字制限、戦前からの認識や1991年の内閣告示の〈外来語の表記〉による外国語、及び外来語のみならず、特定の単語を強調するか異なるニュアンスを与える場合に意図的に用いられている。〈〈外来語〉を表記〉するという認識が外国語を相対的に多く用いる対象である〈若者〉というイメージへ拡張、またその認識が〈若者〉特有の〈反抗〉というイメージへ拡張され、〈普段とは異なる意味合いを持たせる〉という機能まで果たすようになったと思われる。しかし、全体的には依然として〈カタカナ〉の全体的な機能より個別的な機能を明らかにしている研究が多く、研究者によってその機能も異なっている。特に、奥垣内（2010）の研究は対象資料やその件数が非常に少なく、同じものであっても文脈によって全く異なるニュアンスで受け取れる例外も見られている点で、一般化の問題があると思われる。ここで、奥垣内の研究を除き共通する部分のみ取り上げると、戦後の語彙の〈カタカナ〉表記には〈外国（外来語、及び外国語表記を含む）〉、〈若者〉、〈異なるニュアンス〉を与える機能があると推測できよう。それに加え、〈役割語〉の側面でも似たような方略が見られており、発話人物に〈無知〉、〈真面目の無さ〉などのキャラクター性を与えていると推測できる。

第2節 〈サブ・カルチャー〉資料に見られる〈カタカナ〉表記

戦後の文の表記は〈漢ひ交〉中心になり、〈漢カ交〉表記は戦後直後を除くと一般生活においては全く見られなくなったと言えよう。しかし、漫画やゲーム、アニメーションなどの、いわば〈サブ・カルチャー〉分野においては〈漢カ交〉表記が依然として見られ、特定の役割が与えられているように思われる。よって、戦後の〈文〉の〈漢カ交〉表記を資料にしようとする、その資料は〈サ

ブ・カルチャー〉のもののみになり、それは〈役割語〉、すなわち〈現実のものとは性質のやや異なる仮想の言語体系〉の観点から研究を行わなければならないということになる。考察に入る前に、先行研究及びこれらの問題を先にまとめることとする。

1. 先行研究

〈仮想〉の言語体系である〈役割語〉と〈現実〉の言葉遣いの関係について言及した研究として、金水敏（2003）が挙げられる。

金水敏（2003）は〈役割語〉の概念を提唱しつつ、清水義範（2000）が「小説の中の会話は、小説用に再編成された虚構のことば」で、「現実の男性の博士全員が必ずしも〈わし〉という一人称と〈じゃ〉という語末表現を用いるわけではない」と述べた部分を引用しながら、その言葉遣いが現実の言語意識と必ずしも一致するわけではないことに注意する必要があると述べている。更に、一人称〈わたくし〉や終助詞〈わ〉は女性が用いる〈お嬢様言葉〉であると認識され、漫画やアニメ、ドラマなどで多く見られるものの、現代の女性が一般的に使う言葉遣いではないことが水本光美（2006）の意識調査からも明らかになっている。この言葉遣いは、大正期と昭和期に女学生コミュニティで主に用いられたもので、女性の社会進出の増加に伴って社会的な地位を獲得したものである。しかし、時代の変化とともにほぼ用いられなくなり、現代においては一部の年寄りの女性のみ用いる言葉遣いとなったにもかかわらず、〈仮想〉ではこの言葉遣いが依然として用いられ、〈女性〉であることを強調する〈役割語〉として機能している。このように〈役割語〉は仮想の言葉であるが現実から影響を受けて形成され、独自の変化を遂げたもので現実と全く無縁であると言い切ることは難しいと述べている。

文の〈表記〉が〈役割語〉の要素として機能している可能性について述べた研究として、依田恵（2011、2013）と李幸錫（2017、2019b）が挙げられる。

依田（2011、2013）は一連の研究で、マンガや小説、ゲームなどに用いられる〈会話文〉を資料に外国人人物の言語的特徴について述べている。依田はその特徴を〈文法的側面〉と〈非文法的側面〉に分けて説明しており、〈文法的側面〉の特徴として文法要素の脱落などの〈カタコト日本語〉を、〈非文法的側面〉の特徴として〈会話文〉の〈カタカナ〉表記を挙げている。一般的な日本語の文では特定の単語や外来語・外国語を除く要素を〈カタカナ〉で表記しないものの、外国人人物の〈会話文〉では助詞や文全体を〈カタカナ〉で表記するところが見られており、このような方略が日本語母語話者とは何か質的に異なっていることを効果的に呼び起こしていると述べている。しかし、全ての外国人人物にこのような特徴が見られるわけではなく、特に、深刻な場面や人物が本来の能力を発揮する際にはこのような特徴が見られなくなる点を指摘している。依田はこのような傾向から、〈外国人人物〉を表す要素はその人物が単に〈外国人〉であるこのみならず、〈愛嬌〉や〈親しみ〉などの特徴をも持っていることを表現したい時に用いられていると主張している。

李（2017、2019b）は一連の研究で、現代日本で〈サブ・カルチャー〉として認識されているマンガやゲーム、アニメなどの〈発話文〉に用いられる〈カタカナ〉表記が〈役割語〉として如何なる機能を果たしているのかについて考察を行っている。その結果、本来語彙に限っていたカタカナ表記が語彙・文法という単位を超えて全く自由に用いられる傾向が見られ、特にその人物が〈人間としての自我を失っている度合いが高い場合〉に文の中の〈カタカナ〉表記される字数が多くなっていることが明らかになった⁵¹。李はこれらを踏まえ、〈カタカナ〉表記には〈対象が規範から離れている様子を効果的に表す〉ものとして機能していることを提示している。

⁵¹ 字数はその言葉どおり〈文字の個数〉を表す。例えば、〈おはようございます〉はカタカナ字数が0件、〈オハヨウございます〉は4件ということである。この文字数を取り上げる理由は、この方略が文法やレベル単位に留まらず〈これはナンデスカ〉などのように〈文〉を一つの全体単位で行われているためである。

2. 本節の方向性、及び用語の設定

戦後の表記体系が〈漢ひ交〉中心に再編されることで、〈カタカナ〉表記の研究は語彙側面でのみ行われるようになり、文側面からの研究は〈役割語〉という制限された観点でのみ行われている。しかし、その研究は盛んに行われているとは言えない状態であり、特定の方向性や可能性を示しているのみである。なお、依田（2011、2013）の一連の研究は外国人人物にのみ焦点を当てたもので〈カタカナ〉表記としての〈役割語〉を全体的に取り扱っておらず、李（2017、2019b）の一連の研究は外国人に限らず多様な人物を概観したものの資料がかなり限られており、全体の傾向を示しているだけである。本稿は、〈役割語〉の観点から既存の研究に対象資料を更に加えて〈発話文〉の〈カタカナ〉表記が如何なる〈キャラクター〉を表しているのかを更に明確にし、その根底に潜んでいる〈中核機能〉を明らかにすることを目的とする。

なお、考察に入る前に、今後多く用いられる語彙を明確に定義しておく必要があると思われる。用語に関してはすでに3章で述べたものの、〈役割語〉の研究でのみ用いられる用語のみならず、本稿でやや異なる意味で使用する用語も多数あるため、考察に入る前にそれらを明確にする必要があると判断した。

① 〈人物〉と〈キャラクター〉の区分

本稿では両者を区分して使用している。これらの定義には金水敏（2003）と定延利之（2006）、李宰錫（2019a）の研究が参考になる。

定延（2006）は日常生活において人々の態度や言葉遣いが場所や相手、状況によって異なってくることを承知しているもののその姿を目の当たりにするとかなり気まずい空気になることが多いことを述べ、〈変わると知っているけど実際その姿を見ると不自然だと思えてくる〉性質を持つこのような特徴を〈キャラクタ

⁵²>と名付けている。更に、〈キャラクタ〉というものが〈人格〉と〈態度・スタイル〉の間に位置するもので、〈場面によって変えやすいけど、変わらないと期待されているもの〉であるとも述べている。一方、金水（2003）も同様のものを〈人物像〉と名付けているものの、金水（2003）の場合は〈役割語〉という言語側面がより強く反映されたものであり、定延（2006）の場合は〈役割語〉のみならず外見的な要因をも考慮したより広い範囲の概念であると言えよう。

李（2019a）は、定延（2006）の定義を引用しつつ〈キャラクター〉の分離を試みている。李（2019a）は外見や身体的特徴が女性であっても自分自身を男性であると認識し男性的な行動を意図的に振る舞うことで結果的に〈中性〉に近い雰囲気を出すことができると述べ、〈キャラクター〉とは〈外的な要因〉と〈内的な要因〉が組み合わさった総合的なものとして捉えるべきであると主張している。

上記の研究をまとめると、〈役割語〉は〈内的要素〉、〈キャラクタ〉は〈外的要素〉に重点が置かれているものの、全体的な〈キャラクター〉の把握には両者の要素が総合的考慮されるべきであると言える。本稿では、外見や行動などの〈外的要因〉を〈人物〉、〈外的要素〉と〈内的要素〉が組み合わせられ総合的に表出されるものを〈キャラクター〉として取り扱うこととする。〈内的要因〉を取り上げない理由は、少なくとも漫画やゲームにおいては内的要素が行動や言葉などの〈目に見える要素で〉表現されることが多く、実際目に見えないものはないためである。例えば、ある作品において、とある人物の性格や特性が何の前触れもなく突然現れることは望ましくなく、事前に言葉や行動などを通じての伏線めいた描写がされなければならない。言い換えると、現実においてはその様相が異なるが、少なくとも漫画やゲームなどの作品の中においては、その人物の真意

⁵² 本稿では〈Charanter〉を〈キャラクター〉と表記しているが、定延（2006）はこのように表記している。ここでは、定延の表記をそのまま書くことにする。なお、〈キャラ〉という用語も用いられているけれども、両者が同意味で用いられているためここでは〈キャラクタ〉に統一する。

を読み手や受け手が把握しておく必要があり、そのためには<内的要素>であっても<外的>に表現されなければならない。よって、本稿では<内的要素>のものを特に取り上げず、必要な場合にのみ取り上げることにする。

すなわち、本稿では<人物>を<ある物理的な個体そのもの>を表すもので、<キャラクター>は<人物>に<役割語>や行動様式などが組み合わさって総合的に表出されるもの>として取り扱う。例えば、<女性人物>は社会一般に女性的な外見をしている人を表すもので、<女性キャラクター>は女性的な外見に女性的な仕草、言葉遣いなどをする人を表しており、生物学的性別が<女性>であるから<女性キャラクター>であるとは限らない⁵³。よって、両者を異なる概念として取り扱うことは意義があると思われ、本稿では両者を個別のものとして取り扱う。

② <仮想>と<現実>の定義（日本に帰ってから書くべき）

<仮想>と<現実>は対になる概念であると思われるものの、現代においては<仮想現実（Virtual Reality）>のように両者の概念が同時に用いられることも見られ、これらを明確にする必要があると判断した。

益岡隆志（1991）は日本語の文法要素の一つであるテンスの観点から物語の文の特徴を説明している。更に、基準となる時期より前か後かによって文法が異なってくることは現実の発話と同様であるものの、物語においてはカメラを遠近調節するようにその場の事情によって意図的に切り替わることができることを述べている。例えば、カメラを引いて離れた位置から物語を概観することで<表現時>を、カメラを近づけることで<物語の中の事態の時>を基準にすることができ、両者における<た型>の扱いが異なってくることを提示している。

⁵³ <男性人物>が<女性的>な仕草や動作をすると<女性キャラクター>ではなく<オカマキャラクター>という別のもので認識されることが多い。これは<人物>と<キャラクター>がまったく同じものではないことを意味していると言える。

工藤真由美（1995）も〈小説〉などの作品の中と現実における言語様相が異なっていることを指摘し、これを発話行為の場へのアクチュアルな関係づけの観点から説明している。工藤（1995）に「よると、話し手の発話と〈今〉の現場が直接にアクチュアルな関係を結んでいる言語様式が〈はなしあい〉、関係を結んでいない特殊な言語様式が〈かたり〉であると述べ、特にテンスの〈た型〉の使用法において違いが見られていると主張している。

山崎實（2000）は記号論的観点から、全ての言語表現には言語行為の主体である語り手が存在し、その人物の〈今〉と〈ここ〉を全ての基準点としてコミュニケーションが行われることになると述べながら、〈物語〉の中でも主体である話し手が孫愛するものの、その基準点は現実の発話のものとは異なっていることに注意する必要があると述べている。

このように〈現実〉と〈仮想〉は話し手の〈基準〉点が異なっていることが多く、特に時間を表す文法において明確な違いが見られていると指摘した研究が盛んに行われている。更に、それが文法のみではないということは、先述の水本（2006）の意識調査と金水（2003）の役割語の説明においても指摘された点である。よって、〈現実〉と〈仮想〉において異なる意識が働いていることは間違いないと言えよう。

本稿では、両者を異なる概念として捉え、〈仮想〉を〈作者によって意図的に作られた空間〉、〈現実〉を〈実際の人間が状況や場合により流動的に姿を変える空間〉として定義する。〈空間〉と定義する理由は、その空間が現実においても臨時的に用いられることができるためである。例えば、友人と話をしている際に、いたずらで意図的に老人の言葉遣いを用いることがあり、聞き手もそれを受け入れると臨時的に〈仮想〉の空間が作られ、後にまた〈現実〉に戻るというプロセスが見られているためである。ここからも、両者の概念が異なっていることは明白であり、本稿においては臨時的にも両者を上記のように捉え、論を進めることとする。やや乱暴であるが、本稿に限っては〈仮想〉は作品の中に見られる

場、〈現実〉は作品の外の実態としての人間たちがやり取りをする場としても捉えられよう。

③ 〈サブ・カルチャー〉の定義

本稿では〈サブ・カルチャー〉という用語を繰り返し用いてきているものの、〈サブ・カルチャー〉という用語の定義は研究ごとに異なり、その用語の統一も行われていない状態である。新井克弥（2020）は、アメリカと日本のディズニーランド文化の対比を通じて、1980年までは両国の雰囲気や方向性が似ていたものの、日本の方がより〈サブ・カルチャー〉の色彩が濃くなったと言いながら、この〈サブ・カルチャー〉を〈オタク文化〉での一つとして捉えている。特定のテーマ、キャラクターを中心に個人単位でも楽しめる日本の傾向は家族および一般多数が多く訪問するアメリカの傾向とは多少異なり、これを〈メイン・カルチャー〉との対比の中で捉えようとしている。なお、横路啓子（2013）も、台湾における日本のサブカルチャーの受容過程を日本の〈オタク文化〉を中心に説明しながら、一時台湾は日本の支配下にあったものの台湾の歴史的事情により日本に対する感情が悪くなく、よって日本の文化をそのまま受け入れたものが日本の〈オタク文化〉を中心とする〈サブ・カルチャー〉の形成に影響を及ぼした可能性を述べている。一方、西洋においては同じ〈サブ・カルチャー〉であっても方向性や定義がやや異なっている。Dick Hebdige（1979）は、〈Subculture〉を依然として議論の余地のある概念として紹介し、この用語が黒人文化や彼らの音楽文化、親や先生・警察などの社会で影響力の強い集団に対抗するための手段としての文化を表す場合に用いられることが多いと指摘している。Gary Alan Fine and Sherryll Kleinman（1979）は、〈Subculture〉という用語が社会一般に無批判的に用いられるうちに正確な定義を失い、少数の人たちの集団である〈Subsociety〉で営為する文化をそのまま〈Subculture〉と用いるなど、その用語の定義が非常に多岐にわたっていると述べている。

このように、日本では<サブ・カルチャー>がアニメやゲーム、特撮などのジャンルを含む言わば<オタク文化>を表す用語として用いられることが多い。これに関しては、山中智省（2009）が「「おたく」という言葉は2000年以後、『電車男』の大ヒット（2004～2005年）やいわゆる『萌え』ブームなどを通じて急速に一般化し、現在では日本のサブカルチャーを代表するキーワードの一つとして認知されるまでになっている」と述べている箇所があり、<オタク文化>と<サブ・カルチャー>との関係性がすでに一般化しつつあることを指摘している。一方、西洋では少数の人たちが多数の文化に対抗するため意識的に営為する<メイン・カルチャー>の反対概念として用いられる傾向が強く見られている。しかし、両国において<サブ・カルチャー>の定義は依然として曖昧かつ恣意的であるものの、人々は意識的に両方を使い分けており、特に日本では<オタク文化>を指す概念として定着している可能性が高いと考えられる。

本稿の焦点があくまでも<言語>に当てられているため、<サブ・カルチャー>の定義及びその形成過程について述べることはやや方向性からずれているものであると思われる。よって、少々乱暴ではあるが本稿では<サブ・カルチャー>を<オタクを中心とする文化>として捉え、アニメーション・漫画・ゲーム・特撮などの分野のものを指す用語として取り扱い、今後特別なことがない限りこの定義については言及しないこととする。

④ <戦前>の研究との繋がり

戦後の文の表記は<漢ひ交>中心に再編され、文の<漢カ交>表記は<役割語>などのごく限られたところでのみ見られるようになったことはすでに述べている。この<役割語>は漫画やアニメなどの<サブ・カルチャー>で主に用いられるもので、現実の言語意識とはやや異なっている。故に、戦前の文の<漢カ交>表記の研究は文が<漢カ交>で表記されているところを除くと共通するところがなく、その連続性においては問題があるように思われる。

金水（2003）は、〈役割語〉は現実での認識の一部がかなり誇張された形で作られたものであると述べている。例えば、一人称〈拙者〉や語末の〈でござる〉は武士や侍、特に平安時代の貴族などの昔のキャラクターを表す際に用いられることが多いが、実際はかなり限られた時期の限られた階層のみで用いられ一般性のあるものではなかった可能性が非常に高い。また、先述したように、〈女性語〉も1920年代前後の一部の女子学生が自分たちの間で用いたものが徐々に広がり社会的な地位を獲得したものの戦後からはほぼ用いられなくなったものである。しかし、現代でもマンガやアニメなどでは依然として〈女性〉であることを強調する〈役割語〉の要素として用いられている。これらは、〈役割語〉が現実との関係を全く持っていない訳ではなく現実の影響を受け入れつつ自分なりの領域を構築したと捉えた方がより適切であることを証明するものである。

言い換えると、〈役割語〉は〈現実〉とは異なる〈仮想〉という分野の言語体系であるが、両者は互いに影響を与え合っている。よって〈役割語〉を通じて〈現実〉の言語意識の一部を垣間見することもできると考えられる。特に、文法・語彙的要素のみならず音声⁵⁴や表記要素も〈役割語〉の要素として機能している可能性が示されており、これらが戦前の意識に基づくものならば、戦前の文の〈漢カ交〉表記の研究と戦後の文の〈漢カ交〉表記の研究は、微弱ながら連続性が認められていると言えよう。

本稿では漫画、ゲーム、小説、主にライトノベルなどの〈サブ・カルチャー〉資料に見られる発話文を用いて〈漢カ交〉表記の機能を明らかにする。なお、〈役割語〉要素は必ず用いなければならない必須要素ではない副次的要素であるため、量的研究よりは質的研究の方がより適切であると判断した。よって、戦後の研究は戦前とはやや異なり、各例文の内容、および人物の特性に焦点を当てて、

⁵⁴ 秋月高太郎（2012）は「ウルトラマンの言語学」において、とある人物に〈神様キャラクター〉を与えるために文法的特徴のみならず平坦調のイントネーションや残響音などの〈音声的要素〉も積極的に用いられることが見られると述べ、音声要素も〈役割語〉の一要素として機能している可能性を提示している。

一つ一つの事例を綿密に概観する方向で論を進める。なお、アニメーションなどの映像資料も用いようとしたものの、字幕を果たして一般性のあるものとして捉えてもいいのかという信頼性の問題、特に言葉遣いではなく〈表記〉は字幕を作る側の人の主観が介入しやすいという問題が認められるため、今回の考察では除外した。一方、これらの傾向がかえって〈一般的な人々の無意識な側面が見られるため、より適切である可能性もある〉という捉え方もできるが、今回の調査は〈傾向〉や〈一般性〉の獲得が先行しなければならないため、アニメーション資料は主な考察資料からは除外し、傾向を参考する程度でのみ用いることとする⁵⁵。一方、〈役割語〉の方略は〈サブ・カルチャー〉の資料のみならず一般の小説にも用いられることが多く、特に村上春樹の作品を用いた金水敏（2018、2021）の一連のプロジェクトは非常に意義がある。よって、本稿でも〈サブ・カルチャー〉資料だけでなく一般小説も視野に入れて考察する。しかし、観点が〈サブ・カルチャー〉に置かれているため、小説の場合は参考資料とのみ取り扱うこととする。小説資料は国立国語研究所のコーパスである中納言のBCCJWを用いて収集する。コアと非コアを〈文学〉、出版年度は1971年から2008年までの全ての時期を選択し、〈ダカラ〉〈ソレデ〉などの接続詞、〈スル〉〈シタ〉〈マス〉〈マシタ〉などの助動詞などを検索にかけ、その資料を実際に目視したものを対象にした。接続詞や助動詞を検索にかけた理由は、これらの要素は日本語において特別な事情がない限り〈カタカナ〉で表記されることがないためである。

漫画資料は、戦前と同様〈マンガ図書館Z〉サイトに載せられているもの、更に〈アマゾンプライム読み放題〉で見られるものを資料として用いる。前者は戦前同様各年度を検索にかけ出てきた作品のうち、前方ページにある50作品の1

⁵⁵ 字幕においても〈表記〉の使い方が定まっているわけではないため字幕を制作する人及び会社の主観が介入しやすく、一般の意識と捉えることはやや難しいと思われる。しかし、これが一般の人々に受け入れられているということはその表記意識が人々の持っている意識と合致しているためである。更にこの方略から新たな意識が生まれることもあり得る。よって、字幕は一般性のあるものとして用いるより傾向を確認するものとしてのみ用いた方がより適切であると判断できる。

巻ずつを対象とし、後者はまだ漫画作品が多くないため、全作品の各1巻のものを対象とした⁵⁶。

なお、各資料の事例を取り上げる際に、漫画資料の場合は例文の末尾に〈漫〉を、小説やライトノベルは〈小〉と付け加える。ゲームの場合は、その媒体の特定を考慮し、ゲーム自体で字幕を提供する作品を中心とする。なお、こちらには〈ゲ〉と付け加え、他の資料と区別する。

3. 〈サブ・カルチャー〉資料に見られる〈カタカナ〉表記の傾向

以下、資料を用いて発話が〈カタカナ〉で表記される人物のキャラクターを紹介し、その表記の理由を推測する。大きく〈外国人〉〈人ではない存在〉〈機械の存在〉に分けることができ、表記方式は〈カタカナ表記〉と〈平仮名〉や〈カタカナ〉の両表記が無規則に現れる〈混在〉に分けることができる。なお、先述したように、役割語の研究は質的研究がより適切であると考えられるため、数値は提示しないことにする。考察に用いた資料は、別途資料を参照されたい。

まず、発話の〈漢カ交〉表記が、その人物が外国人キャラクターであることを表す〈役割語〉の要素として機能しているか否かを概観する。これは先行研究の依田（2011、2013）がすでに提示したものでもあるが、更なる資料を加えることでより多様なキャラクターの発見が期待できるため、もう一度概観することには意義があると思われる。

(37)へーイ、オジョウサン、オクリマシヨウ。（『不良少女伝・混血児リカ』（1969）1巻）
（漫）

(38)不安定レベルナンテ！ソ連崩壊時ニ比ベタラナンテコト無イデスヨ！（『銀の匙』（201

⁵⁶ しかし、発話が〈カタカナ〉で表記される割合は非常に少なく、〈外国人〉や〈エイリアン〉人物が登場する作品も非常に限られているため、先述したように量的調査よりは個々の人物を分析する質的調査が適切であると判断した。参考資料の提示においても、全ての資料を取り上げず、本稿で取り上げた作品を中心に提示する。

4) 10巻) (漫)

(39) ゴメンネエ。私ラ、オジサンガ好きダカラァ。(『ペルソナ5』) (ゲ)

(40) 私ニモ分カラナイ。一カ月ホド前ニ、彼女ハ行方ヲクラマシマシタ。(『モダン東京2
美しき屍』(1989)) (小)

(41) ミチコモ悪カッタ。ツルヒコサンマチガッテマスオッシャレバヨカッタ。(『プロレス
スーパースター列伝』(1989)) (漫)



<図-9> 『混血児リカ』<1>

(37) は女性主人公に乱暴な行為を使用とするアメリカ軍人の発話で、この後すぐ他の人に殺されてしまう脇役であるものの発話の一貫した<カタカナ>表記が見られている。

(38) はロシア人の発話で、北海道の冬の景色に感心している

場面である。日本に嫁いで来てまだ日本に馴染んでいない人物として描かれており、自国語であるロシア語で話すことも見られている。

(39) はハワイで出会った女性外国人人物の発話で、カタコトの日本語で話す波面である。

(40) はハリウッドの男性俳優の発

話、(41) は女性外国人人物の発話である。このように、男性や女性などの性別に関係なく、多くの<外国人>という人物の発話が<漢カ交>で書かれている。

この傾向は先行研究での依田の傾向と同様であるが、<愛嬌>や<親しみ>の傾向はあまり見られない。

また、<サブ・カルチャー>の資料ではなく一般向けの小説で発話がカタカナで表記される人物は<外国人>が非常に多いように思われる。これは、一般向けの小説である以上、エイリアンやロボットのような非現実的な人物の出現が制限されるためであると思われる。

(42)ハイ、ハントシデス。オトウサンガビョーキナノデ、チョットカエッテキマシタ。

(『月曜日のカーネーション』(1987)) (小)

(43)アリガトウ、ゴザイマシタ。(『海をわたった盲導犬ロディ』(2001)) (小)

(42)と(43)は韓国人人物の発話である。両方とも日本に来たばかりであると描写され、まだ日本に馴染んでいない人物として現れている。すなわち、西洋人でなくても外国人であれば発話を<カタカナ>で表記しても違和感がないという認識があると思われ、外国人の<カタカナ>表記が英語のアクセントと必ず関係を結んでいるわけではないことが見てとれる。

一方、これは一般向けの小説でのみ見られる特徴であるが、<表記>を用いて人物の時代を表現する方略も用いられている。特に<カタカナ>は戦前の明治時期の人物であることを表現する要素として用いられることが多い。(44)は夏目漱石の手紙の部分の引用が<カタカナ>で、(45)は主人公視点からの描写である日記の内容が全て<カタカナ>で表記されている。しかし、これは<発話文>ではなく、なお<役割語>の方略とはやや異なっていると思われるため一つの傾向としてのみ取り上げることとする。

(44)漱石先生は手紙を書いているよ。「世ノ中ト云フ者ハ気狂ノ共進会ト云フ様ナ物サ其中ノ大気狂ヲ称シテ英雄トカ豪傑トカ天才トカスベツタトカ転ンダトカ云フ迄ダラウ御前サンダノ我輩の如キハ小気狂ダカラ駄目サ」(『漱石犬張子』(2002)) (小)

(45)一月一日……………僕ハ今年カラ、今日マデ日記ニ記スコトヲ躊躇シテイタヨウナ事柄ヲモアエテ書き留メルヲニシタ。(『鍵』(1956)) (小)

発話の<漢カ交>表記が<外国人>のみならず、人物が<人ではないキャラクター>であることを表す<役割語>の要素として機能している可能性も見られている。

- (46) ハーロックノ艦ハ撃ツコトモデキナイ。ヨホドオマエガ大事ラシイ。（『宇宙海賊キャプテンハーロック』＜完全版＞（2016）1巻）（漫）
- (47) ワタシニモ！（『宇宙海賊キャプテンハーロック』＜完全版＞（2016）1巻）（漫）
- (48) サナギノ超能力ガ発散シテ、外部ノ敵ヲヒキヨセテシマッタノカ！（『スター・クラブト』（1998）（ゲ））
- (49) セメテ思イ出ニヒタリナガラ死ナセテクレ、戦士ノ情ケダ。（『宇宙海賊キャプテンハーロック』＜完全版＞（2016）3巻）（漫）
- (50) オレ トテモ ツカレタ。オマエ ミスリル玉 クレル。（『デモンゲイズExtra』（2021）（ゲ））

(46) と (47) 、 (49) は、『宇宙海賊キャプテンハーロック』に登場するエイリアン達の発話で、同一人物のものではない。この作品には多数のエイリアン種族が登場するが、殆どの人物、更に主人公側のエイリアンの発話までも＜漢カ交＞で表記されている。しかし、エイリアン達の中でも上位、いわゆる最重要人物の発話は＜漢ひ交＞で表記されていることが特徴的である。こちらに関しては、後述する。

(48) は、ゲームに登場するエイリアン種族の一つである＜ザーク＞の発話である。英語では普通の英語⁵⁷で表記されているものの、日本語に翻訳される過程で発話の表記に＜漢カ交＞が選択されるようになった。特に、この種族は昆虫のような見た目と普通の人間とはかなり異なっている点、他の種族の構成員を感染させることで自分たちの進化を遂げている点など、その外見や思想において違和感を与えている。一方、もう一つのエイリアン種族である＜プロトス＞の発話は人間種族と同様＜漢ひ交＞で書かれている。この種族は、全宇宙での最先端の技

⁵⁷ 普通の英語とは、アルファベットの＜大文字＞と＜小文字＞の組み合わせによる一般的な英語文章のことを指す。

術を持つと描写されており、礼儀正しく他の種族と接している側面において同じエイリアン種族である〈ザグ〉と異なっている。

(50) は、ゲームに登場するエルダー・ゴーレムというモンスターの発話である。このゲームでも多様な種族の人物が登場するが、このようなく漢カ交〉表記が見られるのはこの人物のみである。しかし、文全体において助詞が脱落している文法的な特徴からして、こちらには〈カタコト〉も与えられていると言えよう。すなわち、先行研究の依田が提示した〈カタコト日本語〉の性質、単に〈外国人〉のみではなく、更に広い範囲のキャラクターをも表す要素として機能していることを暗示しており、〈外国人〉と〈カタコト〉の性質は分離されている要素であると考えられる。

また、発話の〈漢カ交〉表記が、その人物が機械、もしくは機械キャラクターであることを表す〈役割語〉の要素として機能している可能性も見られている。特に、〈機械キャラクター〉は、前者の〈人ではないキャラクター〉と同じ分類であると思われるが、こっちは〈機械〉というはっきりした外見的特徴が見られているため、別途の分類として取り扱うことにする。

(51) 発熱飛行物体ノ数ハ十三八個！本艦ノ安全ニ極メテ危険ナ存在デアル。（『宇宙海賊キヤプテンハーロック』〈完全版〉（2016）3巻）（漫）

(52) カウントダウンヲカイシシマス。（『イナズマイレブンGOギャラクシー』（2013））（ゲ）

(53) エメル、タタカウ。（『ソニック・バトル』（2003））（ゲ）

(51) は、主人公のハーロックの乗っている宇宙艦船である〈アルカディア号〉の制御室からの機械音声である⁵⁸。(52) も宇宙船の機械音声あるが、こちら

⁵⁸ 作中に登場するアルカディア号にはハーロックのかつての友人の魂が意思の形で入っているという設定で、この船が自らの意志でハーロックを助けることもあることを暗示することも見られている。

はアナウンスをしているだけで、意志は見られない。(53)は<エメル>というロボットの発話で、これらの発話は全部<漢カ交>で書かれている。

上記のことをまとめると、発話が<漢カ交>で表記される人物には、人間とはやや異なる性質を持っており、日本人という作品の中心となる人物群とはことなる外部のものとしての性質を持っていることが共通して見られている。特に注目するところは、<カタカナ>と<漢カ交>が区別されているように見られているところである。<カタカナ>のみのものは(37) (50) (52) (53)⁵⁹で作品内的にも発話が<漢カ交>で見られる人物よりも相対的に<人間(一般人)らしくない度合>が高いように描写されている。<機械>人物が良い事例で、(51)には<人の意志>が介入している設定がある一方(52)と(53)は事前にプログラムされている内容を音声として再現しているだけである。(46)から(50)を見ても、(46)は<ハラヘッタ><コワイ>などの少々本能的な発話のみを繰り返しているだけで、他の人物のようなく意志を持ったコミュニケーション>がうまく成り立たない。本稿は<カタカナ>のプロトタイプを明確に捉えることを目的としているため厳密な使い分けは行わないが、<カタカナ>が多いほど<人間的ではない>性質が多くなっていることを重要であると思われる。

更に、戦後の作品においては、数は決して多くないものの発話表記変更を通じて人物の<状態>を効果的に表している方略も見られている。李(2017、2019b)は、このような性質を<(表記の)スイッチング>と称しており、以下のような傾向が見られると述べている。

(54)エメル、タタカウ。(『ソニック・バトル』(2003)(ゲ))

(55)オレは戦闘兵器じゃない、“心”を持った、自由な存在だってな。(『ソニック・バトル』(2003)(ゲ))

(56)あなたの いちぞくには ほんとうに おせわになって います。(『MOTHER』(1989))

⁵⁹ (43)も同様であるが、文が非常に短いため除外した。

(ゲ)

- (57)…ネスサン…ネスサンネスサンネスサンネスサンネスサンネスサン…イタイ…イタイ…
チガウ…チガウ…。 (『MOTHER2 ギーグの逆襲』 (1994) (ゲ))
- (58)その瞬間、からだの奥の方から、奇妙な恍惚感が沸き上がりました。コノヒトゴロシヲ
モットイタメツケテヤリタイ。 (『告白』 (2010) <小>)
- (59)許せない許せない、沙都子が許せない、あの子が許せない、あの子に安らぎなんてある
ものが、あの子に安らぎなんてあるものか…。アイツコソ、コノ昭和58年ノ崇リニ、一
番相応シイジャナイか。 (『ひぐらしのなく頃に解 目出し偏』 <下> (2011) <小>)

(54) と (55) は、先述した<エメル>というロボット人物の発話である。最初に出会ったときには力を全て失っており、会話ができない状態であったものの、ゲームが進行するにつれ力が徐々に戻り (55) のような<普通の>会話ができるようになる。(56) と (57) は、『MOTHER』というゲームシリーズに共通して登場する<ギーグ>という悪役の発話である。こちらについては正体が明確に明かされていないものの、少なくとも人間ではない生命体であると描写されている。(56) は『MOTHER』での発話で、この時には<人>に似た外見をしていたものの、続編である『MOTHER2』では形態自体が抽象的な形⁶⁰となり、発話の内容も非常に支離滅裂なものに変わる。これを見ると、<漢カ交>と<漢ひ交>表記には、<キャラクター>の状態を暗示する要素があるかのように思われる。

(58) は、口による直接な<発話>ではなく内なる心の声⁶⁰が文字として表出されたものである。しかし、このような内なる心の声⁶⁰が実態としての人物とまったくことなる第三者のものである可能性が極めて低いため、これは実態として<人物>と同じ人物の発話であると推測できる。これは、普段自分の感情をあまり表に出さず、このような非道徳的な考えをいつも抑えていた人物が感情の昂ぶりにより理性の抑制が効かなくなつて普段とは異なる<自分>が飛び出たかのような

⁶⁰ 明確な生命体としての姿ではなく、骸骨のような形が液体のように揺らめいている形となる。前作では少なくとも明確な個体として認められた人物が今作ではその明確な個体としての姿をもなくし、より<人間ではなくなつた>状態と化したと言えよう。

状況である。実際、この人物がこのような性格と行動を見せるのはこの一カ所のみで、かなり特殊な場面であるとも言える。

(59) も (58) と同様に〈心の声〉が文字で視覚化されたものである。独白を続けるうちに沙都子という人物に対する殺意が明らかになり、最後の部分では殺すのが一番であるという、非人道的な結論に至っている。この文でも、感情を抑えきれず昂ぶりが頂点に達している文の最後の部分のみが〈カタカナ〉で表記されている。このように、直接的な発話でなく〈心の声〉、すなわち独白であっても、その内容が〈非人道的な心理状態〉であることを表す時、その〈発話〉の部分が〈漢カ交〉で表記される傾向が見られている。

更に、平仮名とカタカナが一つの文の中で無規則に表れていることも見られている。李 (2017、2019b) は、この性質を〈(〈カタカナ〉と〈平仮名〉の両表記の) 混在〉と称しており、これは〈語彙〉や〈文法〉という文の構成成分と関係なく、文を一つの単位とし、その中の文字のいくつかをランダムにカタカナで表記するところが特徴的であると述べている。なお、これは上記の〈スイッチング〉と同時に見られることもあり、発話の表記が変わる〈スイッチング〉の中間過程を効果的に表す方略としても用いられている。

- (60) ……八房。なア、八房。お前ハ既に、この島をその手に掴んでいたノカイ？ダカラ君ハ、笑イナガラ死ンダノカ？…… (中略) ……ソレガ、ソレコソガ、『パネ足ジョップリン』ト言ウ都市伝説ニ課セラレタ宿命デアリー最高ノ、幸福ナノダカラ。(『がるぐる！』〈下〉(2006) (小))
- (61) 気をつけたほうがいい。家族以外の近しい人間が崇りに巻き込まれるケースは、決して少ナクナイ……。 (『ひぐらしのなく頃に 鬼曝し偏』〈2〉(2006) (漫))
- (62) き…ききききょうはつ…つつつついてるわ…なぜだか人が…経験値を背負って沢山ふふふ降ってクル。(『REALPG』〈1〉(2012) 〈漫〉)
- (63) 傷、舐めあうだけ…ノ！カス、どもがあ…！ (『ペルソナ5』(2016) (ゲ))

(60) は、この作品に登場する〈バネ足ショッピング〉という謎の人物の発話である。この人物は都市伝説に登場する得体の知れない存在として描かれているが、物語の後半で特定の人物ではなく誰でも成りきることができる概念集合体であったことが明らかになる。ここでの発話も、登場人物の一人がそのカラクリに気づき、自らその存在となろうとする時のものである。〈人間〉から都市伝説的なく並外れた存在〉へ変わる様子を、〈平仮名〉と〈カタカナ〉の交じり合いを通じて効果的に表している。

(61) は、錯乱状態に陥った女性人物の持っていたナイフに刺された男性主人公が、以前、警察が警告した内容を回想する場面である。本来の警察の発話は〈漢ひ交〉で表記されていたが、ナイフに刺されて気を失っていく過程で、その最後の部分が〈カタカナ〉で表記されるようになっていく。男性主人公はこの回想の後、気を失ったまま警察に発見されたと描写されている。

(62) は、オンラインゲームの中に入った男性主人公が初めて目にする女子高生の外見の人物での発話で、ボールペンを持って襲い掛かろうとするなど、正常ではない人物であることが暗示されている。(63) は人間からモンスターに成りかけている状態での発話で部分的な途切れが見られており、文の中に〈カタカナ〉が少しだけ混ざっていることが見られている。

上記の〈混在〉は、〈単語〉や〈文法〉という個別の単位を無視しまったく自由に表記されているところが特徴的である。例えば、〈りんごがある〉という文は、〈りんご〉という単語、〈が〉という助詞、〈ある〉という動詞からなっているが、〈りんご〉や〈ある〉など、一つの単位においても表記が混在されているということである。これが人物の発話に用いられると、その〈人物〉の精神および心理状態はかなり不安定であることを効果的に表す要素として機能すると思われる。言い換えると、〈漢ひ交〉における一般状態の〈キャラクター〉と〈漢カ交〉における一般的ではない〈キャラクター〉の中間的存在として、いずれに

も属しない不安定な状態を効果的に表している〈役割語〉の方略として用いられていると言えよう。

4. 〈サブ・カルチャー〉資料に見られる〈カタカナ〉表記の機能

戦後の〈漢カ交〉表記が特に際立つようになったのは一般的な表記が完全に〈漢ひ交〉になったためで、特別な理由がない限り文を〈カタカナ〉類で書くことはほぼ見られなくなったことと関連し、この意識が〈漢カ交〉表記を〈特殊〉なものにした可能性が高い。サブ・カルチャー資料に見られる発話文の〈漢カ交〉が共通して特殊なくキャラクター〉を表出できるのも、このような理由に起因していると思われる。

依田（2013）は、ある人物が真の能力を隠して意図的に滑稽なくキャラクター〉を演じる際に一部の語彙の〈カタカナ〉で表記及びモーラの挿入などの〈カタコト日本語〉の特徴が見られるようになる」と指摘した。これを〈役割語〉の観点からすると、〈カタカナ〉表記は〈一般的に期待される役割から離れている様子〉を表す機能を相対的に強く持っている」と推測することができよう。

依田（2011、2013）と李（2017、2019b）の傾向と今回考察の傾向を合わせると、〈役割語〉としての〈カタカナ〉には〈外国人〉〈ロボット〉〈人外〉という、作品において主人公が属している社会の外的な存在であることを強調する機能と、〈正常ではない精神及び心理状態〉という内部的な状態を表す機能とがあると言えよう。更に、李（2017）は、本来漢字や平仮名で表記する語彙を意図的にカタカナで表記することで本来とは異なる語彙意味を表出することができるように、文のなかにそのような語彙表記が多く見られているほど〈真面目ではない〉側面を強調している傾向が強くなると述べている。この〈真面目ではない〉というものは、〈学生らしくない状態〉や〈先生らしくない状態〉などのように、社会構成員が一般的に期待している常識および意識による理想的な状態からの相対的な逸脱している様子を表す。よって、非常に曖昧なものであると指摘しかね

ないが、依田（2011、2013）も〈本来の実力を発揮するか真剣な場面になるとカタカナ表記が回避される傾向がある〉と指摘している点からも〈カタカナ〉には〈ある基準から離れている、望ましくない状態を表す〉機能があると推測することができる。特に、この機能は〈混在〉と〈スイッチング〉という表記方式の方略でより際立って見られている。

〈平仮名〉と〈カタカナ〉の両表記が文の中でまったく無規則に見られる〈混在〉は、文の表記が変わる〈スイッチング〉の中間過程として捉えられる。上述したように、〈混在〉にはとある人物が変化していく様子やいずれの集団にも属しない非常に不安定な様子を効果的に表す機能がある。この機能は、『ソニック・ヒーローズ』というゲームに登場する〈メタル・ソニック〉という人物によく見られている。

彼は自我を持つロボットであったが、その能力の恐ろしさゆえに全ての能力が封印されたまま眠りについていた。しかし、あることをきっかけに目覚めた彼は、力を取り戻すためのアイテムを一つずつ手に入れ、やがてほぼ完璧な力を取り戻そうとするが、その前の段階で主人公たちに敗れて再び能力が封印されたまま眠りについてしまう。すなわち、ゲームにおいて〈メタル・ソニック〉のキャラクターは、〈完全ではない自分〉→〈ほぼ完全な自分〉→〈再び完全ではない自分〉に変わっており、それに伴って発話の表記も異なってきている。以下の（64）から（66）まではその過程の中での発話の表記の変化で、〈漢カ交〉→〈漢ひ交〉→〈混在〉という流れが見て取れる。

(64) 全テノ生物ガ我ガ前ニヒザマヅク時ガ来タ！

(65) 久しぶりだな、ソニック！オレの忌々しい分身よ！

(66) ナゼだ……ナゼキサマニ勝テナイ。（『ソニック・ヒーローズ』（2003）（ゲ））

ロボットや外国人ではなく、催眠状態により本来の自分の意志とは異なる役割を演じている際の発話の変化もこのような流れの中で見られている。(67)から(69)までは<アオリ>という人物の発話で、本来味方であったが敵の催眠にかけられて敵のいいなりになっていたものの、相棒のおかげで目を覚まし、物語の最後の部分では普段の調子に戻っているところが見られている。催眠から目を覚ましつつある状態の際の発話である(64)を見ても、状態の変化の中間過程として表記を用いた方略が有効であることが見て取れる。

(67) コナイデッテイッタノニ！ コーナッタラ…チカラヅクデモカエッテモラウヨ！

(68) ア…アタシのイばしょ、ココじゃない…！

(69) これまで通りがんばってこー！と、思っておりまーす！（『SPLATOON2』（2017）（ゲ））

なお、得体のしれない存在の発話が<カタカナ>で表記され、今後その正体が明らかになった時には発話が<漢ひ交>で表記されるところも見られている。

『迷宮ブラックカンパニー』という漫画作品に登場するリムという人物は本来洞窟の中に住んでいたドラゴン姿のモンスターであった。しかし、主人公の取引の興味を感じ、人間の姿に化けて仲間として行動するようになるが、主人公を脅すときや自分の身に危険が迫った時には本来のモンスターの姿に戻ることもある。



<図-10> 『迷宮ブラックカンパニー』1巻

上記の〈図-10〉は全て〈リム〉という同一人物の会話である。左が主人公との出会いの時の発話、真ん中が女性人間型に変わって主人公と行動を共にする時の発話、右が本来の姿に戻ったときの発話である。本来の姿に戻っているにも関わらず発話の表記が〈カタカナ〉表記に戻らなかった理由としては、主人公および本を読んでいる読み手において〈リム〉という人物がもはや単なる脇役およびモンスターではないことが明らかになったためであると思われる。また、アリの姿をしたモンスターも登場するが、このアリたちの発話は全て〈カタカナ〉で表記されている。これは作品の特徴及び作家によって異なってくるものであるとも言えるが、〈人間とは異なる存在〉の発話を〈カタカナ〉で表記することは主人公が属している集団の中の存在とは異なっていることを強調しようとする試みであると言えよう。

なお、サブ・カルチャーの下位分類の一つである VOCALOID という音楽系の曲の一つとして『ココロ』というものがある⁶¹。奇跡的に作られた人型ロボットが、かつて自分に〈心〉を求めた科学者の行動や感情が徐々に理解できるようになり、やがて真の〈心〉を得るという内容の曲である。この曲の歌詞は自問自答の形式からなっており、〈心〉を理解していくにつれ歌詞の表記が〈漢カ交〉から〈漢ひ交〉に変わっている。

(70) 知リタイ アノ人ガ 命ノ 終リマデ 私ニ 作ッテタ ココロ (中略) ナゼか ナミダが 止まらない…ナゼ 私 震える?これが私の望んだ「ココロ」? (『初音ミク Project DIVA F2』 (2014) (ゲ))

⁶¹ VOCALOIDは機械音声で歌を歌うプログラムで、その声ごとにキャラクターを付けることでサブ・カルチャーで大人気を得たものである。言い換えると、大企業からの一方的な作品を消費するだけでなく、消費者自らがコンテンツを生産するという生産消費者という構造が加わったのである。この生産消費者という概念はアルビン・トフラーが自分の著書である『第三の波』で提案したもので、生産する側と消費する側の境界が崩れて融合するという内容のものである。しかし、サブ・カルチャーの文化は生命力が非常に短く、その影響力も様々であるためすべての資料を同等のレベルで取り扱うのはやや危険である。よって、本稿においても参考のみとする。

この〈心〉というものは、サブ・カルチャーにおいて〈人間と同様〉という装置として用いられることが多い。『ソニック・バトル』というゲームにおいても同様のことが見られている。先述の(55)で取り上げた〈エメル〉というロボットは自分の全ての能力を開放し自我を持つようになり、自分が単なる戦闘兵器ではなく〈心〉を持った自由な存在になったと述べている。また、『宇宙戦艦キャプテンハーロック』の〈マゾーン〉という種族も同様のことも発言している。実際、本作品に登場するマゾーンの殆どの人物の発話は〈カタカナ〉で表記されるが、女王などの上位のものの発話は〈漢ひ交〉で表記されている。下の(71)では大多数のマゾーンが心を失っていると説明されており、この〈心〉が〈人間らしさ〉と関係づけられ、文の表記を〈カタカナ〉にしている可能性が高いと考えられる。

(71)でも、その時、少しは考えてみてくれ。マゾーンにも「心」があるということをな。

(中略) …大部分のマゾーンが心を失ってしまった事を…いつかきっとお前はわかってくれるだろう。(『宇宙戦艦キャプテンハーロック』(1977)(漫))

すなわち、〈心〉とは〈知的生命体として備えられている基本的なもので、他人に理解し共感するものである〉と捉えることができ、更に広げると〈一般的な人なら誰しもが持っているもの〉とも捉えられる。その点において、〈表記〉と〈心〉というものの間には繋がりがあると思われ、なおそれは〈カタカナ〉表記の機能にも少なからず関係を持っていると考えられる。

〈語彙〉領域での傾向と〈役割語〉として機能している〈文〉領域での傾向を総合すると、戦後の〈カタカナ〉表記の機能を以下のように捉えられると思われる。

戦後から文や一般語彙の表記が＜平仮名＞に変わったため、＜カタカナ＞の領域は非常に狭くなり脇役としてのみ機能するようになった。更に、＜既存とは異なる意味＞、＜無知＞、＜外国＞、＜人ではない＞、＜人としての要素が欠けている＞ことを表す要素として機能するようになり、＜一般的かつ標準的な意味の枠から外れたもの＞であるという意味を与えるようになった。これは、＜平仮名＞が＜一般的＞という無標を担当することになり、＜カタカナ＞には相対的な有標として何かしら異なる意味するという推測としての認識が自動的に与えられたためである。この認識は、役割語における＜混在＞と＜スイッチング＞の方略でよく表れている。語彙や文法という文の構成要素レベルではなく全体的な文レベルで両表記がまったく無規則に用いられる方略は戦後の＜役割語＞にのみ見られる特殊なもので⁶²、この方略は＜平仮名＞が＜一般的＞、＜カタカナ＞が＜一般的ではない＞という認識がないと成り立たないものであると考えられる。＜外国人＞の発話が＜カタカナ＞で表記されることも、戦前から始まった外国語や外来語、発音やアクセントといった＜音声＞を＜カタカナ＞で表記した意識から影響を受け、結果的にその人物の＜外国人＞的側面を強調する要素になったと考えられる。＜外国人＞は作品の主な話者である主人公が属している集団の外側の存在であることが多く、広い意味での＜部外者＞である。なお、＜モンスター＞や＜機械＞も主人公の集団とは程遠い存在で同じく＜部外者＞として捉えられる。更に、一般的な常識とは考え難い側面が強調される際にも発話に＜カタカナ＞が混じるようになる。これらからすると、文脈によって多少異なってくるものの、＜カタカナ＞はとある基準から相対的に離れた＜一般的な状態ではないこと＞を効果的に表出する要素として機能していると考えられる。なお、それは外見よりは＜内的状態＞、すなわち常識・心理・思考などが一般多数のものから乖離してい

⁶² 戦前においても＜助詞＞や＜文末詞＞などが＜カタカナ＞で表記されることが見られていると述べたが、これは＜役割語＞としての方略ではない。これらの要素が生き生きとした場面性を与えており、そのことからすると＜役割語＞よりは＜音声＞を表している要素として機能していると言えよう。

るキャラクターであることを表す＜役割語＞として機能していると言えよう。よって、以上の内容は、以下のようにまとめられると思われる。

戦後の＜カタカナ＞表記の機能：＜一般的ではない＞性質の強化・強調機能

第4章 日本語の〈カタカナ〉表記の機能

1. 〈カタカナ〉表記の機能

以上、〈カタカナ〉の機能、言い換えると〈カタカナ〉が読み手や受け手に如何なるイメージを与え、全体的な内容を如何なる方向で持っていくのかについて戦前と戦後に分けて概観した。一つの文字体系の中に同じ音価を持つ文字が共存していることは、その両者の機能がある程度分化していなければ成立しない。よって、意識していなくても日本語話者は日本語の表記体系、すなわち〈平仮名〉と〈カタカナ〉を無意識的に使い分けており、その使い方に合致しない使用法を目にすると不自然であると考えられるようになる。日本語のように二つの文字体系が共存している英語のアルファベットの場合にも同様の傾向が見られている可能性が高い。実際、日本語の〈カタカナ〉表記は英語の〈大文字〉と役割及び機能と似ているところがある。英語の場合、文の最初の文字や固有名詞、主語の〈I〉、略語などは大文字で書かなければならず、日本語の〈カタカナ〉より文法に近い形式を取っている点から、役割がやや異なっていると考えられるものの、特に〈強調〉と〈音声〉という側面においては〈カタカナ〉と同様の傾向が見られていることは事実であり、両方の方向性は合致している。

なお、英語の大文字は〈怒鳴り声〉と共起していることも非常に多く見られている。1856年4月17日刊行された『Yorkville enquirer』のマガジン掲載の小説に「This time he shouted in out in capital letters」（今度は大文字で叫んだ）という描写があり、更に、1871年5月6日刊行された『The Shamrock』のマガジンでも「“TWELVE shillings and SEVEN pence!” roared my aunt in the biggest capital letters」（「12シリングと7ペンス！」叔母が大文字で叫んだ）と描写されている。小説のみならず、1852年発行された『Singing for Schools and Congregations: A Grammer of Vocal Music』という専門書籍にお

いても「It is proposed that CAPITAL LETTERS, in printing, or double lines under the word in writing, should distinguish words to be sung louder」(大文字で書かれているか二重下線がされている歌詞は更に大きな声で歌えるよう提案する)という記述が見られ、<大文字>と<大きな音>、言い換えると<音声強調>との強い関係性が認められている。

1850年代から使われた軍用通信も<大文字>のみで構成され、日本の<電報>と関係性を持っている。<電報>は軍事のみならず役所や一般人も用いたもので軍用通信のみで用いられたアメリカのものと性格がやや異なっているが、電気信号を利用して情報をやり取りしていたところは共通している。アメリカの軍用通信は2015年から従来の<大文字>のみの体系に<小文字>をも使えるような体系に変わったが、その理由として、2013年6月13日刊行された『THE WALL STREET JOURNAL』の「NOW HEAR THIS: NAVY ABANDONS ALL CAPS」には「If an ancillary benefit is that sailors reading message traffic no longer feel they're being screamed at...that is a good thing, too」(本意ではありませんが、海軍所属の船員たちにメッセージが叫んでいるように感じてもらうものでしたらそれで良いかと思います)が挙げられている。



〈図-11〉 1905年7月16日『Los Angeles Herald』に掲載された
「Wags - the dog that adopted a man」

戦前の日本の漫画の発話が〈カタカナ〉で表記されるようになったことはすでに指摘しているが、アメリカなどのコミックスにおいても発話が〈大文字〉のみで表記されていることが見られている。アメリカにおいてもこの方略が如何なる理由によって用いられているかは未だ議論されているものの、こちらも日本と同様、〈音声〉側面がある程度影響していると考えられる。〈図-11〉が1900年代初め頃のコミックスで、手書きの台詞が〈大文字〉のみで書かれている⁶³。

英語の〈大文字〉は、可読性においては非常に効率が悪いことが指摘されている。Miles Tinker (1963, 1965) は一連の研究で、大文字の大きさや面積の広さ故に文字がくっついているように見え、かえって文字が読みにくくなってくると指摘している。Colin Wheildon (1995) は、可読性の悪い〈大文字〉が依然として用いられるのは〈大文字〉が文のなかで特定の部分を強調すると信じている人

⁶³ 一方、日本の漫画の場合、〈漢ひ交〉と〈カタカナ〉が共存していたところから〈カタカナ〉表記優勢に転じたもので、日本語の方の〈音声〉側面の性質は後に付けられたイメージである可能性が非常に高い点には注意する必要がある。すなわち、当時の日本語話者は〈音声〉を強調するために発話を〈カタカナ〉で表記したわけではなく、これはあくまでも現代の視点からの傾向ということである。本稿は、〈そのような意識が日本語話者の間で共有されていたから、発話を〈カタカナ〉で表記する方略が一般性を持つようになったのである〉という考えのもとで述べている点、予め断っておく。

が存在し、それが繰り返して用いられる過程で一種の慣習として位置づけられたことが原因であると述べている。なお、人間は文字の上段部分のみで文字を把握する傾向があるが、〈大文字〉の場合その面積の広さゆえに〈小文字〉と違って全ての文字の上段部分を目にすることとなり、よって自然に読むことができず一文字ずつ意識しながら読まなければならない不自然かつ非効率的なプロセスが働くとも主張している。

以上から、英語の文を全て〈大文字〉で表記すると〈小文字〉を交えて書く場合より非常に読みづらくなることが確認された。しかし、この方略は〈音声〉〈通信〉〈目立たせる〉という側面を強調するため慣習的に用いられ続けている可能性もある。更に、本来大文字が用いられないところに〈大文字〉が使われると〈望ましくない〉というイメージが与えられ、〈うるさい〉のように内容な意味の評価がややマイナスの方向に転じることも見られている。

日本語の〈カタカナ〉の場合、全体の内容およびその話者に〈知識〉〈音声〉〈電報〉〈一般的ではない〉というイメージを与える機能は認められるものの、マイナスイメージを与えることは見られていない。一方、先述の研究で取り上げた奥垣内健（2010）の研究においては、〈カタカナ〉がマイナスイメージを与えていると指摘をしている。奥垣内（2010）は本来平仮名や漢字で書かれる語彙をカタカナで書くと〈不法〉などの否定的イメージが与えられることもあると指摘している。例えば、〈クスリ〉は通常の〈薬〉ではなく〈麻薬〉などを連想させ〈センセイ〉は通常の〈先生〉より見下している悪いイメージを与えていると述べる一方、楽器の演奏速度が早くなること意味する〈ハシる〉については〈悪いイメージ〉を言及していない。しかし、資料とした語彙や例文が非常に少なく、〈センセイ〉が必ずしも見下している意味で用いられるわけではないという事例が存在していたため、日本語における一般化は慎重に行わなければならないと思われる。

戦後の<カタカナ>が作中の人物の<望ましくない>状態を際立たせている<役割語>の要素として働いていることは見られているものの、それは主人公側からの<望ましくない>状態を表すことが多く、絶対的なものとは言いにくいものである。更に、戦前の<カタカナ>が与える機能であると予想される<公的><知識><音声>要素には共通部分が存在している可能性があると先述したが、<公的>は<私的>、<専門知識⁶⁴>は<一般知識>、<音声>は<文字>という要素と対をなすものであると言える。また、<私的>や<一般知識>の内容のものは<平仮名>類が好まれていることもすでに指摘されている。なお、<公的>と<専門知識>は日常生活を営む上で選択的に触れられる要素である点において、重要度や影響力は日常生活で多く触れるものに比べて相対的に大きくないと考えられる。ここから、<公的><知識>および<一般的ではない状態>は<社会の標準と思われるものから離れている要素>であると捉えられ、そのようなイメージが<カタカナ>という表記要素を通じて表出されていると言えよう。本稿では、このような<カタカナ>の性質を日本社会の特徴の一つである<ウチとソト>に因んで<ソト化性質⁶⁵>を呼ぶことにする。

日本語における<ウチとソト>は敬語において非常な重要な要素で、その観点からの研究も多数行われている。平林周祐・浜由美子（1988）は、日本人は<ウチ>を<自分の属する非常に親しいグループ>、<ソト>を<自分の属していない親しくないグループ>で分けていると述べている。更に、三宅和子（1994）は人間関係を<ウチ>や<ソト>だけでは分けられず、<ソト>より更に外的な存在である<ヨソ>を設けるべきであると主張している。そこで、<ウチ>と<ソ

⁶⁴ ここでの<知識>は<一般的>なものではなく、特定分野を勉強することで習得できる<専門知識>を指す。よって、前までの<知識>で書いたが、ここでは両者を区分するために<専門知識>と書くことにする。

⁶⁵ 下記のように、<ウチ>や<ソト>の他に<ソト>を入れる分け方も存在するが、未だ議論の余地があり、<ウチ>と<ソト>が一般的区分基準となっているため、本稿でも両者の概念のみを取り上げる。

ト>の境界は状況によって流動的に変わると述べている。また<ヨソ>も、取引先や隣の家のように<ソト>よりも更に自分と縁のない赤の他人を指すことが多いが、この<ヨソ>に属する人に対する情報量が多くなるにつれて<ソト>に属することができるようになるとも指摘し、これらは非常に主観的・相対的に決まるものでもある可能性を示している。巖庭美（2012）は、<ウチとソト>には相対的性質があるため日本語の敬語が<相対敬語>になったと述べながら、<ウチ>を家族や自分が所属している会社や組織、グループの人のようなごく親しい存在の集まり、<ソト>を<ウチ>の人と関りを持っているがあまり親しくない存在の集まりであると定義している。

以上の研究からすると、<ウチとソト>は話し手の認識や周りの状況に応じて変化する相対的かつ流動的な概念、すなわち<認識的な概念>であると言えよう。なお、<ソト>は、話し手が無意識的のうちに自分や自分の属している集団と関係が薄いと認識したものが属している部分で、その要素は話し手の認識の変化によっていつでも<ウチ>になる可能性を秘めているものでもある。

この<話し手>は、文脈によって個人という人としてのはっきりした単位から<話し手>が属している集団>という抽象的な単位までをカバーできる概念である。言い換えると、<話し手>という<個人>の属している集団が<ウチ>であるということは、<大多数の<個人>が属している単位>を一般的な社会での<ウチ>として捉えても差し支えないということになる⁶⁶。以下、このような<ソト化性質>の観点から戦前と戦後の<カタカナ>表記の機能を概観する。

<公的分野>と<私的分野>は対立する概念であるが、<公的>は<私的>との対立関係の中でのみ意義を持つ概念である。これは、<公的>なものが<私的>

⁶⁶ <ウチとソト>に関する本稿の観点は、<属している個人が多い集団は<一般的>であると考えられる>ということである。<知識人>は、とある知識集団に属していると同時に一般社会の構成人とも言える。よって、<社会>は<知識>より範囲が広く、<ウチ>として認められるということになる。これは<全体主義>として捉えられるため注意する必要があるものの、本稿では各集団の優劣を比較しているわけではないため、問題は無いと思われる。

>なものに比べて有標的性質を持っているということ、すなわち<ソト>として捉えられるということであろう。そのため、<ウチ>である<私的>領域と区分するために<カタカナ>表記が好んで用いられたと考えられる。なお、この意識は<知識>という分野とも関係があると思われる。

これは、<公的>地位と<知識>の関係性の構築にも繋がると思われる。人事院の白書データベース⁶⁷によると、明治維新以後、役所の役員の任用に知識の有無を問わない<自由任用>制度が新設されたが、公平ではないという批判の声が非常に高く、公平な試験による任用制度のみとなったと述べている。更に、その試験は難しくなる一方で、結果的に<役人とは知識に関わる公的な仕事をする人>という関係性が更に頑固になったと言えよう。先述した清水卯三郎（1874）は、当時の知識人の間では知識関連のものごとを<漢カ交>類で書くということが暗黙のうち共有されていたと指摘したが、<知識>を持っている人が<公的>位置に就くことが多かったことを考えると、両者の関係性は必然的なものであったと言えよう⁶⁸。更に<一般知識>を持っている人が<専門知識>を持つことはあり得ても、<専門知識>を持っている人が<一般知識>を持っていないという逆の命題は一般的に通用しがたいことから、<一般知識>という相対的に<私的>に近い要素との違いが見て取れる。すなわち、<カタカナ>表記はその内容や属性などの要素が<一般的なものではない>と認識させ、<<カタカナ>表記を用いたということは何かしらの意図があるためであろう>というイメージを

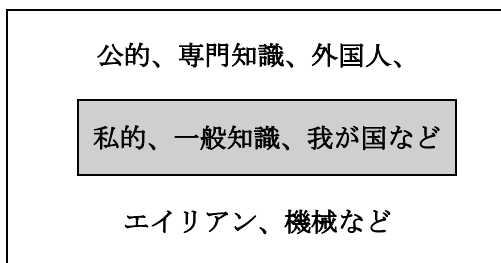
⁶⁷ <https://www.jinji.go.jp/hakusho/h20/front.html>（最終アクセス：2021年8月30日）

⁶⁸ このイメージの構築に<知識>が先か<公的>が先かという問題は未だ明確になっていないものの、両者の要素は本稿の設定した時期より以前から関係があったという認識はあったと言えよう。

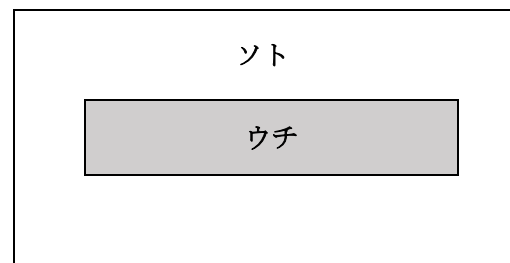
⁶⁹ 戦前の更に前の明治以前にはこのような対立傾向が明確ではなかったものの、少なくとも傾向的には使い分けが存在していた。もちろんそれは<意識>というより実用的な判断によるものであったが、にもかかわらずそれが認識及び慣習として残り、現代のようなイメージを確立した可能性は否定できないと思われる。

与えてしまうことになり、本稿ではその性質を<ソト化>と定義しているのである。

戦後の表記が<漢字交>となることで<ソト化>意識も更に強くなった。戦後の語彙研究によって明らかになった<なんらかの異なるニュアンスを与える>や<若者の異なるイメージを与える>という性質も、このような<一般的なものとは異なる要因を与える>という<ソト化>性質と関係がある。更に、<役割語>はこのような性質をかなりよく活用する分野であると思われる。発話が<カタカナ>で表記された人物は<外国人>、<ロボット>、<エイリアン>などの、作品の話し手が属している<ウチ>のグループとは異なる領域に属している存在である。また、社会一般に許されない、もしくは違和感のある精神状態であることを表す場合にも発話の<カタカナ>が効果的に用いられている。よって、発話を<カタカナ>で表記することで、その話し手の特定の要因が<話し手がの属している集団の観点からすると一般的ではない>状態であることを強調することができ、これも<カタカナ>表記の<ソト化>性質の影響であると考えられる。



<表-22>
各要素の関係性



<表-23>
三宅（1994）による関係図

上記の内容をまとめると、<表-22>のようになる。網掛けの部分が<ウチ>のものに当たり、白い部分が<ソト>に当たる。<ソト>のものは<ウチ>の要素がないと成り立ちにくいもので、<ウチ>のものをも含むより広い概念であ

る。言い換えると、＜ウチ＞に属していた要素が何らかのきっかけや異なる視点によって＜ソト＞になることも、＜ソト＞の要素が瞬時に＜ウチ＞のものとなることも可能である⁷⁰。なお、この関係は＜表-23＞の三宅（1994）の関係図とも合致するもので、両方の関係性が見て取れる。

このように、明治期以後の＜カタカナ＞表記はその以前の時期にも増して＜対象が持っている特定の要素の属性が一般的という意識から離れている＞ことを強調するようになった。この特定要素は状況・文脈によって選択されるもので、他の要素との関係の中で決められている傾向が見られている。日本語話者はその知識を無意識のうちに持っており、状況に応じてその要素が如何なるものとして機能するであろうと予測し、なお使い分けていると思われる。本稿では、この性質を＜ソト化＞と称し、明治期以後の＜カタカナ＞表記の機能を以下のように提示する。

明治期以後の＜カタカナ＞表記の機能：

＜対象＞の特定要素の＜ソト化＞機能

一方、このような有標としての＜表記＞要素は必ず用いなければならないものではない選択的要素であるため、その影響力は決して強くないことに注意しなければならない。すなわち、＜ソト化＞機能は英語の＜大文字＞のように文法化していないため全ての文の必ず見られなければならないものではなく⁷¹、あくまで

⁷⁰ ＜話し手＞が＜エイリアン＞と生活を共にするうちに、その人物が自分の領域にいても不自然でないと認識するとその人物が＜ウチ＞の存在となり、発話の表記が変わることもすでに指摘している。なお、＜話し手＞自身が本来＜ソト＞のものとして認識していたものに同化されると、その＜ソト＞が＜ウチ＞になり、同様に発話の表記が変わることもあり得ると思われる。

⁷¹ 先述したように、全ての＜文＞は表記をもとに成立しているため、ここで取り上げる＜表記＞とは＜特定のイメージを呼び起こす有標としての＜表記＞要素＞を表しているということになる。

も文や単語を目にした<読み手>や<受け手>の解釈の方向性を決めてくれる補助概念の要素であると主張できる。

2. まとめ、及び今後の課題

本稿は、日本に新たな西洋文化が入り社会構造及び言語意識に変化をもたらした明治期以後からの資料を用いて日本語の表記体系の一つである<カタカナ>の機能を考察したものである。

明治期から終戦以前は社会や文化のみならず言語体系や意識にも急激な変化が起こった時期で、特に1900年代前後の時期にはそのゆれの傾向が甚だしい。この時期は江戸期までの認識がそのまま用いられたこともあり、<漢カ交>表記も特定分野で頻繁に見られている。しかし、社会一般においてはすでに<漢ひ交>表記が主流となり、その過程を経て<漢カ交>、すなわち<カタカナ>は知識や公的分野など、保守性の強い特定の分野でのみ用いられるというマイノリティー性を獲得することとなる。この傾向は終戦以後の文の表記が<漢ひ交>となったことで更に加速し、特に語彙領域において<外来語>などの外国の物事を表記した明治期以前からの意識が絡み合い、そのマイノリティー性が一つの頑固な機能となったと考えられる。

本稿ではこのようなマイノリティー性に<知識><公的><音声><外国><非人間>などの性質を加え、これらと共に起する<カタカナ>の機能を<ソト化>という用語で説明している。<ソト>とは、社会構成員が意識的に持っている相対的な領域のことで、自分の属している領域を示す<ウチ>に相反する概念である。この<ソト化>とは、話し手が属していると考えている領域の外側の存在として認識していることを表す方略として用いられ、その対象に<(自分、及び自分の属している集団が) 一般的であると思っている機能から逸脱した異質的な側面>があると認識させるところに機能していると述べている。特に、この傾向は終戦以後から更に鮮明に見られており、厳密に言うと、現代日本語の<カタカナ

>表記の機能として捉えた方がより適切であろう。しかし、戦前においてもこのような傾向が少なからず見られていることもあり、まったく無関係であるとも言い切れないと思われる。すなわち、この認識は戦後から鮮明になったものの、その認識は少なくとも戦前以前の時期から存在していたと言えよう。

この傾向は、人々の持っている意識を利用する<役割語>の分野で更に明確に見られている。台詞を一つの全体単位として捉えてその中の一部の文字を<カタカナ>で表記する方略は、その人物の状態が<普通>から<異常>に向かっていることを効果的に表しており、これは<カタカナ>表記に、<異様>という<ソト化>の機能があることを前提にしないと成り立たないものでもある。

一方、本稿で<カタカナ>の機能の一つとして取り上げた<音声>要素と<カタカナ>の関係性については未だ不明な点が多いと思われる。聴覚的要素である<音声>を視覚的要素である<文字>に変換する過程で<音声性>という性質に更に集中させるため意図的に<カタカナ>が用いられる可能性を示したものの、<音声>と<カタカナ>の組み合わせが如何にして始まったものか、また、それを引き起こす要因は如何なるものなのかを明確に提示できないままである。更に、<ソト化>という性質が、如何なる要素を優先して<ソト化>するかという仕組みやプロセスについても未だ明確になっていない。これは文脈などの要因も関係してくると思うが、優先的に<ソト化>が行われる要素が存在している可能性も高いと思われる。なお、この<ウチ>と<ソト>の対立はあくまでも<漢ひ交>表記が標準である現代日本語においてのみ成立するもの>であり、戦前や更に前から<ソト化>意識があったとは言い切れない。本稿の論は、過去からの傾向や意識を現代日本語の観点からまとめ上げたもので、当時にもそのような意識があったと述べているものではない点には注意されたい。

本稿ではカタカナ表記に<ソト化>の機能があると提示したものの、その仕組みやプロセスについては可能性のみ提示している状態である。本稿ではこれらの

全ての問題に触れることができなかつたため、これらの更なる考察については今後の課題とする。

【参考文献】

- 秋月高太郎（2014）「脇役男子の言語学—スネ夫やジャイアンはどのように話すのか—」『尚絅学院大学紀要』67、尚絅学院大学、pp. 41-54
- 東浩紀（2001）『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会—』、講談社
- _____（2007）『ゲーム的リアリズムの誕生—動物化するポストモダン2—』、講談社
- 新井克弥（2020）「メインカルチャーとしての米ディズニーランド ～南カリフォルニアへのインタビューを通して」『関東学院大学人文学会紀要』第142号、pp. 39-62
- 池上禎造（1955）「明治以来の正書法」『言語生活』46（7）、筑摩書房、pp. 18-23
- 石井久美子（2013）「大正期の『婦人公論』における外来語表記の変遷」『人間文化創成科学論叢』15、pp. 1-9
- _____（2014）「大正期雑誌の書き手・読み手の位相差と外来語の使用実態」『表現研究』99、表現学会、pp. 20-29
- 石綿敏雄（1989）「外来語カタカナ表記の歴史」『日本語学』8（1）、明治書店、pp. 80-88
- 庵功雄（2012）『新しい日本語学入門：ことばのしくみを考える 第2版』、スリーエーネットワーク
- 李宰錫（2017）「現代日本語に見られるカタカナ表記機能—キャラクター性の拡張様相を中心に—」、韓国外国語大学校大学院 修士学位論文、pp. 1-59
- _____（2019a）「男性一人称<ボク>と<オレ>のキャラクター属性」『일본연구（日本研究）』81、한국외국어대학교 일본연구소（韓国外国語大学校日本研究所）、pp. 177-200

- _____ (2019b) 「〈発話〉のカタカナ表記が表すキャラクター性について」
『일어일문학연구 (日語日文學研究)』111、한국일어일문학회 (韓国日語日文學会)、pp. 63-80
- 市村太郎 (2015) 「雑誌『太陽』『明六雑誌』における程度副詞類の使用状況と文体的傾向」『日本語の研究』11(2)、日本語学会、pp. 33-49
- 伊藤剛 (2014) 『テヅカ・イズ・デッド—ひらかれたマンガ表現論へ』、星海社
- 岩淵悦太郎 他 (1958) 『現代国語学Ⅲ ことばの変化』、筑摩書房
- 遠藤好英 (2000) 「幕末期～明治初期江戸語・東京語における合拗音と洋学資料」『語から文章へ』、東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 奥垣内健 (2010) 「カタカナ表記語の意味についての一考察—身体性と伝達メカニズムにういて—」『言語科学論集』16、京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座、pp. 79-92
- 奥田靖雄 (1996) 『ことばの研究・序説』、むぎ書房
- 大塚秀英 (2004) 『サブカルチャー文学論』、朝日新聞社
- 大橋崇行 (2014) 『ライトノベルから見た少女／少年小説史 現代日本の物語文化を見直すために』、笠間書院
- _____ (2017) 『言語と思想の言説—近代文学成立期における山田美妙とその周辺—』笠間書院
- 大崎正瑠 (2008) 「日本・韓国・中国における〈ウチ〉と〈ソト〉」『東京経済大学人文自然科学論集』第125号、pp. 105-127
- 大日方純夫 (2006) 「〈帝国軍隊〉の確立と〈男性〉性の構造」『ジェンダー史学』2006(2)、ジェンダー史学会、pp. 21-33
- 巖庭美 (2012) 「日本人と韓国人の言語行動における「ウチ、ソト、ヨソ」と「우리 (ウリ)、남 (ナム)」—主に敬語行動を例に—」『言語と文化』15号、関西学院大学リポジトリ管理委員会事務局、pp. 29-42

- 貝美代子（1997）「国定読本の外来語表記形式の変遷」『国語論究 6 近代語の研究』、明治書院
- 木坂基（1989）「近代文章の成立とカタカナ」『日本語学』8(1)、明治書院、pp. 37-47
- 金東奎（2013）「<ビジネス敬語コミュニケーション>の性質と場面についての考察」『일본연구（日本研究）』56、한국외국어대학교 일본연구소（韓国外国語大学校日本研究所）、pp. 167-185
- 片山朝雄（1996）「テレビのことばと新聞のことば」『日本語学』15（10）、pp. 57-63
- 片山久留美（2016）「表記の和漢混淆—『宝物集』古写本の場合」『三田國文』61、慶應義塾大学国文学研究室、pp. 66-82
- 金水敏（2003）『<もっと知りたい！日本語>ヴァーチャル日本語役割語の謎』、岩波書店
- _____（2007）『役割語研究の地平』、くろしお出版
- _____（2011）『役割語研究の展開』、くろしお出版
- _____（2021）「近・現代小説の片仮名の用法—班—村上春樹『海辺のカフカ』を中心に」『日本語文字論—表記・文字・文献を考えるための17章』、勉誠社、pp. 26-58
- 喜古容子（2007）「カタカナの表現効果—戦後の小説を資料に—」『早稲田日本語研究』16、早稲田大学日本語学会、pp. 61-72
- 工藤真由美（1995）「アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—」、ひつじ書房
- 国立国語研究所（1987）『雑誌用語の変遷』、秀英出版
- 斎賀秀夫（1955）「総合雑誌の片かな語」『言語生活』46（7）、筑摩書房、pp. 37-45

- 坂倉篤義 (1955) 「平かな用法の歴史」 『言語生活』 46 (7)、筑摩書房、
pp. 24-29
- 坂梨隆三 (1989) 「江戸期戯作のカタカナ」 『日本語学』 8 (2)、明治書店、
pp. 68-78
- 佐竹秀雄 (1980) 「若者のことば—新・言文一致体—」 『言語生活』 343、筑摩
書房、pp. 46-52
- _____ (1989) 「若者の文章とカタカナ効果」 『日本語学』 8 (1)、明治書
院、pp. 60-67
- _____ (1995) 「新たな文体を模索する」 『月刊語学』 278、大修館書店、
pp. 52-59
- 定延利之 (2006) 「ことばと発話キャラクタ」 『文学』 7-6、岩波書店、
pp. 117-129
- _____ (2009) 「日本語表現の諸相」 『日本語表現学を学ぶ人のために』、世
界思想社、pp. 118-131
- _____ (2011) 『日本語社会のぞきキャラくり 顔つき・カラダつき・ことば
つき』、三省堂
- 佐藤芳明 (2016) 「不定詞の意味論的再考：TAM-complex の視点から」 『獨協大
学外国語学部交流文化学科紀要』 4、pp. 41-63
- _____ (2011) 『日本語社会 のぞきキャラくり』、三省堂
- 清水卯三郎 (1874) 「平假名ノ説」 『明六雑誌』 6、明六社
- 徐園 (2009) 「新聞連載子ども漫画の表現形式の変遷—今日の表現形式はいかに
して成立したか」 『評論・社会科学』 89、同志社大学社会学会、pp. 111-
137
- 杉本つとむ (1989) 「カタカナの位置—その言語文化的意味と効用—」 『日本語
学』 8 (1)、明治書店、pp. 4-15
- 進藤咲子 (1981) 『明治時代語の研究—語彙と文章—』、明治書院

- Jason S. Barrows (1999) 「第二期国定修身教科書の〈忠義〉及び〈忠君愛国〉の教材の背景—日露戦争に着目して—」 『教授学の探究』 16、北海道大学教育学部教育方法研究室、pp. 123-134
- 徐潤純 (2006) 「カタカナ使用と文字選択の意識に関する一考察」 『일본언어문화 (日本言語文学) 』 9、일본언어문화학회 (日本言語文学学会) 、pp. 89-110
- 泉子・K・メイナード (2014) 『ライトノベル表現論 会話・創造・遊びのディスコースの考察』、明治書院
- _____ (2017) 『話者の言語哲学—日本語文化を彩るバリエーションとキャラクター—』、くろしお出版
- 高梨信博 (1989) 「読本のカタカナ—国定期を中心に—」 『日本語学』 8 (1) 、明治書店、pp. 48-59
- 巽健一 (2004) 「〈広告〉とその類縁概念 (広報、PR、宣伝) の関係について」 『広告科学』 45 (0) 、日本広告学会、pp. 140-152
- 土屋信一 (1977) 「現代新聞のカタカナ表記」 『電子計算機による国語研究』 8、国立国語研究所、pp. 140-159
- Dick Hebdige (1979) 『Subculture: the meaning of style』、London: Routledge
- 中川裕 (2006) 「アイヌ人によるアイヌ語表記への取り組み」 『表記の慣習のない言語の表記』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp. 1-44
- 中村公美子 (1983) 「女子高生の手紙文—その英語志向と表記上の特徴—」 『言語生活』 380、筑摩書房、pp. 88-96
- 成田徹男 (1994) 「現代日本語のかなづかいの問題点」 『名古屋市立保育短期大学紀要』、名古屋市立保育短期大学、pp. 33-48
- 成田徹男・榊原浩之 (2004) 「現代日本語の表記体系と表記戦略」 『人間文化研

- 究』2、名古屋市立大学、pp. 41-55
- 野間佐和子（2006）『手塚治虫＝ストーリーマンガの起源』、講談社
- 浜田秀（2001）「物語の四層構造」『認知科学』8（4）、pp. 319-926
- 春原昭彦（2004）『ゼミナール 日本のマス・メディア（第2版）』、日本評論社
- 坪井美樹（1996）「〈片仮名〉で書かれた和歌—《虫愛づる姫君》の詠んだ和歌をめぐって—」『文芸言語研究 言語編』（29）、筑波大学文藝・言語学系、pp. 57-71
- 平林周祐・浜由美子（1988）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 10 敬語』荒竹出版
- 深澤愛（2001）「雑誌『太陽』創刊号における外国地名片仮名表記」『国語文字史の研究』6、和泉書院、pp. 187-218
- _____（2003a）「漢字片仮名交じり文・漢字平仮名交じり文と外来語表記—『日本大家論集』を資料として—」
- _____（2003b）「漢字平仮名交じり文中における表記の選択—博文館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記—」『日本語科学』14、国立国語研究所、pp. 29-53
- _____（2003c）「漢字片仮名交じり文中における片仮名表記の選択：博文館『太陽』前誌群を資料として」『待兼山論集 文学編』37、pp. 37-50
- 深澤美香（2016a）「加賀家文書 翻刻・現代語訳 3「チャコルベ」—蝦夷通辞が記録したアイヌの求婚難題説話—」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』18、千葉大学、pp. 151-183
- 深澤美香（2016b）『加賀家文書におけるアイヌ語の文献学的研究』、千葉大学大学院人文社会科学科博士後期課程学位論文
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』、くろいそ出版
- 松田結貴（2019）『ポピュラーカルチャーの詩学—日本語の文字に秘められたマ

- ルチモダリティー』、風間書房
- 水本光美 (2006) 「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみる
ジェンダーフィルタ」『日本語とジェンダー』、ひつじ書房、pp. 73-94
- 三宅和子 (1994) 「日本人の行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識—」『日本語
教育論集』9号、筑波大学留学生教育センター
- 森岡健二 (1991) 『近代語の成立〈文体編〉』、明治書院、pp. 1-460
- 山口謡司 (2016) 『カタカナの正体』、河出書房新社
- 山崎實 (2000) 「物語文の分析批判：日本語の物語の場合」『英米言語文化研
究』48、大阪府立大学英米言語文化研究会、pp. 153-176
- 山田俊雄 (1955) 「過去におけるカタカナの用法の諸相」『言語生活』46
(7)、筑摩書房、pp. 30-36
- 山中智省 (2009) 「「おたく」誕生—「漫画ブリッコ」の言説力学を中心に—」
『横浜国大言語研究』27、pp. 16-34
- 山本武利 (1974) 「戦前の新聞読者層調査」『関西学院大学社会学部紀要』29、
関西学院大学、pp. 27-39
- 横路啓子 (2013) 「台湾における日本サブカルチャー受容 -オタク文化を中心に-」
『일본어문학 (日本語文学)』第60号、pp. 411-430
- 依田恵美 (2011) 「役割語としての片言日本語—西洋人キャラクターを中心に—」
『役割語研究の展開 (金水敏編)』、くろしお出版、pp. 213-248
- _____ (2013) 「カタコト日本語と役割語」『日本研究』14、부산대학교
일본연구소 (釜山大学校日本研究所)、pp. 47-79

【参考資料】

I. ゲーム⁷²

『MOTHER2 ギーグの逆襲』（1994、NINTENDO）、『STAR CRAFT』（1998、BLIZZARD）、『ソニック・バトル』（2003、SEGA）、『ソニック・ヒーローズ』（2003、SEGA）、『テイルズ・ジ・アビス』（2005、NAMCO）、『イナズマイレブン GO ギャラクシー』（2013、LEVEL5）、『初音ミク—Project DIVA F—2nd』（2014、SEGA）、『ペルソナ5』（2016、ATLUS）、『テイルズ・オブ・ベルセリア』（2016、BANDAINAMCO）、『ゼルダの伝説—ブレス・オブ・ザ・ワイルド—』（2017、NINTENDO）、『SPLATOON2』（2017、NINTENDO）、『スーパーマリオ・オデッセイ』（2017、NINTENDO）、『妖怪ウォッチ4 ぼくらは同じ空を見上げている』（2019、LEVEL5）、『デモンゲイズ EXTRA』（2021、KADOKAWA）

II. 漫画⁷³

『混血児リカ』（1969、梵天太郎）、『宇宙海賊キャプテンハーロック』（1977、松本零士）、『冬色かれんだあ』（1979、佐藤真樹）、『ラブ♥ストーリー』（1980、せがわ真子）、『プロレススーパースター列伝』（1989、原田久仁信）、『ラブひな』（1999、赤松健）、『あずまんが大王』（2000、あずまきよひこ）、『ななか6/17』（2000、八神健）、『鋼の錬金術師』（2001、荒川弘）、『ひぐらしのなく頃に～鬼晒し編～』（2006、鬼頭えん）、『クレヨンしんちゃん』（2011、臼井義人）、『REALPG』（2012、堂本裕貴）、『銀の匙』（2014、荒川弘）、『迷宮ブラックカンパニー』（2016、安村洋平）

⁷² 『ゲーム名』（発売年度、メーカー名）の発売年度順である。

⁷³ 『タイトル』（発売年度、作家名）の発売年度順である。一巻のみならず全巻を概観したものもあるが、ここでは両者を区分せずタイトルのみ取り上げる。なお、戦前の漫画は本文中に提示してあるため、ここでは省略する。

Ⅲ. ノベル類⁷⁴

『鍵』(1956、谷崎潤一郎)、『海底の魔術師』(1970、江戸川乱歩)、『モダン東京』シリーズ(1988、藤田宜永)、『暴力租界』(1996、大藪春彦)、『姫さまに願いを』(1998、藤原真莉)、『ブギーポップは笑わない』シリーズ(1998、上遠野浩平)、『海をわたった盲導犬ロディ』(2001、井上みちこ)、『漱石犬張子』(2002、村田有)、『がるぐる!—Dancing Beast Night—』(2005、成田良悟)、『告白』(2010、湊がなえ)、『ひぐらしのなく頃に』シリーズ(2011、竜騎士07)、『ひぐらしのなく頃に解』シリーズ(2011、竜騎士07)、『うみねこのなく頃に』シリーズ(2011、竜騎士07)

⁷⁴ 『タイトル』(発売年度、作家名)の発売年度順である。漫画資料と同様、一巻のみならず全巻を概観したものもあるが、ここでは両者を区分せずタイトルのみ取り上げる。

<資料1> 国語国定教科書の<内容><表記><文体>

<表-1> 国定第一期『尋常小学読本 八』における<内容><表記><文体>

	題名	内容	表記	文体
第一	郵便	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二	新聞紙	詩 候文	漢字ひらがな交じり	口語体 文語体 ⁷⁵
第三	おふみの慈善	経験文	漢字ひらがな交じり	文語体
第四	貯金	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第五	工業	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第六	焼物ト塗物	説明文 候文	漢字カタカナ交じり 漢字ひらがな交じり ⁷⁶	文語体
第七	武雄の入營	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第八	軍人	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第九	赤十字社	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第十	老人の話(一)	偉人伝	漢字ひらがな交じり	口語体
第十一	老人の話(二)		漢字ひらがな交じり	口語体
第十二	老人の話(三)		漢字ひらがな交じり	口語体

⁷⁵ 第二章の「新聞紙」は詩で、散文や文学のようなジャンルとは文体の基準をやや異にするが、本稿では文末や活用で文体を判断することに当たって、詩の本文は<口語体>として扱うこととする。また、この章の最後には候文が添えられているが、候文は文語文体の一つである故、これは<文語体>として扱うこととする。すなわち、第二章には<口語体>と<文語体>が共に使われていることと判断する。ただし、二つの文体は一つの文や文章の中で混用されることはない。本文の内容を、以下に記す。

第二 新聞紙

都会の事も 田舎の事も、 / 千里あちらの 他國の事も、 / 一目でわかる 新聞紙。 / あー。ちょーほーな 新聞紙。」 / 「火事が多いぞ。ぬすとがあるぞ / こはい病氣が はやってきた。」と、 / 氣をつけさせる 新聞紙。 / あー。しんせつな 新聞紙。」 / 人に知られん 善事もうつし、 / かげにかくれた 悪事もうつす。 / 鏡のよーな 新聞紙。 / あー。明かな 新聞紙。」

拝啓。この度、御店にて、改良釜専賣相成候由、帝國新聞の廣告にて、承知いたし候。早速、ためしみ度候間、この手紙着き次第、御送り下され度候。古代金と運送料とをあはせて、金貳圓參拾錢、別紙、郵便小為證書として、封入いたしおき候。以上。 / 十月二十八日 後藤吉兵衛 / 井上金物商店卸中

拝復。十月二十八日附の御手紙にて、當店専賣の改良釜御注文下され、有り難く、存じたてまつり候。本日、通運にて、送り出し候間、御ためし下され度候。以上。 / 十月三十日 井上金物商店 / 後藤吉兵衛殿

⁷⁶ 最後の部分は、第二章と同様、候文が添えられており、漢字ひらがな交じりで書かれている。

第十三	明治維新前ト明治維新後	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第十四	わが帝國	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十五	北海道移住者の話	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十六	ワガ國ノ物産	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第十七	選挙	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十八	帝國議會	説明文	漢字カタカナ交じり	口語体
第十九	地球(一)	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十	地球(二)		漢字ひらがな交じり	文語体

<表-2> 国定第二期『尋常小学読本 十二』における<内容><表記><文体>

	題名	内容	表記	文体
第一	明治天皇の御製	説明文 詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第二	日本海海戦	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第三	造船ノ話	説明文	漢字カタカナ交じり	口語体
第四	天候豫報及び暴風雨警報	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第五	動物と植物の關係	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第六	鎌倉	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第七	鳥居勝商	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第八	日本の女子	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第九	學校落成式	経験文	漢字カタカナ交じり	口語体 文語体 ⁷⁷
第十	公事と私事	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十一	阿蘇山	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十二	我が國の農業	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十三	國産の歌	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第十四	貿易	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第十五	南滿洲鐵道	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十六	歐羅巴の三都市	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十七	獸類の移住	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十八	苦樂	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十九	コロンブス	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十	辻音楽	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十一	烈士喜劍	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十二	主婦の務	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十三	孔子と孟子	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十四	大國民の品格	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体

⁷⁷ 郡長の祝文のみが文語体で表記され、他は口語体で記されている。

第二十五	自治の精神	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十六	帝國議會	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十七	軍人に賜はりたる勅諭	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十八	國民の至情	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体

<表-3> 国定第三期『尋常小学読本 十二』における<内容><表記><文体>

	題名	内容	表記	文体
第一	明治天皇の御製	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第二	出雲大社	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第三	チャールス、ダーウィ ン	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第四	新聞	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第五	蜜柑山	詩 説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第六	商業	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第七	鎌倉	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第八	ヨーロッパの旅	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第九	月光の曲	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十	我が國の木材	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十一	十和田湖	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十二	小さなねぢ	文学	漢字ひらがな交じり	口語体
第十三	國旗	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十四	リヤ王物語	文学	漢字ひらがな交じり	口語体
第十五	まぐる網	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十六	鳴門	詩	漢字ひらがな交じり	口語体
第十七	間宮林蔵	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第十八	法律	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十九	釈迦	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十	奈良	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十一	青の洞門	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十二	トマス、エヂソン	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十三	電氣の世の中		漢字ひらがな交じり	口語体
第二十四	舊師に呈す	候文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十五	港入	詩	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十六	勝安芳と西郷隆盛	偉人伝	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十七	我が國民性の長所短所	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体

<表-4> 国定第一期『高等小学読本 二』(1904年)における<内容><表記><文体>

	題名	内容	表記	文体
第一	秋の野山	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二	種子の散布	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第三	イチョー	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第四	安倍仲麻呂	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第五	助船	文学	漢字ひらがな交じり	口語体
第六	海ノ話	説明文	漢字カタカナ交じり	口語体
第七	浦島子	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第八	紫式部	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第九	税所敦子	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第十	名古屋城	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第十一	わが陸軍	説明文 候文	漢字ひらがな交じり	口語体 文語体
第十二	聯隊旗	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第十三	廢物利用	経験文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十四	製紙	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第十五	源為朝	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第十六	一谷の戦(一)	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十七	一谷の戦(二)			
第十八	アイヌ	説明文	漢字カタカナ交じり	口語体
第十九	二人の旅人と熊	文学	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十	笠置落	詩	漢字ひらがな交じり	文語体

<表-5> 国定第二期『高等小学読本 六』(1910年)における<内容><表記><文体>

	題名	内容	表記	文体
第一	動物と植物との関係	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二	わが国の農業	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第三	船津傳次平	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第四	人力車の發明	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第五	なぼれおんのろしや遠征	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第六	太陽ト月	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第七	望遠鏡と顕微鏡	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第八	びらみっと	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第九	すたんりーりびんぐすとん のゆくへをさがす(一)	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十	すたんりーりびんぐすとん のゆくへをさがす(二)			
第十一	熱帯植物	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体

第十二	ころんぶす(一)	偉人伝	漢字ひらがな交じり	口語体
第十三	ころんぶす(二)			
第十四	ころんぶす(三)			
第十五	ないやがら瀑布	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十六	地震	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第十七	忘れがたみ(一)	小説	漢字ひらがな交じり	文語体
第十八	忘れがたみ(二)			
第十九	手紙	候文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十	外交	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体

<表-6> 国定第三期『高等小学読本 四』(1926年)における<内容><表記><文体>

	題名	内容	表記	文体
第一	売書	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二	千渴の船	小説	漢字ひらがな交じり	文語体
第三	すゝき原	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第四	叢虫	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第五	渡り鳥	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第六	伊藤博文	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第七	古社寺と國寶	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第八	万里の長城	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第九	東西雑語	小説	漢字ひらがな交じり	口語体
第十	資本	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十一	ハワイ通信	候文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十二	柳生宗矩	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第十三	雪	説明文 詩	漢字ひらがな交じり	口語体 文語体
第十四	賢母の教	小説	漢字ひらがな交じり	文語体
第十五	詠史十首	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第十六	ボアソナード君の帰国 を送る詞	経験文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十七	法律及び命令	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十八	道徳と法律	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十九	田園の自然	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十	我が家	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十一	春を待つ歌	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十二	世界の航路	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十三	手紙の認め方	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十四	欧米人の日本人観	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十五	ローマの旧都	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体

第二十六	大樹	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十七	関税	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十八	曾国藩	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十九	峠の茶屋	小説	漢字ひらがな交じり	口語体
第三十	国語と愛国心	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体

<表-7> 国定第二期『女子用 高等小学読本 三』（1912年）における<内容><表記><文体>

	題名	内容	表記	文体
第一	皇太后陛下十二徳の御詠	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二	日本の風土	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第三	博物館	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第四	奈良	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第五	原平藤橘	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第六	感情	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第七	慈善家キャサリン	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第八	応急手当	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第九	鏡	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十	神社	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十一	ほとゝぎす	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十二	月光の曲	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十三	空の景色	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十四	望遠鏡と顕微鏡	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十五	バクテリア	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第十六	小袖曾我	小説	漢字ひらがな交じり	文語体
第十七	赤十字社総会の記	説明文	漢字ひらがな交じり 漢字カタカナ交じり	文語体
第十八	天然記念物	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十九	夏の暁	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十	台所	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十一	味噌と醤油	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十二	暑中見舞	候文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十三	租税	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体
第二十四	西洋雑話	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十五	朝鮮略史	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十六	保険	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十七	小野寺十内の妻	小説	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十八	服装	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十九	釈迦	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第三十	統計	説明文	漢字カタカナ交じり	文語体

<表-8> 国定第三期『女子用 高等小学読本 二』（1926年）における<内容><表記><文体>

	題名	内容	表記	文体
第一	農業	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二	堀田瑞松	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第三	月の光	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第四	鎮守に詣でて	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第五	社会奉仕の精神	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第六	国字四書	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第七	猫の垣巡	小説	漢字ひらがな交じり	口語体
第八	グロチウスと夫人マリヤ	偉人伝	漢字ひらがな交じり	口語体
第九	鱒釣	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十	保険	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十一	人を紹介する手紙	候文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十二	エジプトの遺蹟	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十三	マルコ、ポーロ	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第十四	植物と気象	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十五	歳末の十日	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十六	俳句	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第十七	都会と田舎	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十八	上毛の三山	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十九	ペートル大帝	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十	警察と国民	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十一	かんにん	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十二	課械	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十三	海苔	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十四	福澤諭吉	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十五	品物の不着につきて	候文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十六	故郷の花	小説	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十七	鳥の翼と昆虫の翅	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十八	贈物	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十九	学校園	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第三十	国史に還れ	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体

<表-9> 国定第三期『農村用 高等小学読本 二』（1927年）における<内容><表記><文体>

	題名	内容	表記	文体
第一	農業	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二	村の秋	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体

第三	稲刈	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第四	社会奉仕の精神	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第五	護国の目と腕	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第六	猫の垣巡	小説	漢字ひらがな交じり	口語体
第七	海洋	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第八	ソコトラ島	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第九	保険	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十	鎮守に詣でて	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第十一	人を紹介する手紙	候文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十二	エジプトの遺蹟	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十三	マルコ、ポーロ	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第十四	植物と気象	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十五	俳句	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第十六	碧海郡の農業	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第十七	上毛の三山	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十八	山里の夕	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第十九	農業倉庫	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十	警察と国民	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十一	村上義光	詩	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十二	海苔	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十三	汽船トロール漁業	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十四	福澤諭吉	偉人伝	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十五	書簡	候文	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十六	故郷の花	小説	漢字ひらがな交じり	文語体
第二十七	鳥の翼と昆虫の翅	説明文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十八	春近し	経験文	漢字ひらがな交じり	口語体
第二十九	奉天附近の大会戦	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体
第三十	国史に還れ	説明文	漢字ひらがな交じり	文語体

<資料2> 『中外医事新報』の<内容><表記><文体>

#	年度	号数	タイトル	文体	文の表記	欄の名称	備考	翻訳 ⁷⁸
1	1882	57	日本ニ男子多キ理由	文語体	漢カ交			
2	1882	57	別林醫會報告(續稿)	文語体	漢カ交			不明
3	1882	57	精液及ヒ經血ノ蛋白量	文語体	漢カ交			翻訳
4	1882	57	尿中ノ「サリチール」酸ヲ驗出スル法	文語体	漢カ交			不明
5	1882	57	「コロラール」加沃度丁幾	文語体	漢カ交			不明
6	1882	57	「ユーカリプテウス」樹	文語体	漢カ交			不明
7	1882	57	酒醋中ニ存スル鑛酸ヲ驗スル法	文語体	漢カ交			不明
8	1882	57	(實驗記事)皮膚梅毒結節ノ實驗	文語体	漢カ交			不明
9	1882	57	(問答評論)附屬醫ヲ廢スルノ可否	文語体	漢カ交			
10	1882	57	(雑報數件)	文語体	漢ひ交		79	
11	1882	57	(衛生局録事)傳染病週報 二	文語体	漢カ交			
12	1882	67	心神勞働ノ物質交換ニ於ル關係ヲ論ス	文語体	漢カ交			
13	1882	67	牛乳ニ混淆シタル米泔汁ノ試験說	文語体	漢カ交			不明
14	1882	67	外科的銳匙ノ說	文語体	漢カ交			
15	1882	67	エーキマン氏罌粟科植物中類[アルカロイド]基發明ノ報告抄譯	文語体	漢カ交			不明
16	1882	67	人工製ペペリンノ說	文語体	漢カ交			不明
17	1882	67	ヤーラツパ球根ノ試験	文語体	漢カ交			不明
18	1882	67	(實驗記事)右辜丸癌腫治驗	文語体	漢カ交			
19	1882	67	(問答評論)醫師ノ弊習ヲ論ス	文語体	漢カ交			
20	1882	67	(雑報)數件	文語体	漢ひ交			

⁷⁸ <不明>はこれが西洋のものなのか日本のものなのか不明確なものである。

⁷⁹ 網掛けの部分は、本雑誌において特殊なものであることを表す。<中外>の場合は、<漢ひ交>で書かれたもの、両方の表記が見られるものがその対象である。

21	1882	67	(衛生局録事) 傳染病週報 三	文語体	漢カ交			
22	1892	283	日本ニ於テ惡性水腫ノ實驗	文語体	漢カ交			翻訳
23	1892	283	河豚ノ體內ニ於ケル毒質ノ所在	文語体	漢カ交			
24	1892	283	肺壞疽ノ一實驗	文語体	漢カ交			
25	1892	283	電擊傷ニ就テ	文語体	漢カ交			翻訳
26	1892	283	大動脈瘤ニ就テ	文語体	漢カ交			
27	1892	283	朝鮮大ニ就テ	文語体	漢カ交			
28	1892	283	ウエルホーフ氏斑點病實驗	文語体	漢カ交			
29	1892	283	兒童期ノ軟口蓋成形手術ニ就テ	文語体	漢カ交			翻訳
30	1892	283	梅毒療法現今ノ地位	文語体	漢カ交			翻訳
31	1892	283	舞蹈病ノ原因及療法ニ就テノ實驗	文語体	漢カ交			翻訳
32	1892	283	脾脱疽桿菌ガ血管ニ及ボス變化及母獸ヨリ仔獸ニ移行スルノ証明	文語体	漢カ交			翻訳
33	1892	283	肺炎菌ニ因スル腦膜炎	文語体	漢カ交			翻訳
34	1892	283	急性黄色肝萎縮症ノ原因	文語体	漢カ交			翻訳
35	1892	283	頸及胸部皮下氣腫ノ一症	文語体	漢カ交			翻訳
36	1892	283	牛乳中ノ結核菌檢査法	文語体	漢カ交			翻訳
37	1892	283	乳腺結核症	文語体	漢カ交			翻訳
38	1892	283	精神病者診斷ノ形式(一)	文語体	漢カ交			不明
39	1892	283	醫事話藪	文語体	漢カ交			
40	1892	283	醫藥分業	文語体	漢カ交			
41	1892	283	小言一則	文語体	漢カ交			
42	1892	283	譯語ノ選定	文語体	漢カ交			
43	1892	283	傳記 緒方洪庵先生(肖像)	漢文	漢文			
44	1892	283	治療彙報	文語体	漢カ交			
45	1892	283	大卵巢囊腫ノ妊娠ニヨリテ自然治癒セシ實驗	文語体	漢カ交			
46	1892	283	初生兒蛔蟲ノ實驗	文語体	漢カ交			

47	1892	283	器械及藥品	文語体	漢カ交			
48	1892	283	醫科大學の新年會	文語体	漢ひ交			
49	1892	283	ウイルヒヨウ及ヘルムホルツ兩翁古稀の賀	文語体	漢ひ交			
50	1892	283	全國醫師現在數	文語体	漢ひ交			
51	1892	283	東京藥學會と醫藥分業論	文語体	漢ひ交			
52	1892	283	卒業學生職務種別	文語体	漢ひ交			
53	1892	283	學生卒業	文語体	漢ひ交			
54	1892	283	藥劑師及產婆	文語体	漢ひ交			
55	1892	283	西洋新聞	文語体	漢ひ交			
56	1892	283	卒業證書授與式	文語体	漢ひ交			
57	1892	283	國家醫學講習科	文語体	漢ひ交			
58	1892	283	公費にて學士を獨逸に遣らむとす	文語体	漢ひ交			
59	1892	283	地方近事	文語体	漢ひ交			
60	1892	283	醫會	文語体	漢ひ交			
61	1892	283	人事彙報	文語体	漢ひ交			
62	1892	283	中央醫事週報	文語体	漢ひ交			
63	1892	283	卒業の祝宴	文語体	漢ひ交			
64	1892	283	和漢醫師の運動	文語体	漢ひ交			
65	1892	283	時事日誌	文語体	漢ひ交			
66	1892	283	新刊書籍	文語体	漢カ交			
67	1892	306	右季肋部ノ巨大ナル纖維肉腫-截除-治	文語体	漢カ交			
68	1892	306	胃癌ニ繼發セル多發性神經炎ノ一例(續)	文語体	漢カ交			
69	1892	306	人工肛門二三ノ實驗(續)	文語体	漢カ交			
70	1892	306	免疫質及抗毒質ニ就テ(續)	文語体	漢カ交			翻訳
71	1892	306	血液中免疫及治癒物質ノ本性ニ就テ(續)	文語体	漢カ交			
72	1892	306	賣笑論併セテ解放論ニ及ブ(續)	文語体	漢カ交			
73	1892	306	赤血球ノ箇數	文語体	漢カ交			不明
74	1892	306	原發硬結チ切除スルノ可否	文語体	漢カ交			翻訳

75	1892	306	肥大性鼻炎ト月經閉止ノ關係	文語体	漢カ交			翻訳
76	1892	306	紅膿	文語体	漢カ交			翻訳
77	1892	306	子宮ノ固定法	文語体	漢カ交			翻訳
78	1892	306	治療彙報	文語体	漢カ交			
79	1892	306	癌腫ノ寄生病毒説ニ就テ	文語体	漢カ交			
80	1892	306	赤痢病原探究結果報告(續)	口語体	漢ひ交		「扱て是から私が當地に於て研究した處の成績を御話致しませう」と出ているように、客観的なものではなく、話すように書いている。また、最後の部分に(聴衆拍手大喝采)と出ているものから、速記体と似ているものであると推測できる。	
81	1892	306	歐米諸國醫學ノ景況(續)	文語体	漢カ交			
82	1892	306	萬國赤十字第五集會報告略(續)	文語体	漢カ交			
83	1892	306	賀川有齋先生(肖像入)	文語体	漢カ交			
84	1892	306	賀川蘭齋先生(肖像入)	文語体	漢カ交			
85	1892	306	賀川蘭臺先生(肖像入)	文語体	漢カ交			
86	1892	306	英國トムソン氏	文語体	漢ひ交			
87	1892	306	中央醫會の意見	文語体	漢ひ交			
88	1892	306	佐々木海軍大軍醫遭難	文語体	漢ひ交			
89	1892	306	醫科大學年始會	文語体	漢ひ交			
90	1892	306	醫師免許規則改正法案	文語体	漢ひ交			
91	1892	306	東洋醫學院	文語体	漢ひ交			
92	1892	306	學生卒業	文語体	漢ひ交			
93	1892	306	第四高等中學校卒業證授與式	文語体	漢ひ交			
94	1892	306	學校衛生取調委員會	文語体	漢ひ交			
95	1892	306	醫學士鈴木徳男氏	文語体	漢ひ交			
96	1892	306	地方醫會	文語体	漢ひ交			
97	1892	306	醫事日誌	文語体	漢ひ交			

98	1892	306	新刊書籍	文語体	漢カ交			
99	1902	523	目下ノ蛋白質化學	混用	漢カ交		基本的に「である」体であるが、「～なりたる」「如し」「～しむる」などの、文語体の文法表現も見られている。	
100	1902	523	「プロタルゴール」ノ耳鼻咽喉科ニ於ケル應用	混用	漢カ交			
101	1902	523	「ヘモリーゼ」ニ於ケル血液形態的變化ノ研究	文語体	漢カ交			
102	1902	523	翼狀贅片ニ就テ附クナップ氏式手術ノ修正	文語体	漢カ交			
103	1902	523	「ペスト」菌並ニ大腸菌ノ脾肝及脾成分加培地ニ於ケル發育狀態	文語体	漢カ交			
104	1902	523	實驗 余ガナセル「トヲホーム」療法	文語体	漢カ交			
105	1902	523	聚鈔 癩癩ニ關スル現時ノ立論	文語体	漢カ交			
106	1902	523	内臟下垂症論ノ現況	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
107	1902	523	遊離性第十肋骨ノ價值	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
108	1902	523	乳兒中鉛毒ノ一例症	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
109	1902	523	稀薄セザル牛乳ヲ以テ嬰兒ヲ育ツル	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
110	1902	523	小兒榮養論	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
111	1902	523	肺結核ニ於ケル榮養障礙	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
112	1902	523	炭ノ結核菌ニ及ボス作用ニ就キテ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
113	1902	523	男子生殖器結核ニ於ケル結核性腦膜炎ニ就キテ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
114	1902	523	肺結核ノ初期ニ於ケル胃分泌機能ニ就キテ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
115	1902	523	肋膜ノ吸收力	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
116	1902	523	肋膜炎ノ種類ニ依リ肋膜ノ吸收ニ遲速アルコト	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
117	1902	523	氣候療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
118	1902	523	結核性腹膜炎ノ外科的療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
119	1902	523	廣汎性穿孔腹膜炎ノ手術的療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳

120	1902	523	靜脈内沃度注射ノ治療的效用ニ就テノ試験	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
121	1902	523	吐糞症ノ亞篤羅必涅療法ニ就キテ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
122	1902	523	疼痛性膀胱病ノ症候的療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
123	1902	523	「グリコズリー」及糖尿病ノ撒里失爾酸那篤ニ謨療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
124	1902	523	不溶性水銀劑は注射後は如何にして吸收せらる、や	文語体	漢ひ交	摘録		翻訳
125	1902	523	アルトシエルピッツの癲狂院	文語体	漢ひ交			
126	1902	523	死の苦み	文語体	漢ひ交			
127	1902	523	獨逸ニ於ケル病院ノ設計及設備ニ關スル規定	文語体	漢カ交			
128	1902	523	器械 聴診器ニ就テ	文語体	漢カ交			
129	1902	523	雜事	文語体	漢ひ交			
130	1902	523	新刊書籍目録	文語体	漢カ交			
131	1902	523	官報	文語体	漢カ交			
132	1902	546	薦骨脊柱筋ニ原發セシ血管腫ノ一例	文語体	漢カ交			
133	1902	546	手術叢談(承前)	文語体	漢カ交			
134	1902	546	下腹及膀胱ニ發生セシ放線狀菌症ノ一例	文語体	漢カ交			
135	1902	546	實驗 外科叢談	文語体	漢カ交			
136	1902	546	癩病ニ關スル吾人ノ現在ノ知識(承前)	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
137	1902	546	癌性肋膜炎ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
138	1902	546	慢性肺結核ノ早期診断	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
139	1902	546	膽石ニ關スル腸管閉塞ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
140	1902	546	全身病ト眼底病トノ關係ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
141	1902	546	腸室扶斯ニ於ケル肝膿瘍ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
142	1902	546	纖維性閉塞性氣管枝炎	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
143	1902	546	神經衰弱症ノ他覺的徵候	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
144	1902	546	胸腔ニ潛伏セル大動脈動脈瘤ノ診断	文語体	漢カ交	摘録		翻訳

145	1902	546	腦壓ニ因リテノ脊體ノ變化	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
146	1902	546	大脳ト瞳孔トノ關係	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
147	1902	546	高地氣候ト血液製造	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
148	1902	546	痛風ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
149	1902	546	發作性速動心ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
150	1902	546	肺結核ノ藥物療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
151	1902	546	レーメル氏「エジェクイートル」療法ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
152	1902	546	小兒下痢ニ於ケル「ビスムトーゼ」	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
153	1902	546	疥癬ノ療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
154	1902	546	沃度及結列阿曹篤「わぞーげん」ノ効用	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
155	1902	546	肺結核ノ病院療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
156	1902	546	喉頭炎ノ療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
157	1902	546	學會 癌腫研究委員會	文語体	漢カ交			翻訳
158	1902	546	器械 再ビ食鹽水注射器ニ就テ	文語体	漢カ交			
159	1902	546	雜事	文語体	漢カ交			
160	1902	546	官報	文語体	漢カ交			
161	1912	763	脚氣症ニ於ケル横紋筋ノ再生ニ就テ	文語体	漢カ交			
162	1912	763	ヘツド氏帶ト我邦古來ノ鍼灸術ニ就テ	文語体	漢カ交			
163	1912	763	食餌性熱ノ實驗的研究追加	混用	漢カ交		全体的に「である」体である。文語体の文法要素も見られるが、「申上げますれば」、「来す」などの少数の語彙や引用の部分に見られている点で、全体的に口語体に近いと判断した。	
164	1912	763	實驗 稀有ナル腸管囊腫様氣腫ノ一例	文語体	漢カ交			
165	1912	763	外科叢談(承前)十、小兒辜丸ノ惡性腫瘍	文語体	漢カ交			
166	1912	763	伯林「シヤリテー」病院	文語体	漢カ交			翻訳
167	1912	763	國家醫學會第二十五次總會 中毒ニ對スル生體ノ習慣性ニ就テ	文語体	漢カ交			

168	1912	763	三井慈善病院第九回 學術集談會	文語体	漢カ交			
169	1912	763	第八十三回獨逸萬有 學士及ビ醫士會 血 栓及ビ栓塞 第一、病 理解剖	文語体	漢カ交		1911年9月24日から29 日まで、ドイツで開催さ れたものであるとし、演 説中の要点を抄録したも のであるとしている。	翻訳
170	1912	763	傳記 武谷幽蕙先生	文語体	漢カ交			
171	1912	763	民顯大學婦人科教室 ニ於ケル最近五十年 間ノ子宮全破裂	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
172	1912	763	微生物子宮出血ニ就 テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
173	1912	763	胚胎腺ノ内分泌ニ就 テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
174	1912	763	狹窄骨盤ニ於ケル自 然分娩ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
175	1912	763	肺臟包蟲ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
176	1912	763	不定型所見ヲ呈スル 重症貧血ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
177	1912	763	胃鳴症(神經性胃蠕 動不穩症)ノ一例	文語体	漢カ交	摘録		
178	1912	763	膽汁ノ醫療的應用	文語体	漢カ交	摘録		
179	1912	763	血液中ノ呼吸作用ト 血液再生ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		
180	1912	763	實驗的貧血ニ於ケル 赤血球ノ抵抗及其基 質ノ變化ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録	伊丹繁とブラットの共述 としている。官情第8549 号に収録されたものの摘 録と判断し、翻訳として 扱わず。	
181	1912	763	臟器療法ニ就テ	文語体	漢カ交			翻訳
182	1912	763	胃幽門狹窄ニ對スル 過水化マグネシウム ノ效果	文語体	漢カ交			翻訳
183	1912	763	胃酸過多症ノ療法殊 ニ過酸化水素ノ應用 ニ就テ	文語体	漢カ交			翻訳
184	1912	763	肺臟及ビ肋膜腫瘍ノ 手術可能性ニ就テ	文語体	漢カ交			翻訳
185	1912	763	サルバルサンノ癩菌 ニ對スル作用	文語体	漢カ交			翻訳
186	1912	763	藥品 ピツイトリン	文語体	漢カ交			
187	1912	763	雜事	文語体	漢カ交		引用の内容は、漢カ交と 文語体で書かれている。	
188	1912	786	腸「チフス」菌ノ被膜 形成ニ就テ	文語体	漢カ交			
189	1912	786	微生物ノ血清診斷ニ對 スル余ガ簡易法ノ價	文語体	漢カ交			

			値及び其試験方法 (承前)					
190	1912	786	「ペスト」毒素及び其 病原作用ニ就テ(第 一回報告)(承前)	文語体	漢カ交			
191	1912	786	心臓喘息ノ病理及ビ 療法(承前)	文語体	漢カ交			翻訳
192	1912	786	癌ノ自然治癒説	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
193	1912	786	炎性気管枝擴張ノ病 理及ビ原因	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
194	1912	786	心臓測定法ノ一新法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
195	1912	786	日露戦役中満洲ニ發 生セル發疹性熱性病 ノ病原タル一新細菌 「バチルス、フェブリ ス、エキサテマチー、 マンヂェリーチ」ニ 就テ	文語体	漢カ交			
196	1912	786	療法 胃擴張及其療 法ニ就テ(承前)	文語体	漢カ交			翻訳
197	1912	786	雑事	文語体	漢ヒ交			
198	1922	1003	日本人ノ骨骼ハ獨逸 人ノソレニ比シ果シ テ早熟ナルカ	文語体	漢カ交			
199	1922	1003	ツエロイヂン連続切 片法ノ一便法	文語体	漢カ交			
200	1922	1003	生物の新しき見方(上)	口語体	漢ヒ交		「せる」「らむ」などの 文語体文法要素が見られ るが、全体的には「であ る」体である故に、口語 体と判断する。	
201	1922	1003	醫學と教育	口語体	漢ヒ交			
202	1922	1003	社會學と醫學	口語体	漢ヒ交			
203	1922	1003	實驗心理學ヨリ見タ ル個性ト能力(一)	口語体	漢カ交			
204	1922	1003	腸「チフス」の診断	口語体	漢ヒ交			
205	1922	1003	最輕症腦膜炎ニ就テ	口語体	漢カ交			
206	1922	1003	内科的疾患に於ける 沃度劑適應に就て (上)	口語体	漢ヒ交			
207	1922	1003	英國の公衆衛生學及 び醫事統計學	口語体	漢ヒ交			
208	1922	1003	醫街拾遺(其百〇六) 藥袋ニ廣告	口語体	漢カ交			
209	1922	1003	筋肉労働ノ血液ニ及 ボ影響	文語体	漢カ交	摘録		翻訳

210	1922	1003	社會的向上ノ種族生物學的意義	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
211	1922	1003	血液ト胃液トノ關係	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
212	1922	1003	心理學 青年醫家ノ心理	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
213	1922	1003	膽石症ノ初期症狀	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
214	1922	1003	糖尿病ノ血液検査	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
215	1922	1003	腹膜炎ノエーテル療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
216	1922	1003	喘息ノワクチン療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
217	1922	1003	治療教育學ノ概念ニ就キテ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
218	1922	1003	男女共學	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
219	1922	1003	北米合衆國ニ於ケル禁酒法令ノ健康上ニ及ボシタル影響ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
220	1922	1003	パリ市ニ於ケル幼兒死亡率	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
221	1922	1003	獨逸國民ノ健康ノ衰微	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
222	1922	1003	科學的國民榮養	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
223	1922	1003	地位問題 麻醉法専門醫	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
224	1922	1003	學校醫の検査ノ價値	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
225	1922	1003	學校兒童ノ耳病	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
226	1922	1003	雜事	文語体	漢カ交			
227	1922	1026	幼年性麻痺性癡呆患者腦ノ組織學的検査	文語体	漢カ交			
228	1922	1026	中學生殊ニ苦學生ノ新陳代謝試驗成績ノ要旨(承前)	文語体	漢カ交			
229	1922	1026	ピルカルビン、アトロピン及ピアドレナリンニ因ル血液像ノ變化ト脾臟トノ關係ニ就テ(承前、完)	文語体	漢カ交			
230	1922	1026	レントゲン診療瑣談(五)	口語体	漢カ交			
231	1922	1026	叢談 流行性腦脊髓膜炎ノ療法(承前)	口語体	漢カ交	叢談		翻訳
232	1922	1026	學會 第十九回日本內科學會(承前)	文語体	漢カ交			
233	1922	1026	結核撲滅策	文語体	漢カ交	摘録		翻訳

234	1922	1026	結核療養所ト点滴感染	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
235	1922	1026	結核ノ家庭ニ於ケル小兒傳染ノ危険ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
236	1922	1026	人類ノ住血吸蟲ノ地理的分布	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
237	1922	1026	フィリピン島ニ於ケルシック反應ノ成績	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
238	1922	1026	早産徴候ニツキテ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
239	1922	1026	子宮内胎兒死亡ノ特異症状	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
240	1922	1026	産褥傳染ト溶血性連鎖狀球菌トノ關係	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
241	1922	1026	妊娠中ニ於ケル異常神經過敏ニヨル失神	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
242	1922	1026	雑事	文語体	漢カ交			
243	1923	1027	一世紀間ノ回顧	口語体	漢カ交		原文と翻訳分が同時に並べられている。	翻訳
244	1923	1027	甲腺狀結核ニ就テ	文語体	漢カ交			
245	1923	1027	十二指腸粘膜抽出液	文語体	漢カ交			
246	1923	1027	糖攝取後ノ血糖及糖濾過度變動ニ就テノ研究	文語体	漢カ交			
247	1923	1027	藥物ノ膀胱穿通性ニ關スル研究	文語体	漢カ交			
248	1923	1027	生理的竝ニ超生理的吸引力ニ對スル乳腺ノ組織學的研究	文語体	漢カ交			
249	1923	1027	率先者の苦心(ジェームス、シンプソンノ事)	口語体	漢カ交		研究に関するものではなく、エッセイのようなものである。	
250	1923	1027	醫事話叢(一)	口語体	漢カ交			
251	1923	1027	工場疲勞(上)	口語体	漢カ交			翻訳
252	1923	1027	醫街拾遺(其百十六)藥品ノ摺替	口語体	漢カ交			
253	1923	1027	東京醫學會例会	文語体	漢カ交			
254	1923	1027	第四十六回京都皮膚科集談會	文語体	漢カ交			
255	1923	1027	アルコールト職業能率	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
256	1923	1027	飲酒ト死亡	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
257	1923	1027	墮胎ノ問題	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
258	1923	1027	職業的皮膚病	文語体	漢カ交	摘録		翻訳

259	1923	1027	産業労働者ノ増加ト国民ノ健康	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
260	1923	1027	社會的精神病學 少年ノ自殺	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
261	1923	1027	嗜眠性腦炎ノ病原ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
262	1923	1027	貧血ノ療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
263	1923	1027	腎盂膀胱炎ノ自家尿ワクチン療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
264	1923	1027	バセドウ氏病ノ沃度砒素併用療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
265	1923	1027	哺乳兒ノ暑氣障碍ノ臨牀補遺	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
266	1923	1027	哺乳時期ニ於ケル食物ノ腸通過時間	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
267	1923	1027	「ヂフテリー」ノ診斷ニツキテ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
268	1923	1027	起立性蛋白尿ノ原因	文語体	漢カ交	摘録		
269	1923	1027	雜事	文語体	漢カ交			
270	1923	1048	腸間膜漿液性囊腫ニ就キテ	文語体	漢カ交			
271	1923	1048	豊多摩監獄ニ於テ觀察セラレタル受刑者ノ徐脈ニ就テ、附浮腫病類似ノ疾患ニ就テ(承前、完)	文語体	漢カ交			
272	1923	1048	澱粉分解酵素製劑ノ比較(承前、完)	文語体	漢カ交			
273	1923	1048	腦脊髄液糖量測定法、バング氏法トメチレン青トノ比較	文語体	漢カ交			
274	1923	1048	血糖測定法、バング氏法トメチレン青法トノ比較	文語体	漢カ交			
275	1923	1048	講演 交感神經に關する學說(十四)	口語体	漢カ交	講演	講演という欄に書かれている。	
276	1923	1048	叢談 日常外科指針(承前、完)	文語体	漢カ交			翻訳
277	1923	1048	小兒ノ急死ト淋巴體質	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
278	1923	1048	結核性小兒ノ肺尖部肋膜炎	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
279	1923	1048	小兒及ビ幼兒ノ肺結核診斷上 X線ノ價値ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
280	1923	1048	小兒肺結核ノ原發竈	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
281	1923	1048	哺乳兒結核ノ豫後	文語体	漢カ交	摘録		翻訳

282	1923	1048	哺乳兒「ヂスペプシ ー」ノヨーグルト療 法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
283	1923	1048	外科ニ於ケルナルシ レン麻醉	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
284	1923	1048	鈍カニヨル腹腔内損 傷ノ診断	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
285	1923	1048	雑事	文語体	漢ヒ交			
286	1924	1049	腸線應用理想的皮膚 縫合法	文語体	漢カ交			
287	1924	1049	「パラチフス」B 菌ノ 排泄路ニ關スル實驗 的研究	文語体	漢カ交			
288	1924	1049	財界ノ浮沈ト疾病ト ノ關係	口語体	漢カ交			
289	1924	1049	蠅ト各種寄生蟲卵ト ノ關係	文語体	漢カ交			
290	1924	1049	講演 交感神經ニ關 スル學說(一五)	口語体	漢ヒ交	講演	講演という欄に書かれて いる。	
291	1924	1049	ヒッポクラテスの誓 詞	口語体	漢ヒ交			
292	1924	1049	育兒講習會と母親學 校	口語体	漢ヒ交			
293	1924	1049	醫學の分野に於ける 新しい仕事	口語体	漢ヒ交			
294	1924	1049	日本醫家古籍考ノハ シガキニ就キテ	文語体	漢カ交			
295	1924	1049	近世醫學史の綱要	口語体	漢ヒ交			
296	1924	1049	睡眠生理ノ研究	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
297	1924	1049	血壓ノ研究	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
298	1924	1049	性的早熟ノ一例	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
299	1924	1049	住宅難が健康上ニ及 ボス影響	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
300	1924	1049	結核療養所ニ入ルベ キ病者ノ選擇	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
301	1924	1049	學校兒童ノ眼鏡使用	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
302	1924	1049	食器布巾ニヨル結核 菌ノ傳染	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
303	1924	1049	齒ト結核菌侵入ノ門 戸	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
304	1924	1049	腹痛ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
305	1924	1049	胃及十二指腸ノ急 性穿孔	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
306	1924	1049	頭痛ノ原因ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
307	1924	1049	急性蟲様突起炎ノ皮 膚症狀	文語体	漢カ交	摘録		翻訳

308	1924	1049	胃腸潰瘍患者用ノ重湯合劑	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
309	1924	1049	幼兒ノ腦脊髓液ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
310	1924	1049	幼兒ノ膿胸ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
311	1924	1049	小兒腎臟炎ノ診斷ト療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
312	1924	1049	小兒膀胱腎盂炎ニヘキサール	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
313	1924	1049	潜伏辜丸ノ手術成績	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
314	1924	1049	葡萄狀菌敗血症トワ氏反應	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
315	1924	1049	四肢手術ノ横斷麻醉法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
316	1924	1049	外科的結核トウロクロモーゲン反應	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
317	1924	1049	小腸ナクシテ生活シ得ルヤ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
318	1924	1049	雜事	文語体	漢カ交			
319	1924	1072	蛋白沈降素トシテノ硫酸安母ノ影響 附余ノ補體成分ノ分離法ニ就テ	文語体	漢カ交			
320	1924	1072	所謂腦膜炎(慢性鉛中毒)ノ診斷及治療ニ就テ	文語体	漢カ交			
321	1924	1072	寒冷ニヨル壞疽ノ成因ニ就テ	口語体	漢カ交			
322	1924	1072	肺炎雙球菌ノ一種ナル多形性雙球菌ニ因スル膀胱炎ニ就テ	文語体	漢カ交			
323	1924	1072	レントゲン診療瑣談(二十)	口語体	漢カ交		論文ではなく、エッセイのようなものである。	
324	1924	1072	講演 歐米ニ於ケル輸血法ノ現在(十)	口語体	漢カ交	講演		
325	1924	1072	肺炎菌ニヨル多發性關節炎	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
326	1924	1072	創傷ヨリ感染セル猩紅熱	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
327	1924	1072	猩紅熱患者ノ血液及ビ尿中ニアル毒素ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
328	1924	1072	蟻蟲驅除法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
329	1924	1072	縫合材料トシテノ臍帶ノ應用	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
330	1924	1072	枸橼酸曹達ノ止血作用	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
331	1924	1072	枸橼酸曹達注射ニヨル血液凝固時ノ短縮	文語体	漢カ交	摘録		翻訳

332	1924	1072	血友病ノ枸橼酸曹達注射療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
333	1924	1072	婦人淋疾ノ診断法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
334	1924	1072	白帶下ノ療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
335	1924	1072	惡阻ノ療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
336	1924	1072	惡阻ノルミナル曹達療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
337	1924	1072	産褥熱ノ豫防法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
338	1924	1072	雑事	口語体	漢ひ交			
339	1925	1073	蛋白質分解産物除去法、附蛋白分解産物ヲ含有スル液中ノ糖定量法	文語体	漢カ交			
340	1925	1073	所謂紡錘螺旋菌共生ニ因スル多發性壞疽性爪圍炎	文語体	漢カ交			
341	1925	1073	チオノール銀ノ淋菌ニ對スル殺菌力試験	文語体	漢カ交			
342	1925	1073	交感神經に關する學說(三十二)	口語体	漢ひ交	講演	講演という欄に書かれている。	
343	1925	1073	歐米ニ於ケル輸血法ノ現況(十一)	口語体	漢カ交			
344	1925	1073	現代の社會は如何なる治療家を要求するや	文語体	漢ひ交			
345	1925	1073	肺結核治療の社會的施設に就て	口語体	漢ひ交			
346	1925	1073	フランシス結核事業に就て(上)	口語体	漢ひ交			
347	1925	1073	性病の社會的意義並に其對策についての社會衛生學的考察	口語体	漢ひ交			
348	1925	1073	兒童身體の均衡則	口語体	漢ひ交			
349	1925	1073	醫街拾遺(其百二十六)眞實ニ符合セヌ檢案書	口語体	漢カ交			
350	1925	1073	史談 ゲーテとヨハン子ス、ミュルレル	口語体	漢ひ交			
351	1925	1073	東京醫學會例會 活動性結核ノ診断及豫後推定ヲ目的トスル余沈現象ニ關スル研究	文語体	漢カ交			
352	1925	1073	所謂振顫麻痺ト嗜眠性腦炎後同病類似症狀ヲ呈セルモノトノ標本比較示説	文語体	漢カ交			

353	1925	1073	抗體形成ト網狀織内皮細胞	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
354	1925	1073	消化器粘膜ノ沈降反應	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
355	1925	1073	藥物學 四鹽化炭素ノ藥理作用	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
356	1925	1073	人及ビ動物結核ニ於ケル異型結核菌ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
357	1925	1073	結核菌ノ發育ト瓦斯ノ存在トノ關係	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
358	1925	1073	トウオルト氏結核菌分離法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
359	1925	1073	肺炎菌ノ可溶性特異物質ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
360	1925	1073	扁桃腺ノ傳染ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
361	1925	1073	胃潰瘍ト結核トノ關係	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
362	1925	1073	原因不明ノ血尿	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
363	1925	1073	腸「チフス」ノメルクロクロム療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
364	1925	1073	小兒蕁麻疹ノペプトン療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
365	1925	1073	腺病質ノ豫後	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
366	1925	1073	濕疹ノ療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
367	1925	1073	雜事	文語体	漢カ交			
368	1925	1096	フェニール脂肪酸ニ於ケル重結合ノ生物學的意義(其一)血液像ニ及ボス作用ニ就テ	文語体	漢カ交			
369	1925	1096	血糖量ト腦脊髄液糖量ノ相互的關係ニ就テノ知見補遺	文語体	漢カ交			
370	1925	1096	血液殘餘窒素ノ正常價ニ就テ 附。三鹽化醋酸使用上ノ注意	文語体	漢カ交			
371	1925	1096	講演 交感神經系統ニ關スル學說(四二)	口語体	漢カ交	講演		
372	1925	1096	東京醫學會例會 脊髄橫行損傷ノ患者供覽殊ニ骨成生ニ就テ	文語体	漢カ交			
373	1925	1096	流行性腦炎ノ病理組織的所見	文語体	漢カ交			
374	1925	1096	外科の疾患ニ對スル深部 X 線放射ノ治驗例	文語体	漢カ交			

375	1925	1096	船暈ニ就テ(迷路ノ理學的考察)	文語体	漢カ交			
376	1925	1096	腎臟ノ機能	文語体	漢カ交			
377	1925	1096	十二指腸蟲症ノ自家再感染	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
378	1925	1096	胃癌ノ早期症状トシテノ浮腫	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
379	1925	1096	猩紅熱ノワクチン皮膚反應	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
380	1925	1096	ヒヨレステリンノ治療的効果	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
381	1925	1096	ノバズロールノ利尿作用ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
382	1925	1096	パンチー氏症候群ヲ呈セル先天梅毒	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
383	1925	1096	第三期梅毒患者ノ血液ハ傳染力無シ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
384	1925	1096	「マラリア」ノ如キ熱ヲ有セル梅毒	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
385	1925	1096	母乳榮養兒ノ常習性嘔吐ノ療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
386	1925	1096	小兒濕疹ノ非經口的蛋白療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
387	1925	1096	X線照射ヲ受ケタル母ノ兒ニ就テ	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
388	1925	1096	渴ニヨル幼兒ノ「コラップス」	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
389	1925	1096	先天性眼球振盪症	文語体	漢カ交			翻訳
390	1925	1096	雜事	文語体	漢カ交			
391	1926	1097	朝鮮ニ於ケル癩治療ノ成績竝ニ癩患者隔離ニ對スル意見 / 志賀潔/1	文語体	漢カ交			
392	1926	1097	肺結核の治療に就ての篠原昌治/8	口語体	漢カ交			
393	1926	1097	蛋白分解産物ニ關スル臨牀的竝ニ實驗的研究 第二。實驗的ペプトン尿ノ検査法	文語体	漢カ交			
394	1926	1097	フェニール脂肪酸ニ於ケル重結合ノ生物學的意義 其二。酵素ニ及ボス作用	文語体	漢カ交			
395	1926	1097	連鎖狀球菌ノ研究ト猩紅熱及ビ遷延性心臟内膜炎ニ關スル最近ノ業績	口語体	漢カ交	講演		
396	1926	1097	交感神經系統に關する學說(四十三)	口語体	漢カ交			

397	1926	1097	佛教の醫學	口語体	漢ひ交			
398	1926	1097	(Das Auslandsdeutschum)海外在留獨逸人	口語体	漢ひ交			
399	1926	1097	英國の花柳病豫防事業	口語体	漢ひ交			
400	1926	1097	醫術拾遺	口語体	漢ひ交			
401	1926	1097	獨逸醫事雜誌の發達	口語体	漢ひ交			
402	1926	1097	社會衛生學ニ於ケル結核	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
403	1926	1097	社會病ノ病原菌ト素質	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
404	1926	1097	精神變質ヲ伴ヘル家族的特有性震顛症	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
405	1926	1097	牡蠣ノ取締	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
406	1926	1097	急性猩紅熱性多發性關節炎	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
407	1926	1097	胃及十二指腸潰瘍ノアルカリ療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
408	1926	1097	赤痢ノ血清及ピワクチン療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
409	1926	1097	猩紅熱ノ抗毒素療法	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
410	1926	1097	雜事	文語体	漢ひ交			
411	1926	1118	計測上より見たる肺結核及腦溢血死亡者の體質 附、長谷川(卯)博士の所謂健康、結核及卒中體型に就て	文語体	漢ひ交			
412	1926	1118	宇和島藩の醫學	口語体	漢ひ交			
413	1926	1118	宗元時代ニ於ケル外國醫學ノ輸入(承前)	文語体	漢カ交			
414	1926	1118	何故に非醫者は効果を奏するか?(第二)	口語体	漢ひ交			
415	1926	1118	診療過誤ニ對スル醫師ノ責任(承前)	口語体	漢カ交			
416	1926	1118	記述的・分析的心理学の根本意義に就て(二)	口語体	漢ひ交			翻訳
417	1926	1118	インドの田舎ニ於ケル醫療狀況	文語体	漢カ交			翻訳
418	1926	1118	西洋小兒科史	口語体	漢ひ交			
419	1926	1118	日本に於ける女子共有の民俗の考證(承前)	口語体	漢ひ交			

420	1926	1118	モルモット疑義、附、 鳩文字の事	両方	漢ひ交		最初の部分のみ文語体 で、本文の内容は口語体 になっている。なお、外 国語の表記(Doctor ドク トル)についての言及も ある。	
421	1927	1119	醫史料(一)	文語体	漢ひ交			
422	1927	1119	フーフェランドと温 泉治療	口語体	漢ひ交			
423	1927	1119	宋元時代ニ於ケル外 國醫學ノ輸入(承前)	文語体	漢カ交			
424	1927	1119	計測上より見たる肺 結核及腦溢血死亡者 の體質(承前)附長谷 川(卯)博士の所謂健 康結核及卒中體型に 就て	文語体	漢ひ交			
425	1927	1119	災害ト肺結核	文語体	漢カ交			
426	1927	1119	醫史講話	口語体	漢ひ交	講演?	講演という欄ではないも の、タイトルから講演 というものに近いと見ら れる。	
427	1927	1119	記述的・分析的心理 學の根本意義に就て (三)	口語体	漢ひ交			翻訳
428	1927	1119	何故に非醫者は効果 を奏するか(第三)	口語体	漢ひ交			翻訳
429	1927	1119	日本に於ける女子共 有の民俗の考證(承 前)	口語体	漢ひ交			
430	1927	1119	開業醫家の經濟的將 來	口語体	漢ひ交		のだ	
431	1927	1119	震動覺	文語体	漢ひ交			
432	1927	1130	支那ノ古代ヨリ近古 ニ至ル藥物分類ノ變 遷ニ就テ	口語体	漢カ交			
433	1927	1130	一殺人未遂例の鑑定 (承前)	口語体	漢ひ交			
434	1927	1130	東洋ニ於ケル脚氣病 理ノ歴史的研究(東 洋ニ於ケル脚氣病ノ 醫史學的研究第二 編)(承前)	文語体	漢カ交			
435	1927	1130	何故に非醫者は何故 に効果を奏するか (十)(終)	口語体	漢ひ交			翻訳
436	1927	1130	社會的政策ト反社會 的現象	口語体	漢ひ交			翻訳
437	1927	1130	記述的・分析的心理 學考(十)	口語体	漢ひ交			翻訳

438	1927	1130	醫學的心理學(五)	口語体	漢ひ交			
439	1927	1130	醫學修業の改革に就て(承前)	口語体	漢ひ交			
440	1928	1131	鎌倉末期の皇室に於ける疾病と醫道	口語体	漢ひ交			
441	1928	1131	中風(腦溢血)ノ歴史的病理學	文語体	漢カ交			
442	1928	1131	醫學的心理學(六)	口語体	漢ひ交			
443	1928	1131	徳川時代に渡來の外人と學術上に接觸したる日本人(四)	口語体	漢ひ交			
444	1928	1131	松下見林	口語体	漢ひ交			
445	1928	1131	杏林叢談	文語体	漢ひ交			
446	1928	1131	病神	文語体	漢カ交	摘録		
447	1928	1131	眼病ト呪療法	文語体	漢カ交	摘録		
448	1928	1131	結核病學ノ歴史的發達	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
449	1928	1131	ベートホーヴェンノ耳病及び最後ノ疾病	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
450	1928	1131	文政壬午天行厲氣揮霍療亂病雜記	文語体	漢カ交	史料	文政5年(1819年)のものである。	
451	1928	1131	雜録	文語体	漢ひ交			
452	1928	1142	戸田旭山のことづも	口語体	漢ひ交			
453	1928	1142	徳川時代に渡來の外人と學術上に接觸したる日本人(十五)	口語体	漢ひ交			
454	1928	1142	醫學的心理學(十五)	口語体	漢ひ交			
455	1928	1142	親子鑑別の史的考證竝に日本文學に現はれたる親子の鑑別に就て(二)	口語体	漢ひ交			
456	1928	1142	南冥問答(四)	文語体	漢カ交			
457	1928	1142	鳩野宗巴と關孝和の數學竝に科學史の一般考察(承前)	口語体	漢ひ交			
458	1928	1142	大觀本草ニ所載スル藥物ノ原植物ニ關スル考察(其八)	文語体	漢カ交			
459	1928	1142	獨逸西南學派の歴史哲學(六)	口語体	漢ひ交			
460	1928	1142	記述的・分析的心理学考(一九)	口語体	漢ひ交			翻訳
461	1928	1142	義眼ノ歴史	文語体	漢カ交	摘録		

462	1928	1142	ロキタンスキーノ液體病理學	文語体	漢カ交	摘録		
463	1928	1142	尿素成合百年	文語体	漢カ交	摘録		翻訳
464	1928	1142	雑録	文語体	漢ひ交			
465	1929	1143	メソポタミアの醫術	口語体	漢ひ交			
466	1929	1143	徳川時代に渡來の外人と學術上に接觸したる日本人(十六)	口語体	漢ひ交			
467	1929	1143	大觀本草ニ所載スル藥物ノ原植物ニ關スル考察(其九)	文語体	漢カ交			
468	1929	1143	親子鑑別の史的考證竝に日本文學に現はれたる鑑別に就て(三)	口語体	漢ひ交			
469	1929	1143	醫學的心理學(十六)	口語体	漢ひ交			
470	1929	1143	鳩野宗巴と關孝和の數學竝に科學史の一般考察(承前)	口語体	漢ひ交			
471	1929	1143	南冥問答(五)	文語体	漢カ交			
472	1929	1143	杏林叢談	文語体	漢ひ交			
473	1929	1143	高野長英遺著遺墨集序	口語体	漢ひ交			
474	1929	1143	我邦漢方醫及び蘭方醫の最初の解剖に關する讀史餘談	口語体	漢ひ交			
475	1929	1143	嗅診斷法	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
476	1929	1143	「リペミー」ニ關スル古記録	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
477	1929	1143	今大路家記鈔(承前)	文語体	漢カ交	史料	文語体というより、漢文訓読文に近く、漢字の比率が高い。	
478	1929	1143	雑録	文語体	漢ひ交			
479	1929	1154	醫師法制定の由來(承前)	口語体	漢ひ交			
480	1929	1154	近代の佛國の名醫ウイダル、シカール兩博士の物故を悼む(承前)	口語体	漢ひ交			
481	1929	1154	我邦漢方醫及び蘭方醫の最初の解剖に關する讀史餘談	口語体	漢ひ交			
482	1929	1154	醫學的心理學(二十五)	口語体	漢ひ交			
483	1929	1154	廣瀨元恭と甲斐の朋友	文語体	漢ひ交			

484	1929	1154	墮胎史考(二)	口語体	漢ひ交			
485	1929	1154	大觀本草ニ所載スル 藥物ノ原植物ニ關ス ル考察(其十五)	文語体	漢カ交			
486	1929	1154	徳川時代に渡來の外 人と學術上に接觸し たる日本人(二十三)	口語体	漢ひ交			
487	1929	1154	無冤録に就て(三)	口語体	漢ひ交			
488	1929	1154	「チステルナ」穿刺ノ 歴史	口語体	漢カ交	摘録		
489	1929	1154	小石元俊ノ佚事	口語体	漢カ交	摘録		
490	1929	1154	人工鑛泉歴史	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
491	1929	1154	砂糖ノ歴史	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
492	1929	1154	局所麻酔ノ歴史	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
493	1929	1154	女醫ノ歴史	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
494	1929	1154	今大路家記抄(承前)	文語体	漢カ交	史料	文語体というより、漢文 訓読文に近く、漢字の比 率が高い。	
495	1929	1154	雜録	文語体	漢ひ交			
496	1930	1155	紅夷外科宗傳、金瘡 跌撲療治之書及び外 科訓蒙圖彙の三書考	文語体	漢ひ交			
497	1930	1155	司馬凌海傳	口語体	漢ひ交			
498	1930	1155	現代の佛國の名医ウ イダル、シカール兩 博士の物故を悼む (承前)	口語体	漢ひ交			
499	1930	1155	醫學的心理學(二十 六)	口語体	漢ひ交			
500	1930	1155	徳川時代に渡來の外 人と學術上に接觸し たる日本人(二十四)	口語体	漢ひ交			
501	1930	1155	大觀本草ニ所載スル 藥物ノ原植物ニ關ス ル考察(其十六)	文語体	漢カ交			
502	1930	1155	明治維新前後の衛生 書	口語体	漢ひ交			
503	1930	1155	墮胎史考(承前)	口語体	漢ひ交			
504	1930	1155	マーチソントクルシ エマンノ著書	口語体	漢カ交	摘録		
505	1930	1155	正倉院御物漢藥	口語体	漢カ交	摘録		
506	1930	1155	腹水穿刺ノ歴史	口語体	漢カ交	摘録		
507	1930	1155	膀胱鏡ノ歴史	口語体	漢カ交	摘録		翻訳

508	1930	1155	古代ノ麻醉藥	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
509	1930	1155	今大路家記鈔(承前)	文語体	漢カ交	史料	文語体というより、漢文訓読文に近く、漢字の比率が高い。	
510	1930	1155	雑録	文語体	漢ひ交			
511	1930	1166	眼科醫療手引草は眼目精要の改題せるものなり	文語体	漢ひ交			
512	1930	1166	徳川時代に渡來の外人と學術上に接觸したる日本人(三十四)	口語体	漢ひ交			
513	1930	1166	南米旅行醫事叢談(アマゾン醫事)(承前)	口語体	漢ひ交			
514	1930	1166	天野松齋傳	口語体	漢ひ交			
515	1930	1166	漫談	口語体	漢ひ交		注釈は文語体で書かれている。	
516	1930	1166	人間と歴史	口語体	漢ひ交			
517	1930	1166	外界の實在性の信仰の起源及びその權利に就て(六)	口語体	漢ひ交		生姜酒という、最後に附したものは文語体で書かれている。	翻訳
518	1930	1166	斷種ノ歴史	口語体	漢カ交	摘録		
519	1930	1166	「アイヌ」ノ醫學的迷信	口語体	漢カ交	摘録		
520	1930	1166	岡田靜安傳	口語体	漢カ交	摘録		
521	1930	1166	「レントゲン」療法ノ變遷	口語体	漢カ交	摘録		
522	1930	1166	詩人ハイ子ノ疾病	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
523	1930	1166	雑録	文語体	漢ひ交			
524	1931	1167	山田大圓先生傳	文語体	漢ひ交			
525	1931	1167	五十年前に日本に於ける獨逸語敎授	口語体	漢ひ交			翻訳
526	1931	1167	醫學的心理學(二十八)	口語体	漢ひ交			
527	1931	1167	徳川時代に渡來の外人と學術上に接觸したる日本人(三五)	口語体	漢ひ交			
528	1931	1167	南米旅行醫事叢談(承前)	口語体	漢ひ交			
529	1931	1167	人間と歴史(二)	口語体	漢ひ交			
530	1931	1167	外界の實在性の信仰の起源及びその權利に就て(七)	口語体	漢ひ交			翻訳
531	1931	1167	菌類食用ノ歴史	口語体	漢カ交	摘録		

532	1931	1167	黴毒ノ異名	口語体	漢カ交	摘録		
533	1931	1167	基督教ノ沐浴制	口語体	漢カ交	摘録		
534	1931	1167	ラエン子ック以前ノ 聴診	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
535	1931	1167	ウンナノ業績	口語体	漢カ交	摘録	注釈は、文語体で書か れている。	翻訳
536	1931	1167	雑録	文語体	漢ひ交			
537	1931	1178	結核研究史概観	文語体	漢ひ交			
538	1931	1178	醫學者としての大村 兵部大輔(益次郎)	口語体	漢ひ交	(演説)	演説というサブタイトル がある。	
539	1931	1178	醫學的心理學(三十九)	口語体	漢ひ交			
540	1931	1178	歐亞交通初期に於ける 奇藥龍涎香(八)	口語体	漢ひ交			
541	1931	1178	キリアムハーバー	口語体	漢ひ交			
542	1931	1178	ベルツ先生内科醫局 當直日誌(承前)	混用	漢ひ交		614 頁において「久振り にて愉快の當直をしまし た」という部分を除いて、 文語体で書かれている。	
543	1931	1178	子育巾着ト嚙粉方	口語体	漢カ交	摘録		
544	1931	1178	森養竹ノ祖先	文語体	漢カ交	摘録		
545	1931	1178	ボンノ醫家ナッセ氏	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
546	1931	1178	「カットグート」ノ消 毒	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
547	1931	1178	百年前ノ虎列刺豫防	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
548	1931	1178	雑録	文語体	漢ひ交			
549	1932	1179	田村玄仙について	口語体	漢ひ交			
550	1932	1179	高良齋先生自筆蘭語 文書の紹介殊に蘭文 「日本疾病志」につい て	口語体	漢ひ交			
551	1932	1179	牧野貞喜公と醫事行 政	文語体	漢ひ交			
552	1932	1179	「明治十年以後の東 大醫學部回顧談」の 補遺	口語体	漢ひ交			
553	1932	1179	醫學的心理學(感情 續き)	口語体	漢ひ交			
554	1932	1179	ベルツ先生内科醫局 當直日誌(承前)	文語体	漢ひ交			
555	1932	1179	アリストテレスの生 命論	口語体	漢カ交	摘録		

556	1932	1179	腋臭	口語体	漢カ交	摘録		
557	1932	1179	ファラデー	口語体	漢カ交	摘録	名前に傍線、国名に二重傍線。	翻訳
558	1932	1179	ダルウィンの世界旅行	口語体	漢カ交	摘録	名前に傍線、国名に二重傍線。	翻訳
559	1932	1179	雑録	口語体	漢ひ交			
560	1932	1190	江戸時代に於ける雷汞の研究	口語体	漢ひ交			
561	1932	1190	朝鮮醫籍考(承前)	口語体	漢ひ交			
562	1932	1190	温泉と信仰(承前)	口語体	漢ひ交			
563	1932	1190	我醫學に使用せらるゝ解剖學語彙の變遷(承前)	口語体	漢ひ交			
564	1932	1190	堤它山	口語体	漢ひ交			
565	1932	1190	解毒石(承前)	口語体	漢ひ交			
566	1932	1190	神經病と精神分析(八)	口語体	漢ひ交			翻訳
567	1932	1190	精神乖離症性思考(十)	口語体	漢ひ交			翻訳
568	1932	1190	ベルツ先生内科醫局當直日誌(承前)	混用	漢ひ交		日記のようなものである。	
569	1932	1190	史料 醫制史料(八)	口語体	漢ひ交			
570	1932	1190	菊花	口語体	漢カ交	摘録		
571	1932	1190	黴菌ノ發見者	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
572	1932	1190	雑録	口語体	漢ひ交			
573	1940	1275	繪巻物所載の病に関する醫史學的考察	口語体	漢ひ交			
574	1940	1275	朝鮮傳染病史	口語体	漢ひ交			
575	1940	1275	「解體新書」及び「外科訓蒙圖彙」に現れたるヴェザリウスの解剖圖に就て	口語体	漢ひ交			
576	1940	1275	高良齋の蘭文書翰に就て	口語体	漢ひ交			
577	1940	1275	疾病・醫師・醫藥に就てのフリードリッヒ大王の見解	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
578	1940	1275	古代「ハンザ」都市ベルゲン(ノールウェー)に於けるドイツ外科醫	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
579	1940	1275	乾燥症	口語体	漢カ交	摘録		翻訳

580	1940	1275	雑録	口語体	漢ひ交			
581	1940	1286	富士川游先生を弔ふ	口語体	漢ひ交			
582	1940	1286	服部甫菴の傳	口語体	漢ひ交			
583	1940	1286	平野革谿の事蹟	口語体	漢ひ交			
584	1940	1286	安政五年父が翻刻せる蘭文「濟生三方附醫戒」に就て	口語体	漢ひ交			
585	1940	1286	動物療法	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
586	1940	1286	百二十年前の氣象病理學的概念	口語体	漢カ交	摘録		翻訳
587	1940	1286	支那流行病史概説	口語体	漢カ交	摘録		
588	1940	1286	雑録	口語体	漢ひ交			

<資料3> 『海と空』の<内容><表記><文体>

#	年度	号数	タイトル	文体	文の表記	欄の名称	備考	翻訳
1	1921	1(1)	發刊の辭	口語体	漢ひ交			
2	1921	1(1)	測風氣球上昇速度の觀測(第一報)	口語体	漢ひ交	論説		
3	1921	1(1)	大正十年四月十三日-十七日の黄砂に就て	文語体	漢ひ交			
4	1921	1(1)	海上氣象觀測に就て	口語体	漢ひ交			
5	1921	1(1)	印度に於ける南西の信風の起因	口語体	漢ひ交	紹介		翻訳
6	1921	1(1)	關口技師消息	口語体	漢ひ交	雑報		翻訳
7	1921	1(1)	オレゴンとカリフォルニアに於ける最低氣温の豫報	口語体	漢ひ交	紹介		翻訳
8	1921	1(8)	瓶の行衛(その一)	口語体	漢ひ交	論説		
9	1921	1(8)	低氣壓新説雑談	口語体	漢ひ交	論説		
10	1921	1(8)	ニゲリアノ風ト天候ト雨量	口語体	漢カ交	紹介		翻訳
11	1921	1(8)	某年月日某時の標準温度を表はす式	口語体	漢ひ交	紹介		翻訳
12	1921	1(8)	岡田博士歸朝	口語体	漢ひ交	雑報		
13	1921	1(8)	大森虎之助氏の訃	口語体	漢ひ交	雑報		
14	1931	11(1)	論説報文 神戸に於ける上層氣流の變化に就いて	口語体	漢ひ交	論説		
15	1931	11(1)	紹介 太氣の遠望度に就いて	口語体	漢ひ交	紹介		
16	1931	11(1)	不防壓式顛倒寒暖計の讀取から海洋觀測深度の算出	口語体	漢ひ交	雑報		
17	1931	11(1)	航海上より見たる海水の種類	口語体	漢ひ交	雑報		
18	1931	11(12)	大氣の振動に就て(一)	口語体	漢ひ交	論説		
19	1931	11(12)	昭和六年六月二日本州中部に發生した深層地震に就て	口語体	漢ひ交	論説		
20	1931	11(12)	自記風信器用ペンに就て	口語体	漢ひ交	論説		
21	1931	11(12)	測候瑣談	口語体	漢ひ交	雑報		
22	1931	11(12)	寄贈交換雜誌報告類	不明	不明	雑報	単語が並べられているだけで、文がない。	
23	1931	11(12)	新聞切抜日記	不明	不明	雑報	単語が並べられているだけで、文がない。	
24	1941	21(1)	光電管應用の野外地震計	口語体	漢ひ交	論説	ここから横書きになっている。	

25	1941	21(1)	地震に関する二三の実験(第二報)「地殻變動と地震」	口語体	漢ひ交	論説		
26	1941	21(1)	濕球寒暖計の示度に就いて	口語体	漢ひ交	論説		
27	1941	21(1)	新舊兩地中寒暖計の比較觀測結果	口語体	漢ひ交	論説		
28	1941	21(1)	室内に於ける温度及濕度の觀測結果	口語体	漢ひ交	論説		
29	1941	21(1)	裏日本の雪	口語体	漢ひ交	要報		
30	1941	21(1)	雑誌會記事	不明	不明			
31	1941	21(1)	新聞切抜記事	不明	不明			
32	1941	21(1)	海洋學會會計決算報告	不明	不明			
33	1941	21(12)	海流の微分方程式の新しい解法	口語体	漢ひ交	論説		
34	1941	21(12)	風に對する地形の影響の二例	口語体	漢ひ交	論説		
35	1941	21(12)	大氣の波動に就いて	口語体	漢ひ交	論説		
36	1941	21(12)	津浪の研究(第三報)特殊の灣形海灣の振動の實驗に就いて	口語体	漢ひ交	論説		
37	1941	21(12)	月次會記事	口語体	漢ひ交	雜報		
38	1941	21(12)	雑誌會記事	口語体	漢ひ交			
39	1941	21(12)	新聞切抜記事	不明	不明		画像の劣化により、把握できない。	
40	1945	25(1)	近距離自記視程計の試作	口語体	漢ひ交	論説		
41	1945	25(1)	颱風の高さ	口語体	漢ひ交	論説		
42	1945	25(1)	淺海用被壓顛倒寒暖計	口語体	漢ひ交	論説		
43	1945	25(1)	水藻から出る氣泡の觀察	口語体	漢ひ交	論説		
44	1945	25(1)	空襲時の雲觀察記	口語体	漢ひ交	雜報		
45	1945	25(2)	海面からの蒸發に就て	口語体	漢ひ交	論説		
46	1945	25(2)	海水の垂直安定度に就て	口語体	漢ひ交	論説		
47	1945	25(2)	海洋に於ける安定度振動に就て	口語体	漢ひ交	論説		
48	1945	25(2)	村居漫筆	口語体	漢ひ交	雜報		

<資料 4> 新聞の告知文の<内容><表記><文体>⁸⁰

新聞名	年度	内容	団体名	表記	文体
読売新聞	1883	郵便受け取り締め切り日時に関する公告	不明 ⁸¹	漢カ交	文語体
読売新聞	1883	貨物列車の運行休止に関する公告	不明	漢ひ交	文語体
読売新聞	1885	現金業務の分散のため、新たな事務所を設けるといふ公告	大蔵省	漢ひ交	文語体
読売新聞	1885	貯金業務の分散のため、新たな事務所を設けるといふ公告	逓信局	漢ひ交	文語体
読売新聞	1886	株主総会の臨時開催に関する公告	日本郵船会社	漢カ交	文語体
読売新聞	1888	身元不明の変死体の特徴をあげ、身元を特定しようとする麴町区役所の公告	麴町区役所	漢カ交	文語体
読売新聞	1888	東京府内の住宅、及び土地の売買に興味のある者の連絡を待つという公告	東京府庁	漢カ交	文語体
読売新聞	1888	入札者の申し込み締め切りを案内する公告	茨城県庁	漢カ交	文語体
読売新聞	1890	第十回東京獣医者免許試験に関する公告	農商務省	漢カ交	文語体
読売新聞	1893	入札者の申し込み締め切りを案内する公告	東京市参事会	漢ひ交	文語体
読売新聞	1893	石炭の入札を希望する者の申し込み締め切りを案内する公告	内務省庶務局	漢ひ交	文語体
読売新聞	1893	工事の入札を希望する者の申し込み締め切りを案内する公告	文部大臣官房 会計課	漢ひ交	文語体
読売新聞	1893	物品購買を希望する者に対する公告	北海道庁	漢ひ交	文語体
読売新聞	1893	入札者の申し込み締め切りを案内する公告	東京市参事会	漢ひ交	文語体
読売新聞	1893	購買入札の詳細を案内する公告	陸地測量部	漢ひ交	文語体
読売新聞	1893	電気工事の入札を求める者に対して案内する公告	工兵第一方面 横須賀支署	漢ひ交	文語体

⁸⁰ 団体名が記されていないもの、画像の劣化で団体名などが特定できない場合や、内容をもとに団体名を推測した。なお、網掛け部分はまったく同じ内容のものを指す。

⁸¹ 団体名が記入されていない。以下の<不明>も同様である。

読売新聞	1894	工事の入札を希望する者の申し込み締め切りを案内する公告	内務省庶務局	漢カ交	文語体
読売新聞	1894	物品公売を希望する者に対する公告	横須賀鎮守府造船部	漢カ交	文語体
読売新聞	1900	工事の入札を希望する者の申し込み締め切り及び手続きを案内する公告	神奈川県庁	漢カ交	文語体
朝日新聞	1908	木材販売に関する広告	帝室林野局	漢カ交	文語体
朝日新聞	1908	川砂などの入札者に対する案内の公告	大阪市役所	漢カ交	文語体
朝日新聞	1909	工事請負入札に関する公告	第16師団経理部	漢カ交	文語体
朝日新聞	1909	物品購買、及び工事請負に関する案内の公告	大阪市役所	漢カ交	文語体
朝日新聞	1911	土地の払い下げに関する案内	神奈川県庁	漢カ交	文語体
朝日新聞	1911	工事請負入札に関する公告	神奈川県庁	漢カ交	文語体
朝日新聞	1912	物品購買に関する広告	神戸通信管理局	漢カ交	文語体
朝日新聞	1912	物品購買、及び工事請負に関する案内の公告	大阪市役所経理課	漢カ交	文語体
朝日新聞	1912	臨時汽車の二等賃金半減に関する公告	西部鉄道管理局	漢カ交	文語体
朝日新聞	1912	物品購買入札に関する広告	通信省大阪出張所	漢カ交	文語体
毎日新聞	1910	ダイナマイト購買に関する広告	臨時海軍建築部支部	漢カ交	文語体
毎日新聞	1910	入札に関して案内する公告	呉海軍経理部	漢カ交	文語体
毎日新聞	1910	林産物公売に関する公告	鳥取小林区署	漢カ交	文語体
毎日新聞	1910	物品購買に関する広告	神戸通信管理局	漢カ交	文語体
毎日新聞	1918	判決の公示催告	大阪区裁判所	漢カ交	文語体
毎日新聞	1918	判決の公示催告	大阪区裁判所	漢カ交	文語体
中外物価新報	1885	郵便没書を公開する公告	— ⁸²	漢カ交	文語体
中外物価新報	1885	東京府土木工事入札に関する公告	東京府庁	漢カ交	文語体
中外物価新報	1885	預金政策の変更に知らせる公告	大蔵省	漢カ交	文語体
中外物価新報	1885	軍馬の飼料の入札に関する公告	陸軍軍馬局	漢カ交	文語体
中外物価新報	1886	郵便の配達日程を知らせる公告	東京郵便局	漢カ交	文語体

⁸² 画像が劣化しており、判明が困難である。

中外物価新報	1886	宅地に関する公告（10月6日付）	東京府庁	漢カ交	文語体
中外物価新報	1886	宅地に関する公告（10月5日付）	東京府庁	漢カ交	文語体
中外物価新報	1886	郵便船の出航改正に関する公告	日本郵船会社	漢カ交	文語体